にて疑ねども。極樂に參らんと思心なきは。迴向發願心かけて往生すまじき者也。

一。上人宣。生身の佛此本尊に入給へば。本尊の御眼に見へ奉は。頓て生身の御眼にみへ奉と思べし。本尊の御耳に申す事聞れ奉るは。やがて生身の御耳にきかれ奉と思べし。かやうに思へば本尊に向奉功德目出度事也。云云。

以上六項。閑亭後世物語に出づ。

一。律師隆寛なり。申されけるは何故上人の仰には。禪勝房は身獨り往生すべき者にては無なりと。

隆寛律師略傳。勅修御傳等に出づ。

一。信空上人いはく。先師法然上人あさゆふをしへられし事也。念佛申にはまたく樣もなし。たゞ申せば極樂にむまるとしりて。心を至して申せばまいる事也。ものをしらぬうへに。道心もなく。いたづらにゆへなきことをいふ也。さいはん口にて。阿彌陀佛を一念十念にても申せがしと候ひし事也。又御往生の後。三井寺の住心房と申す學生ひじりに。ゆめのうちに問れても。阿彌陀佛はまたく風情もなく。たゞ申す事也と答へられたりと。大谷の月忌の導師せらるとて。おほくの人の中にて說法にせら

れ候きと。

白川滑息に出たり。

一。乘願上人のいはく人目をかざらずして。往生の業を相續すれば。自然に三心は具足する也。たとへば葦のしげき池に。十五夜の月のやどりたるは。よそにては月やどりたりとも見えねども。よく〳〵たちよりてみれば。あしまをわけてやどるなる。妄念のあしはしげゝれども。三心の月はやどるなり。これは故上人のつねにたとへにおほせられし事也と。

二十八問答に出たり。

一。隨蓮申さく。故上人は念佛は樣なきをやうとす。たゞひらに佛語を信じて念佛すれば。往生するなりとて。またく三心のことをも仰られざりきと。

勅修御傳に出たり。拾遺古德傳に揭ぐる所は稍異同あり。

一。法然上人言。我是無智之身也。我是破戒身也。雖然依彌陀本願口稱念佛之力可遂決定往生也。云云。

出徹選擇集。

一。師云。聖光房助給阿彌陀佛云をば。人は尼なんどの樣に一と云合たり。未だ我が意を得ざるなり。他力往生とは是をこそいへ。法然上人御房は。もとゞりなき十惡の凡夫と身をなして。佛助け給へと申すをこそ吉けれと仰せられしか云云。

念佛三心要集に出づ。

一。故法然上人の御義は只心に入れ。まごゝろに念佛申すれば三心は其内にあるぞと。されば。こそ法然房が樣なる十惡の身。ゑばうしもなき法然房。破戒無慚なる有漏身の出離生死を思ひ。かねて佛法はみちみち殊なれども我身にたゑたる行なし。皆難行也。學問と云ふとも生死をはなるばかりの學問はゑすまじ。聖敎を見るとも生死をはなるばかりの聖敎をみるべしとも不覺。只世間人の眼のまへにまごゝろなる人の樣になりてこそよからんずれと仰られしなり。

一。法然房の南無阿彌陀佛と云つれば。往生すとありしは有樣共也。

以上二項。西宗要に出づ。

一。最後臨終之時は一向專修之人も可用善知識也。是法然上人御義也。依之上人御在生之時。眞觀房が臨終を見て云く。源空は老身也。汝眞觀は若き身也。老老の師なれば。

我こそ先立べかりつるに。生き留るよ。汝は若ければ遙に吾より後にあるべきに。老たる師に先立て死するは。汝が往生の果報の殊勝なる也。爲汝我許の往生の善知識は爭てか有らんずると。

西宗要に出づ。藤田の決疑鈔見聞に揭ぐる所は文稍異同あり。

一。故上人の仰られ候しは。在家のいとまなからん人は。一萬二萬などをも申べし。僧尼などゝてさまをかへたらんしるしには。三萬六萬などを申べし。いかにもおほく申にすぎたる法門はあるべからず。詮ずるところ此念佛は決定往生の行なりと信をとりぬれば。自然に三心は具足して往生するぞとやす〳〵と仰られき。

念佛往生修行門に出たり。

一。上人おほせられてのたまはく。今度の生に念佛して來迎にあづからんうれしさよとおもひて踊躍歡喜の心のをこりたらん人は。自然に三心は具足したりとしるべし。念佛申ながら後世をなげく程の人は。三心不具の人也。もし歡喜する心いまだをこらずば。漸々によろこびならふべし。又念佛の相續せられん人は。われ三心具したりとしるべし。

一。往生の得否はわが心にうらなへ。その占の様は。念佛だにもひまなく申されば。往生は決定としれ。もし疎相ならば。順次の往生はかなふまじとしれ。この占をしてわが心をはげまし。三心の具すると。具せざるとをもしるべし。

一。たとひ念佛せんもの。十人あらんが中に。九人は臨終あしくて往生せずとも。われ一人は決定して念佛往生せんとおもふべし。

一。自身の罪惡をうたがひて往生を不定に思はんは。おほきなるあやまり也。されば とてふてかゝりてわろからんとにはあらず。本願の手びろく不思議なる道理を心えんがため也。されば念佛往生の義を。ふかくも。かたくも申さん人は。つや〳〵本願の義をしらざる人と心得べし。源空が身も。撿校別當どもが位にてぞ往生はせんずる。もとの法然房にては往生はえせじ。されば としごろならひあつめたる智惠は。往生のためには要にもたつべからず。されどもならひたるかひには。かくのごとくしりたるはばかりなき事也。

一。本願の念佛には。ひとりだちをせさせて助をさゝぬ也。助さす程の人は。極樂の邊地にむまる。すけと申すは。智惠をも助にさし。持戒をもすけにさし。道心をも助にさ

し。慈悲をもすけにさす也。それに善人は善人ながら念佛し。惡人は惡人ながら念佛して。たゞむまれつきのまゝにて。念佛する人を。念佛にすけさゝぬとは申す也。さりながらも惡をあらためて善人となりて念佛せん人は。ほとけの御意にかなふべし。かなはぬ物ゆへに。とあらんかくあらんとおもひて。決定の心をこらぬ人は。往生不定の人なるべし。

一。法爾道理といふ事あり。ほのほはそらにのぼり。水はくだりさまにながる。菓子の中にすき物あり。あまき物あり。これらはみな法爾道理也。阿彌陀ほとけの本願は。名號をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給たれば。たゞ一向に念佛だにも申せば。佛の來迎は。法爾道理にてそなはるべきなり。

一。現世をすぐべき樣は。念佛の申されん樣にすぐべし。念佛のさまたげになりぬべくば。なになりともよろづをいとひすてゝ。これをとゞむべし。いはく。ひじりで申されずば。めをまうけて申べし。妻をまうけて申されずば。ひじりにて申すべし。住所にて申されずば。流行して申すべし。流行して申されずば。家に居て申すべし。自力の衣食にて申されずば。他人にたすけられて申べし。他人にたすけられて申されずば。自

力の衣食にて申べし。一人して申されずば。同朋とともに申べし。共行して申されずば。一人籠居て申すべし。衣食住の三は。念佛の助業也。これすなはち自身安穩にして念佛往生をとげんがためには。何事もみな念佛の助業也。三途へかへるべき事をする身をだにもすてがたければ。かへりみはぐゝむぞかし。まして往生程の大事をはげみて念佛申さん身をば。いかにも〳〵はぐくみたすくべし。もし念佛の助業とおもはずして身を貪求するは。三惡道の業となる。極樂往生の念佛申さんがために。自身を貪求するは。往生の助業となるべきなり。萬事かくのごとしと。勅修御傳にも出づ。

以上七項。念佛問答集に出たり。

一。先師聖光上人云。故上人先唱名號。名號德而妄念自止。願心自生也。何況本願元意爲化亂心難止者也。付妄念難止一向可唱名號也。被仰云云。

一。先師仰候。故上人宣爲往生申念佛之時。此念佛ノ行ヲ心覺大要。付行有勇常欲申念佛者。我身已具三心可思也云云。

一。故上人往生想。普觀メガマシケレハ難及我分。源空住引接想也云云。

一。先師云故上人云。最後之時可成見佛想也。其故見佛前也。往生後也。隔越前來迎見佛思往生者便宜不可爾也云云。

一。歸命想本尊東向奉對行者也。引接想本尊西向。佛後隨往想成也。故上人被仰也云云。

以上五項。浜答授手印疑問鈔に出づ。

一。ある時又の給はく。あはれ此度しおほせばやと。その時乘願房申て云く。上人だにもかやうに不定げなるおほせの候はんには。ましてその餘の人はいかゞ候べき。その時上人うちわらひて。正蓮臺に登らんまでは。いかでかこのおもひはたゆむべきと仰られけり。

閑亭後世物語に出たり。

一。上人のたまはく。諸宗の祖師はみな極樂に生じ給へり。所謂眞言の祖師龍樹菩薩天台の祖師南岳智者。章安。妙樂等。三論の祖師僧叡。華嚴の祖師智儼。法相宗には懷感禪師。本宗をすてゝ。淨土宗に入る。天親菩薩は。法相宗の祖師なり。往生論を作て。極樂をすゝむ。達磨宗の祖師智覺禪師は。上品上生の往生人なり。其外名僧の中に。往生人これ多し。あぐるに遑あらず。

勅修御傳に出たり。

一。上人かたりての給はく。淨土の法門を學する住山者ありき。示云。われすでに此教の大旨を得たり。しかれども信心いまだおこらず。いかにしてか。信心おこすべきとなげきあはせしにつきて。三寶に祈請すべきよし。教訓をくはへて侍しかば。かの僧はるかに程へてきたりていはく。御をしへにしたがひて。祈請をいたし侍しあひだ。あるとき東大寺に詣たりしに。おりふし棟木をあぐる日にて。おびたゞしき大物の材木ども。いかにしてひきあぐべしともおぼえぬを。轆轤をかまへて。これをあぐるに。大木おめ〳〵と。中にまきあげられて。とぶがごとし。あなふしぎと見る程に。おもふ所におとしすへにき。これを見て。良匠のはかりごとなをかくのごとし。いかにいはんや。彌陀如來の善巧方便をやと。おもひしおりに。疑網たち所にたえて。信心決定せり。これしかしながら。日比祈請のしるしなりとかたりき。其後兩三年をへてなん。種々の靈瑞を現じて。往生をとげける。受教と發心とは。各別なるゆへに。習學するには發心せざれども。境界の緣を見て。信心をおこしけるなり。人なみ〳〵に淨土の法門をきゝ。念佛の行をたつとも。信心いまだおこらざらん人は。たゞねんごろに心をかけて。つねに思惟し。また三寶にいのり申べきなりとぞ。仰られける。

淨土隨聞記に出づ。但し彼の記の文は漢語なれども。今は讀み易からんが爲に。勅修御傳に改めて和語となせるものを揭げつ。

一。人々後世の事申けるつゐでに。往生は魚食せぬものこそすれといふ人あり。或は魚食するものこそすれといふ人あり。とかく論じけるを。上人きゝ給て。魚くふものは往生をせんには。鵜ぞせんずる。魚くはぬものせんには。猿ぞせんずる。くふにもよらず。くはぬにもよらず。たゞ念佛申ものの往生はするとぞ。源空はしりたるとぞ仰られける。

勅修御傳に出づ。

五七　修學御物語

一。上人語りての給はく。自他宗の學者。宗々所立の義を各別に心えずして。自宗の義に違するを。これはみなひがごとゝ心えたるは。いはれなきことなり。宗々みなを〳〵たつるところの法門各別なるうへは。諸宗の法門一同なるべからず。みな自宗

の義に違すべき條は勿論なり。

一。學問ははじめて見たつるは。きはめて大事なり。師の說を傳習はやすきなり。しかるに我は諸宗みなみづから章疏を見て心えたり。戒律にも中川の少將上人。偸蘭叉といふ。名目ばかりぞきゝつたへたる。さしてはみな見いだしたるなり。法相宗も藏俊にあふといへども。法相を學せず。かの人はゞかりをなしてをしへず。名目ひとつぞきゝとりたる。故慈眼房も分明ならず。小乘戒の事は非學生なり。わづかに理觀ばかりなり。普通によき學生といふも。大乘の戒律にをきては。予がごとく沙汰したるものはすくなきなり。當世にひろく書を披見したることは。だれも覺えず。書を見るにこれはその事を詮にはいふよと。見ることのありがたき事にて侍に。われは書をとりて一見をくはふるに。その事を釋したる書よなとみる德の侍也。詮はまづ篇目を見て大意をとるなりと。

一。われ聖敎を見ざる日なし。木曾の冠者。花洛に亂入のとき。たゞ一日聖敎を見ざりき。

一。建仁二年三月十六日。上人語てのたまはく。慈眼房は受戒の師範なるうへ同宿して。衣食の二事一向この聖の扶持なりき。然れども法門をことゞ〳〵く習たる事はなし。法門の義は水火のごとく相違して。つねに論談せしなり。この聖と源空とは南北に坊をならべて住したりしに。ある時聖の居たまへる坊のまへをすぐるに。聖見たまひて。あの御房やとよび給へば。とまりて緣に居て候と申に。大乘の實智をおこさて。淨土に往生してんやとの給に。往生し候ひなんと答申とき。なにゝさは見えたるぞとのたまふ間。往生要集に見えて候と申に。往生要集の中をも見給たるぞとの給問。いざたれか中を見ざるやらんと申たれば。聖腹立て。枕をもて投打にうち給へば。やはらにげて我坊の方へまかりたれば。をふておはして。はゝきの柄をもて。肩をうちなどし給ひき。又後に文をもておはして。これはいかにいふことばとのたまふ。心の中に無益なり。事の出くれば。いまは。物申さじと誓をおこして。いざいかゞ候らんと申たれば。又腹立て。それらが樣なる人を同宿したるは。か樣の事をもいひ合せん料にてこそあれとの給き。か樣にしてつねにいさかひはせしかども。最後には覺悟房といひし聖に。二字をかゝせて。かへりて弟子に成て。坊舍聖敎のゆづり文をも。もとは讓渡と書れたりしを。とり返して進上と書なをしてたびて。生々世々にたがひに

師弟とならん料に申ぞとの給き。眞言の師範なりし相摸阿闍梨重宴も。最後には受戒の弟子になりて。戒をうけたまひき。正しく三部の灌頂をさづけたまひし。丹後の迎攝房もかへりて弟子となりて。顯宗の法門。ならびに淨土の法門をば源空に習て。つゐに往生をとげにき。當時の院主僧都圓長は。重宴阿闍梨の眞言の弟子なれば。源空には同朋なり。しかるにかの圓長。眞言の教相を重宴阿闍梨に問ければ。心にはおぼゆれども。我は非學生にて。え云ひらかぬぞとよ。法然房に問ていはせて申さんと。重宴のたまひければ。圓長も後には弟子に成て。物習はんと云て。やがて受戒して師弟のふるまひにてありき。最初の師範なりし美作の觀覺得業も。弟子になりて。源空を戒師として受戒し給き。おほくの師範みな弟子と成給し中にも。當時の碩學共の慈眼房の受戒の弟子ならぬはなきに。その師の慈眼房のかへりて弟子に成給たる事は。不思議の事とこそおぼゆれなどさま〳〵かたり給へば。きく人皆隨喜し。不思議の事なりとぞ申あひける。

一。建仁二年九月十九日談義のとき。上人語てのたまはく。弘法大師の十住心論は義釋によりてつくり給へるに。義釋に違することおほし。かの義釋は。善無畏三藏の說

を。一行阿闍梨記せられたるなり。一行はいとまなき人にて。未再治にてやみにしを。のちに再治の本おほし。其中に弘法大師再治の本もある也。義釋には。極無自性心に華嚴般若等の不思議の境界を攝すとこそあるを。弘法大師の再治の本には。般若をばすてゝ。たゞ華嚴を攝すとかゝれたり。又十住心には。華嚴宗ぞと釋せられたり。十住心といふは。異生羝羊心。愚童持齋心。嬰童無畏心。唯蘊無我心。拔業因種心。他緣大乘心。覺心不生心。一道無爲心。極無自性心。祕密莊嚴心なり。始の異生羝羊心は。三惡道なり。この中に修羅を攝す。第二は人道なり。この中にもろ〳〵の儒教の仁義禮智信等を攝するなり。第三は天道なり。これに老莊の教を攝す。第六は法相宗。第七は三論宗。第八は天台宗。第九は華嚴宗。第十は眞言宗なり。はじめの一をのぞきて。餘の九種の住心には。外典內典の種々の諸教。みなそのなかに攝せり。しかれば弘法大師の御心によらば。內外の典籍みなこれを學すべき歟。これによりて。御室も多聞廣學をこのみ。御沙汰ある歟とおぼゆるなり。たゞしこの十住心論の義に大なる難あり。義釋には。あるひはたゞ經を攝すといひ。或はたゞ論を攝すともいへるを。一宗にとりなして。華嚴宗に攝す。法華宗に攝すなど。ひきなされたるは。ひがごとゝおぼゆるなり。も

しその宗に攝して。勝劣を判ぜば。たがひに是非あり。その宗論にをきては。むかしよりいまだことぎれざるものなり。法華宗は華嚴宗よりもあさしといはゞ。すでに法華宗の心に違せり。いかでかをして天台宗とはいふべき。だゞ華嚴宗の心ばかりにてこそはあらめ。宗々たがひに淺深をあらそふ。よそにてたれか定判せん。おほよそ一宗のならひ。一代聖教にをきて。淺深を判ずる。つねのことなり。しかれば一切經は。をなじく釋迦一佛の所說なれども。宗々の所學にしたがひて。淺深勝劣不同なれば。いづれの宗の一切經といふべし。天台宗の一切經あり。華嚴宗の一切經あり。乃至法相三論にも。をの〳〵一切經あるべし。天台宗の一切經のなかには。法華をすぐれたりとするがゆへに。爾前の諸經に相對して。十勝を立たり。華嚴宗の一切經には。華嚴をもちてすぐれたりとす。三論には。諸大乘經顯道無異とはいへども。般若を以て至極とす。法相には。解深密經を以て眞實とす。かくのごとく。をのをの所解不同なるを。をさへて。宗々を十住心にあてゝ。淺深をさだめらるゝ條。そのいひなきことなり。諸宗のならひ。たゞ經ばかりをこそ。淺深をも。勝劣をも。立たることにてあれ。いはんや善無畏の義釋は。すでに經ばかりに約せり。又義釋には。華嚴般若種々不思議の境界

を攝すといへるを。十住心論には。唯華嚴にかぎり。あやまりてその宗までを攝して。般若をば覺心不生心に攝すること。又もちて違せり。かくのごときの義をもちて。ひそかに難勢をくはへたてまつるほどに。いまは二十餘年にもやなりぬらん。源平の亂よりさき。嵯峨に住したりしころ。夢に見るやう。請用して他行したりける。そのあとに。弘法大師より。きとまいらせたまへとて。御使の候けると云をきゝて。心におもふ樣。內々難じ申ことのきこえたるよなと。をもへども。さあらんにつけてもと存じて。ずなはち大師の所へ參ず。五間ばかりなる家の。板敷もなく。へだてもなくて。だゞ內によはうにぬりめぐらしたる壁の。くちもなきのみあり。大師はこのうちにおはしますとおぼゆ。まづ外にて。こはづくろひをしたれば。その壁のうちより。こなたへと仰せらるゝ聲あり。その御聲につきて。入て壁のうちを見れば。さらにその戶なし。かべのくづれたるところのみあり。其くづれよりくぐりいれば。大師。壁のきはにおはしまして。ずなはち胸をあはせて。いだきあふ。大師の御顏は。予が左の肩にをき給。かくて前々難破することどもを。一々に會釋せしめたまふ。これをきけども。なを驚動せず。それはと申て。かさねてその義を難じたてまつらんとすると。おぼしくて夢

さめぬ。のちにこれを案ずるに。難じ申義。みな大師の御心にあひかなへるか。ひしといだきあひたてまつりたることは。御意にかなひたるが。見ゆるなるべし。げにもよく難ぜられたりと。おぼしめせばこそ。夢にもさま〳〵に會釋し給つらめ。凡は後學畏べしと云て。學生はかならずしも。先達なればといふことはなきなり。かの如來滅後五百年に。五百の羅漢あつまりて。婆沙論をつくりしに。九百年に世親いてゝ。俱舍論をつくりて。さきの義を破し給き。義の是非を論ぜんことは。あながちに。上古にもおそるまじきものぞとぞ。おぼせられける。

以上五項。勅修御傳に出たり。

一。一時師語曰法門優劣由宗義轉學者雖多分別之者甚希。我朝眞言乃有二流所謂東寺眞言。天台眞言是也。就中天台所傳眞言其義不如東寺所傳眞言。所以者何。天台一山之內兼學顯密二教而以法花爲宗本意而言天台奧旨者卽眞言也。是乃不出顯宗域內之眞言也。東寺所傳眞言乃言非顯宗之可比等焉。是則顯宗域外之眞言也。又我窺諸宗教相眞言佛心兩宗收取諸宗以爲自宗教相。而廢諸教以立自宗。自餘諸宗不取眞言佛心以爲自宗教相。又不廢彼兩宗故知於宗義則無與此兩宗等者也。

淨土隨聞記に出づ。

一。師在世時三井僧正公胤作淨土決疑鈔三卷破選擇集。其書云法華有卽往安樂之文。觀經有讀誦大乘之句讀誦法華往生淨土是有何妨。然廢讀誦大乘唯立念佛一行。此大錯也。胤公使弟子學佛齋之往而示於師。師披之未終卷而言曰此書不足徧覽。曾聞胤公有優才也。不意出於如此淺語。胤公聞吾立淨土宗必知判教權實。已知判教權實復必知存廢權立實之義。然今何爲難我廢立之義。又以圓頓一實法華反攝爾前觀經讀誦大乘句中以爲所難準的。此亦似忘自宗廢立之旨。胤公若有淺智乃責余言觀經爾前之教。何以圓極法華攝在爾前觀經讀誦大乘句中而廢之乎。然吾立淨土宗通以觀經前後諸大乘經悉攝往生行中而對念佛廢之。何獨遺法華乎。學佛還報。胤公無語。卽燒其書。

淨土隨聞記に出づ。勅修御傳粗之に同じ。

一。沙彌道遍石川入道かたりていはく。故上人示していはく。往生の爲には念佛第一なり。學問すべからずたゞし念佛往生を信ぜん程はこれを學すべき也云云。

東宗要並に和語燈錄に出づ。

五八　立宗につき釋難の御詞

一。上人或時かたりての給はく。われ淨土宗をたつる心は。凡夫の報土にむまるゝことを。しめさんがためなり。もし天台によれば。凡夫淨土にむまるゝことを。ゆるすに似たれども。淨土を判ずる事あさし。もし法相によれば。淨土を判ずる事ふかしといへども。凡夫の往生をゆるさず。諸宗の所談ことなりといへども。すべて凡夫報土にむまるゝことをゆるさゞるゆへに。善導の釋義によりて。淨土宗をたつる時。ずなはち凡夫報土にむまるゝ事。あらはるゝなり。こゝに人おほく誹謗していはく。かならず宗義を立せずとも。念佛往生をすゝむべし。いま宗義をたつる事は。たゞこれ勝他のためなるべし。我等凡夫。むまるゝ事をえば應身應土なりとも足ぬべし。なんぞ強に報身報土の義をたつるやと。この義。一往ことはりなるに似たれども。再往をいへば。その義をしらざるがゆへなり。もし別の宗を立せずば。凡夫報土に生ずる義もかくれ。本願の不思議もあらはれがたきなり。しかれば。善導和尚の釋義にまかせて。かたく報身報土の義を立す。かつ夫れ言ふ所の念佛往生は。是れ何の教何の師に依

ると問はば。既に天台法相にあらず。又三論華嚴にあらず。知らず何を以てこれに答んか。この故に道綽善導のこゝろによりて淨土宗を立つるなり。全く勝他の爲にあらずと。選擇集祕鈔亦此全文を載す。

一。われ一向專念の義をたつるに。人おほく謗じていはく。たとひ諸行を修すといふともまたく念佛往生のさはりとなるべからず。なんぞあながちに一向專念の義をたつるや。これ偏執の義なりと。かくのごとく難をいたすは。此宗のいはれをしらざるゆへなり。經には一向專念無量壽佛といひ。釋には一向專稱彌陀佛名と判ぜり。經釋をはなれて。わたくしに。此義をたてば。誠にせむる所のがれがたし。この難をいたさんとおもはば。先釋尊を謗じ。次に善導を謗ずべし。そのとがまたくわが身のうへにあらずと。

以上二項。淨土隨聞記に出づ。但し彼の記の文は漢語なれども。今は讀み易からんが爲に。勅修御傳に改めて和語となせるものを掲げつ。

一。一時師語曰。一日予遊月輪禪閣之館。適山僧某來會。僧問予曰。聞公立淨土宗爾乎。予答曰然也。又問依何經論立之耶。答曰依善導觀經疏中付屬釋文立之。僧曰。其立宗義何

唯依一文耶。予微笑不答。彼僧還山語寶地眞公曰空公得吾問不能答眞公曰空公不答者非不能矣。以不足答故也。空公於我台宗已爲達人。且廣涉互諸宗神智高邁。予也自料所問淺薄。勿敢輕蔑空公矣。眞公能知予者。圓戒法門乃予之弟子也。

淨土隨聞記に出づ。

五九　大原問答御物語並に說法の御詞

一。一時師語曰。昔時天台座主顯眞以使告曰。久隔面晤。願得相見。以盡道情。他日登山必過我居。後一日過坂本。因告彼禪房座主下山來訪。乃問曰方以何法今生解脫生死。予答曰不如賢慮思擇。座主復曰公是法門達人。必有所決。願爲開示。予曰於爲自身不無所擇唯欲疾得往生極樂耳。座主曰順次往生未見其理。故致此問。亂想凡夫如何可得往生耶。予曰成佛難求往生易得。竊依道綽善導等意。佛本願力以爲强緣。故雖凡夫亦得往生報土也。座主默去。其後座主語人曰然公雖智慧淡遠。聊有偏執失。彼人來語予曰凡人自不知事必起疑念。世間皆爾。何止眞公乎。座主聞之言曰實然。我雖於顯密教鑽仰累年尙爲名利志不在於淨土。未窺道綽善導釋義。自非然。師誰能出此言也。淡懷慚愧。因遂蟄居大

原百日閉戶博閱淨土章疏。而後致書曰我已粗窺淨土法門。伏乞勞屈芳駕相與咨決。予許諾焉。東大寺上人俊乘亦未思決出離道。聞事大喜乃將弟子三十餘輩而來大原。其外諸宗碩學雲集星列。時予廣述淨土法門。問難蜂起奇辯爭馳。予隨所問難一一破立。衆皆感歎伏於予義云云。

淨土隨聞記に出づ。

一。爾時上人。聖道の諸宗は。理ふかく解微にして證を得ること甚難し。此則世くだり人愚にして。機教相違すれば。其修行に堪ずなかく苦海に沈淪して。いまだ涅槃の岸に到らず。淨土の一門は解し易く行じ易ければ得脫最速なり。愚鈍下智を捨ざれば。庸學なを勇あり。破戒重罪を簡ざれば惡人なを生る。行住坐臥を別ざれば。念々に常に行じ。時處諸緣を論ぜざれば。散亂猶唱ふ。其止惡をいへば。念時日の三懺悔を許せり。其修善をいへば。一念十念猶生ると勸たり。和尙の釋證讚に唯有念佛蒙光攝。當知本願最爲强。眞形光明遍法界。蒙光觸者心不退なりといへり。攝取不捨の光益は念々稱名の德をさづく。尤これを信ずべし。尤これを勤べしと。一日一夜詞を盡て淨敎を講說し給へば。聽聞の道俗或は淚を流て仰信し。或は聲を擧て歡喜す云云。

十六門記に出たり。但し勅修御傳並に九卷傳に載する所是と稍同からざれば。左に其の文をかゝぐべし。

上人。法相三論華嚴法華眞言佛心等の諸宗にわたりて。凡夫の初心より佛果の極位にいたるまで。修行の方軌。得度の相貌つぶさにのべ給て。是等の法みな義理ふかく利益すぐれたり。機法相應せば得脫くぴすを迴らすべからず。たゞし源空ごときの頑愚のたぐひは。更にその器にあらざるゆへに。さとりがたく。まどひやすし。しかる間源空發心の後。聖道門の諸宗につきて。ひろく出離の道をとぶらふに。かれもかたくこれもかたし。是則世くだり人をろかにして。機教あひそむくゆへなり。しかるを善導の釋義。三部の妙典のこゝろ。彌陀の願力を强緣とするゆへに。有智無智を論ぜず。持戒破戒をえらばず。無漏無生の國にむまれて。ながく不退を證する事。たゞこれ淨土の一門。念佛の一行なりとて。法藏比丘の因行より。彌陀如來の果德にいたるまで。理をきはめ詞をつくしをはりて。たゞこれ涯分の自證をのぶるばかりなり。また上機の解行をさまたげんとにはあらずとの給ければ。法印よりはじめて滿座の衆みな信伏しにけり。

拾遺古德傳にも出づ。但し文稍略せり。

六〇　宗義解說の御詞

一。上人の給はく。阿彌陀經は。たゞ念佛往生ばかりを說とは。心得べからず。文に隱顯ありといへども。廣略の義をもて心うれば。四十八願をこと〴〵く說給へる經なり。舍利弗。如我今者。讚歎阿彌陀佛。不可思議功德といへる。阿彌陀ほとけの功德は。卽四十八願なり。念佛往生をとくは。その中の第十八の願をさすなり。又此經に一日七日と云へるを。たゞ一日七日に限と意得るは僻事也。善導和尙の觀經の疏に。上品上生の一日七日を釋し給に。從具此功德以下。正明修行時節延促。上盡一形。下至一日一時一念等。或從一念十念。至一時一日一形。大意者。一發心已後。誓畢此生。無有退轉。唯以淨土爲期と判じ給へり。此釋をもて准知するに。阿彌陀經の一日七日も。又如此意得べきも。此釋に三の意あり。一には多より少に至り。二には少より多に至り。三には大意は一發心已後退轉なしといへるなり。初の二は要にあらず。後の一その要なり。所詮は往生の心を發してのち。命終まで退せざる。これを大意とするなり。凡此阿彌陀經は。

我朝に都鄙處々に多く流布せり。法華經と。最勝王經とは。諸宗の學徒兼學すべきよし。桓武天皇の御時。宣旨を下されて。定置れしかば。演說者とて。法華を解說する師は。多くなりたりけれども。暗誦する人なかりければ。法華を暗誦すべきよし。重て宣旨を下されけるのち。持經者多くいできたれり。法華は加樣に宣下によりてこそ。流布せられたれ。阿彌陀經は。其沙汰なけれども。自然に流布して。處々の道場に。みな例時とて。毎日にかならず阿彌陀經をよみ。一切の諸僧。阿彌陀經をよまずといふことなし。これ偏に。淨土教有緣のいたす所なり。ことのおこりを尋れば。叡山の常行堂より出たり。彼常行堂の念佛は。慈覺大師渡唐の時。將來したまへる勤行なりとぞ。

勅修御傳に出たり。

一。上人云。本願至心信樂欲生我國。觀經三心。小經一心。皆三心也。或人問云。阿彌陀經所說一心當我等分云何得意。上人答曰。一代所說彌陀行相不出四十八願之意。願文旣云至心信樂等。知一心者指三心也。

一。祖師傳云。若人問諸行皆本願行乎。應答而言唯然。東宗要。傳通記等にも出づ。

一。祖師云。成佛之光明還照本時之誓願也。

以上三項。決疑鈔に出づ。

一。故上人口傳云。餘善善根不斥。行斥也云云。

決疑鈔裏書に出づ。

一。正信上人自筆記云。先師上人示云。人師釋第二十願或云係念定生願。或云三生果遂願。後義相符源空存念。値彌陀願修念佛行百年之內決定可生極樂。然則曠劫之間今百年之內可見淨土也。一生二生雖不往生第三生決定可遂。自今已後一生不可過五六年。又又生間決定可入淨土故也云云。建長三年後九月二十七日記之。湛空 印證

正信上人自筆記は嵯峨二尊院に在り。これは其取意なりと。東宗要に出たり。

一。尋云於此六部往生經有勝劣乎。答法然上人云有勝劣。無量壽經觀經彌陀經を疏の四に引ける事は。正依の經に限て引く也。觀念法門の般舟經。淨度三昧經十往生經は傍依の經也。

一。法然上人云。彌陀身色等文は三部經を引く也。彌陀身色如金山相好光明照十方者。觀經の正く佛身觀の文の意也。唯有念佛蒙光攝當知本願最爲强者。是れ雙觀經第十

八念佛往生の本願意也。六方如來舒舌證云云者。阿彌陀經念佛證誠の意也。

一。先づ六根淨をだにも日本に得る人無し。性空上人は六根淨を得たりといへども。法然上人は實にはよもゑじ。乙丸が鬼神にて報得の神通ありしが。仕へしかば。それぞおしゑけんと云云。

一。尋云天竺祇園精舍無常院の佛は何佛ぞや。法然上人云既に佛は東向也。病者は西向也といへり。依之天下の人十人は十人ながら彌陀と云ふ云云。

以上四項。西宗要に出づ。

一。月輪禪定殿下御前。寺法師公胤。山僧明禪。聖覺法印。法然上人。此人々被參之時。禪定殿下御不審云。四十八願各願也。釋四十八願一一願言稱我名號。如何。餘人義共存略。其中法然上人答云。四十八願之中。四十七欣慕之願。第十八生因之願也。其中生因故王本願料簡有也云云。

選擇集私記に出づ。

一。祖師云。此經者便因答請開散善。故相從定觀後之三輩亦立觀名也。予相傳此義後值宿蓮房被人傳得故上人自筆抄被文全同今義。

一。祖師云。諸師製疏未必有證。但華嚴澄觀一十八年於清涼山而致祈請。終得文殊教而製八十華嚴經釋。盛行於世。超舊師釋。和國慈覺大師。仁壽元年作金剛頂經疏一部七卷。齊衡二年作蘇悉地經疏七卷。其功已畢。心念此疏通佛意否。若不通者不流傳世矣。安置疏於佛像前。七日七夜剋念祈願。至第五日時夢當午正中。仰見日輪。而以弓射之。其箭當日輪。動轉。覺後深悟達於佛意。可傳後世云云。

以上二項。傳通記に出づ。

一。祖師會云權者入滅隨機不同。如彼龍樹菩薩入滅或云爲引正太子所害。或云如蟬蛻遷化。大權所作隨機不定。兩篇滅相各且可載。機見不同云云。

傳通記に出づ。此の文は新修往生傳に。二人の善導を載して。其の入滅の相互に同からざれども。それは機見の不同に過ぎざるべしと會し給へる詞なり。

六一　聖光房に示されける御詞

一。先師即聖光上人云。上人御事。故法印被奉讃之事思出。始參東山御菴室。夏五月比也。于時

上人六十五。辨阿三十六也。先心中思念。上人勸化不可過我所存云云。爰辨阿遁世之由
令申之處。上人問云汝爲出離行何法耶。答申云勸人建五重塔候。又常時行法者念佛候
也云云。上人云所立塔者如善導御意者判雜行而名疎雜之行。所行之念佛者判正行正
所勸之行也。但念佛言廣通八宗九宗。汝念佛何耶被問之時。不知智分邊際如望大海。又
云汝天台宗學徒也。仍分別三重念佛義可奉令聞。一摩訶止觀念佛。二往生要集念佛。三
善導勸化念佛也云云。此三重被立替事微々細々也。教化及于多時自未至子。是時辨阿
如聞釋尊說法似値善導教化。心大歡喜。解行全學上人行儀。

決答授手印疑問鈔に出たり。聖光上人傳。勅修御傳。銘心鈔粗之に同じ。

一。小僧某甲上人の御手より未だ此選擇を傳はらざる以前に。上人予に向ひてつぶ
さに以て告げての給はく。世の人は。みな因緣ありて道心をばをこす也。いはゆる父
母兄弟にわかれ。妻子朋友にはなるゝ等也。しかるに源空は。させる因緣もなくして
法爾法然と道心ををこするゆへに。師匠名をさづけて法然となづけ給ひし也。さ
れば出離の志しいたりてふかゝりしあひだ。もろ〳〵の教法を信じて。もろ〳〵
の行業を修す。をよそ佛教おほしといへども。詮ずるところ戒定惠の三學をばすぎ

ず。いはゆる小乘の戒定惠。顯教の戒定惠。密教の戒定惠なり。しかるに
わがこの身は。戒行にをいて一戒をもたもたず。禪定にをいて一もこれをえず。智惠
にをいて斷惑證果の正智をえず。これによて戒行の人師釋していはく。尸羅清淨な
らざれば。三昧現前せずといへり。又凡夫の心は物にしたがひてうつりやすし。たと
ふるにさるのごとし。まことに散亂してうごきやすく。一心しづまりがたし。無漏の
正智なにゝよりてかをこらんや。もし無漏の智劍なくば。いかてか惡業煩惱のきづ
なをたゝむや。惡業煩惱の絆を斷ぜずば。何ぞ生死繫縛の身を解脫する事をえんや。
かなしきかな〳〵。いかゞせん〳〵。こゝにわがごときは。すでに戒定惠の三學のう
つはものにあらず。この三學の外にわが心に相應する法門ありや。わが身にたへ
たる修行やあると。よろづの智者にもとめ。もろ〳〵の學者にとぶらひしに。をしゆ
る人もなく。しめすともがらもなし。しかるあひだなげき〳〵經藏にいり。かなしみ
〳〵聖教にむかひて。でづからみづからひらきてみしに。善導和尙の觀經の疏にい
はく。一心專念彌陀名號。行住坐臥不問時節久近。念念不捨者是名正定之業。順彼佛願
故といふ文を見得て後。われらがごときの無智の身は。ひとへにこの文をあふぎ。も

はらこのことはりをたのみて。念念不捨の稱名を修して。決定往生の業因にそなふべし。たゞ善導の遺敎を信ずるのみにあらず。又あつく彌陀の弘願に順ぜり。順彼佛願故の文ふかくたましゐにそみ。心にとゞめたる也。そのゝち惠心の先德の往生要集の文をひらくに。往生之業念佛爲本といひ。又惠心の妙行業記の文をみるに。往生之業念佛爲先といへり。覺超僧都。惠心僧都にとひての給はく。僧都所行の念佛は。これ事を行ずとやせん。これ理を行ずとやせんと。惠心こたへての給はく。心万境にさへぎる。こゝをもてわれたゞ稱名を行ずる也。往生の業には稱名もともたれり。これによて一生の中の念佛。そのかずをかんがへたるに。二十俱胝遍也との給へり。しかれば則源空は。大唐の善導和尙のをしへにしたがひ。本朝の惠心の先德のすゝめにまかせて。稱名念佛のつとめ。長日六万遍也。死期やうやくちかづくによて。又一万遍をくはへて。長日七万遍の行者なりと。

徹選擇集並に決答授手印疑問鈔に出たり。但し彼集の文は漢語なれども。今讀み易からんが爲に。和語燈錄に改めて和語となせるものを揭げつ。

一。上人又告言。有我所造之書。所謂選擇本願念佛集是也。欲以此書祕傳汝也。此書之造

意者。九條殿下向源空而示高命云。每對面之次。念佛往生之義雖度度聞之。卽施卽廢也。請註其文賜予云云。源空蒙此仰。不能辭申。因茲善導之釋義謹以記其文勢。兼又陳其義勢。中略。已造此集畢以進殿下。殿下告上人言。今此書者淨土宗之奧義也。上人在世之時從禪室草菴勿令披露。大師入滅之後從博陸槐門可弘通之。源空雖蒙此炳誡。露命難定今日不知死明日不知死。須以此書密付屬汝。勿及外聞云云。

徹選擇集に出づ。聖光上人傳に載する所は略せり。

一。此奴（編者曰く。聖光上人なり。）三十六と申せし年の五月の比より。法然上人御房に參て四十三の歲の七月まで。辨阿は八年相副進せて淨土の法門を奉被敎候しに。年のよらせ御座て年の暮樣には。常に御覽ずる人をもえ見知らせ給はぬ事に候しかども。上人の仰せ候し樣は。我身今は年闌て日比見たる人をも忘れたれども。手づかの許（卽聖光上人なり）をば忘れぬ也。其故は本山に人々多けれども。年來の間契り有人は證眞寶地房法印也。彼法印は故黑谷慈眼房叡空上人の菩薩戒の弟子なり。我黑谷上人御房の弟子にて有り。彼法印は其御弟子にて御はせしが故に。一室の同朋なる故に二世の契り深し。然るに手自（卽聖光上人なり）彼法印の許にて天台宗の法門を習はれたれば。取分て契り

深き人の弟子が。今我に順ひて此淨土の法門を習ひ傳ると思ひ深き故に。露塵許も忘れ申さぬぞと。常に仰せ給ひし事難忘。哀れに覺へ候て涙も留り候はず云云。

念佛名義集並に念佛三心要集に出づ。

一。聖光上人のいはく。故上人の給はく。われはこれ烏帽子もきざるおとこ也。十惡の法然房が念佛して往生せんといひて居たる也。又愚癡の法然房が念佛して往生せんといふ也。安房の助といふ一文不通の陰陽師が申す念佛と源空が念佛とまたくかはりめなしと。

一。ある時問ていはく。上人の御念佛は智者にてましませば。われらが申す念佛にはまさりてぞおはしまし候らんとおもはれ候はぬ。ひが事にて候やらん。その時上人御氣色あしくなりて。おほせられていはく。さばかり申す事を用ゐ給はぬ事よ。もしわが申す念佛の樣風情ありて申候はゞ。毎日六万遍のつとめむなしくなりて。三惡道におち候はん。またくさる事候はずと。まさしく御誓言候しかば。それより辨阿はいよ〳〵念佛の信心を思ひさだめたりき。

物語集に出たり。但し決答授手印疑問鈔に載するところ稍異同あれば。左に重ねて之をかゝげん。

善導寺上人（即聖光上人）云。有時上人問云。源空念佛與道俗男女念佛同異如何。爰辨阿心中思。本願念者偏仰佛力稱名號不用自力觀念等。故不可依智淺深之由雖令存念一旦御機嫌惡故答申云。爭御念佛不勝諸人念佛可候哉云云。上人云。本願念佛之趣キヲ未被得意。アノ阿波介ガ念佛モ源空ガ念佛モ全以同念佛也。助給阿彌陀佛ト思ヨリ外ニハ不置別念也云云。

決答授手印疑問鈔に出たり。勅修御傳之に同じ。

六二　聖覺法印に示されける御詞

一。有時上人予（即聖覺）に語ての給はく。法相三論天台華嚴眞言佛心の諸大乘の宗。遍學し悉明るに。入門は異なりといへども。皆佛性の一理を悟顯ことを明す。所詮は一致なり。法は深妙なりといへども。我が機すべて及難し。經典を披覽するに其智最愚なり。行法を修習するに其心翻て昧し。朝朝に定めて惡趣に沈んことを恐怖す。夕夕に出離の緣の闕たることを悲歎す。忙忙たる恨には渡に船を失がごとし。朦朦たる憂には闇に道に迷がごとし。歎ながら如來の敎法を習。悲ながら人師の解釋を學。黑谷

の報恩藏に入て一切經を披見することに五遍に及ぬ。然れども猶いまだ出離の要法を悟得ず。愁情彌深。學意增盛なり。爰に善因忽に熟し宿緣頓に顯れ。京師善導和尙勸化の八帖の聖書（上人在世般舟讃未流布故云八帖書）を拜見するに。末代造惡の凡夫出離生死の旨を輒定判し給へり。粗管見していまだ玄意を曉めずといへども。隨喜身に餘り身毛爲竪て。とりわき見こと三遍前後合て八遍なり。時に觀經散善義の一心專念彌陀名號の文に至て。善導の元意を得たり。歡喜の餘に聞人なかりしかども。予が如の下機の行法は阿彌陀佛の法藏因位の昔。かねて定置るゝをやと。高聲に唱て感悅髓に徹り落涙千行なりき。終に承安五年乙丑の春。齡四十三の時。たちどころに餘行をすてゝ一向專修念佛門に入て。始て六万遍を唱。

一。有時上人予（卽聖覺）に示て云。源空已に導和尙の釋に歸して其元意を得たり。其元意とは亂想の凡夫但無觀稱名の一行に依て。佛の本願をもて增上緣として。順次に極樂世界に往生するなり。但自身の往生は決定して疑なし。然に有緣の蒙昧を勸進して淨土に生ぜしめんと欲ふ。所見の義勢是とやせん非とやせん。凡智辨難しと。かく思惟して心に念じ勞ふ夜の夢中に。一人の僧あり腰より上は墨染。裳より下は金色

なる寶衣を著し給。予低頭合掌して問て云。大德は誰人ぞや。靈僧答給はく。我はこれ善導なり。汝專修念佛を弘通せんと欲する料簡の義理我が釋文に違はず。釋文は卽是證を請て定畢ぬ。是故に兼ては又佛意に違はず。よろしく弘通すべし。化益もともも多からん。予伏請て曰。大德然るべくば淨土の敎門。面授口決して自も信じ他をも敎しめ給へ。和尙示給はく。善哉善哉。菩薩大聖。淨土の敎法願に隨て授與せんと。仍て三部契經八軸の金典（今九帖書中除般舟讃）敬て付屬を蒙こと慇懃鄭重なりきと。（勅修御傳等ほゞ之におなじ。）

一。弟子聖覺畏て尋申して云。當今末法は機解味劣にして。如來の敎法に應ぜざれば。多は如法にあらず。聖道門の行人。殊更に虛假を懷けり。かく存じ候は。淨土敎を敬重する執情の故にや。將又此義ありや。上人答給はく。末法の濁世には聖道の虛假。此條異論なし。先哲悉決判せり。淨土の學人も少虛ありといへども。聖道の多分虛假なるには同からず。故に禪林寺の十因に云。夫以衆生無始輪回諸趣。諸佛更出濟度無量。恨漏諸佛之利益。猶爲生死之凡夫。適値釋尊之遺法。盍勵出離之聖行。一生空暮再會何日。眞言止觀之行。道幽易迷。三論法相之敎理奥難悟。不勇猛精進者何修之。不聰明利智者誰學之。朝家簡定賜其賞。學徒競望增其欲。暗三密行忝登遍照之位。餝毀戒質誤居持

律之職。實世間之假名。智者之所厭也。今至念佛宗者。所行佛號。不妨行住坐臥。所期極樂。不簡道俗貴賤。衆生罪重。一念能滅。彌陀願深。十念往生。公家不賞。自離名位之欲。檀那不祈。亦無虛受之罪。況南北諸宗。互諍權實之敎。西方一家。獨無方便之門。といへり。是故に末法には。聖道の行人自然に虛僞を懷き。念佛の行者は多は至誠なり。淨土門の少虛は。機の過にして行體の失にあらず。聖道門の多虛は。行法の咎にして機の失にはあらず。斯乃難行にして機に應ぜざるが故なり。爾れども万機みな僞を懷べきにはあらず。利智精進にして機法相應せば。たやすく道を得べし。混亂すべからず。淨土宗の意は。難を捨てゝ易を取。敢偏執すること勿れ。二道の緣を糺すべし。

一。有時上人予に語ての給く。我が性の分齊何なる大卷の書なりとも。三遍これを閱讀ば。文義を諳記す。本朝將來の諸宗の聖敎廣披に粗幽致を悟得て。皆本宗の印可を蒙りき。

一。有時上人示て云。淨土宗の學者は先此旨を知べし。有緣の人の爲には。身命財を捨ても偏に淨土の法を說べし。自の往生の爲には。諸の囂塵を離て。專ら念佛の行を修すべし。此の二事の外。全他の營なしとぞ仰られける。御遺言誠に貴故に。此を記て末

代に聞しむ。

以上五項。十六門記に出たり。

一。法印（聖覺）ふかく上人の勸化を信敬のあひだ。處々にして說法のたびごとには。彌陀の本願を讚歎し。念佛の功能をほめ申されけるを。上人きゝ給て。これひとへに善導の御方便。機感純熟の折節也。然べき名僧專修念佛の義を信じて所々にして講釋せば。念佛の弘通何事かこれにしかんやと悅仰られて。法印のもとへ申つかはされけるは。法華經の中には定まりて阿彌陀經を副供養せらるゝなればいかなる所にても。機嫌さまてあしからざらん所にては。阿彌陀經につきて四十八願の樣を釋しのべられ候べきよし。くはしく授られけるとなん。

勅修御傳に出たり。

六三　勢觀房に示されける御詞

一。一時師語余（勢觀）曰。吾年十五登天台山。至十七閱六十卷。十八辭山隱居黑谷。此爲偏

棄名利專學佛法也。爾來四十餘年習學天台宗粗得其大意。凡我爲性也雖數卷書讀之至三則明通文義。然宗義淡邃難容易得之。是以學久知其綱領而已。又傍徧窺諸宗敎相顯密諸典及佛心宗無不涉獵。欲求證明咨叩各宗賢哲皆得許可。當初醍醐有三論先達。往述自解彼師默然乃起入室出文櫃十餘合而言曰於我法門付屬無人久來憂之。公已達之。由悉與焉。進士入道阿性共行在座云。師又曰。予曾往謁藏俊僧都談法相宗法門。俊歎曰公也非直也人。雖值西天論主亦不可過焉。智慧淡遠非吾輩所及也。自今而後永獻供物。自其每歲厚贈惠賜。凡遇諸宗高德皆所稱嘆。又本朝渡到聖敎及俗間史傳等無不歷眼。然思出離道身心不安。因閱惠心往生要集彼序云往生極樂之敎行濁世末代之目足道俗貴賤誰不歸者。但顯密敎法其文非一。事理業因其行惟多。利智精進之人未難。如予頑魯之者豈敢矣。是故依念佛一門聊集經論要文披之修之易覺易行云云。凡序者略述一部大旨。今就序文料之此集專依念佛。其事顯然。已而入文尋義建立十門。於中厭離穢土欣求淨土極樂證據三門非是念佛行體。故暫措之。其餘五門正就念佛立之。第九諸行往生從行者樂欲而且明之。是以更無慇懃勸進。其第十門助道人法亦非行體。因今就念佛五門料簡其義。第四正修念佛此爲念佛行體。卽是所助。第五是助念佛方法。卽是能

助。故知惠心之意念佛爲本也。其第六門別時念佛。此爲於長時勤行不能勇進者勸之。與上念佛全非別體也。其第七門念佛利益。此爲於上所明念佛令生信樂考利益文備之。其第八門念佛證據。此爲於上念佛令斷疑念引諸經論證之。然則此集本意唯在念佛亦顯然也。但就正修念佛又有種種念佛。爲初心觀行不堪淡奥者敎色想觀。於中又有別相總相雜略極略觀。又有稱名觀。然慇懃勸進唯在稱名也。又雖以五念門名正修念佛作願迴向非是行體禮拜讚嘆不如觀察。於觀察中獨於稱名丁寧勸之。其爲本意亦顯然也。但於百卽百生義趣讓道綽善導釋不委述之。要集之旨蓋如此也。予故往生要集以爲先導入淨土門。而窺此宗奥旨取善導和尙釋再讀以爲往生不容易矣。三讀乃知亂想凡夫依稱名行決定可得往生也。但於自身出離已得決定。又欲普爲衆生弘通斯道。然時機難計心懷猶豫。一夜夢紫雲大起徧覆四海。雲中出無量光。光中百寶衆鳥翩翩飛散。時予陟高山忽值一高僧。腰下金色宛如佛身。腰上緇衣如尋常僧。高僧云吾是唐善導。汝能弘通專修念佛。故來爲證之。爾來弘法無塞徧至四遠。（選擇集祕鈔等亦載此全文）

一。又一時師召予言曰。汝見選擇集否。予對曰未見。師曰此我所述。汝當見之。我生存間不欲流布。故未許他焉。師曾擢于微恙方其復時月輪禪閣請曰。願師撰集淨土要義爲吾垂

訓。拳拳服膺以備明鑑焉。於是師乃著選擇集贈之。然此集中乃約淨土門中諸行而念佛、與諸行所比論也。是卽淨土宗觀無量壽經之意而已。是故師述其意曰此觀無量壽經若依天台宗意則爾前敎也。故成法華方便。若依法相宗意則爲別時意。然依淨土宗意則一切敎行悉爲念佛方便。故言淨土宗觀無量壽經也。師又曰凡於聖道門皆修三乘四乘因而得三乘四乘果。故諸行與念佛所比校也。然而諸行則非彌陀本願。是故彌陀光明不攝取之。釋尊亦不付屬。故導師曰自餘衆行雖名是善若比念佛者全非比校也。又道綽善導宗義不異。當辨知之。又聖道淨土二門雖異行體是一也。義意可知。

以上二項。淨土隨聞記に出づ。

六四　隆寛律師に示されける御詞

一。常に上人の禪室に參じ。頻りに出離の要道を尋ね申されき。始めには最うちとけ給はざりけれども。往生の志し深き由。懇に述給ひければ。上人大きに驚きて。當時聖

道門の有職にて。大僧正御房（慈鎭和尙）に貴重せられたまふ御身の。此れ程に思ひ入れ給ひける事。返返も有り難くこそ思たまふとて。淨土の法門懇に授け給けり。

隆寛律師略傳。勅修御傳等に出づ。

一。元久元年甲子三月十四日。權律師隆寛。小松殿へ參向の時。上人後戸に出むかひ給て。懷中より一卷の書をとりいだして律師に授給ふ。其言に云。これ月輪殿の仰によりてゑらび進ずる所の選擇集なり。所載要文要義は善導和尙淨土宗を立給ふ肝心なり。早々是を書寫して披見すべし。若不審あらば尋とふべきなり。源空存生の間は祕して他見に及べからず。死後の流行は何事のあらんとぞ仰られける。

隆寛律師略傳。九卷傳。勅修御傳並に選擇集祕鈔等に出たり。

一。隆寛律師のいはく。法然上人のの給はく。源空も念佛の外に。毎日に阿彌陀經を三卷よみ候き。一卷は唐。一卷は吳。一卷は訓なり。しかるにこの經に詮ずるところ。たゞ念佛申せとこそとかれて候へば。いまは一卷もよみ候はず。一向念佛を申候也と。隆寛（毎日に阿彌陀經四十八卷よまれき）すなはち意えて。やがて阿彌陀經をさしをきて。念佛三万遍を申しきと。

遊行集に出たり。隆寛律師略傳。勅修御傳ほゞ之におなじ。

六五　禪勝房に示されける御詞

一。上洛して吉水の御房にまいりて。無智の罪人の。極樂淨土に往生することの候なるを。うけたまはらんと申ければ。上人仰られけるは。その極樂のあるじにて。おはします阿彌陀佛こそ。なに事もしらぬ罪人共の。諸佛菩薩にも捨はてられ。十方の淨土にも門をさゝれたるともがらを。やす〳〵とたすけすくはんといふ願をおこして十方世界の衆生を來迎したまふ佛よ。かしこくぞおもひより給ける。心をしづめて。よく〳〵きかるべし。唐土より日本國にわたりたる一切經は。五千餘卷あり。その中に雙卷無量壽經。觀無量壽經。小阿彌陀經。これを淨土の三部經となづけて。往生極樂のやうをときたまへる經なり。むかし。法藏比丘と申しゝ入道。四十八の願をたてゝ。極樂淨土を建立して。一切衆生を平等に往生せさせんれうに。われ佛になりたらんときの名を。稱念せん衆生を來迎せんといふ願をおこして。眞實に往生せんと思て。

念佛申衆生をむかへをきて。佛になし給なり。四十八願の中の第十八の願これなり云云。

勅修御傳並に九卷傳に出づ。

一。阿彌陀佛は。一念とゝなふるを一度の往生にあてがひてをこし給へる本願也。かるがゆへに十念は十度むまるゝ功德也。一向專修の念佛者になる日よりして臨終の時にいたるまで申たる一期の念佛をとりあつめて。一度の往生は必ずする事也。

一。念佛申す機は。むまれつきのまゝにて申す也。さきの世の業によりて。今生の身をばうけたる事なれば。この世にてはえなをしあらためぬ事也。たとへば女人の男子にならばやとおもへども。今生のうちには男子とならざるがごとし。智者は智者にて申し。愚者は愚者にて申し。慈悲者は慈悲ありて申し。慳貪者は慳貪ながら申す。一切の人みなかくのごとし。されば。こそ阿彌陀ほとけは十方衆生とて。ひろく願をばをこしてましませ。

一。一念十念にて往生すといへばとて。念佛を疎相に申せば。信が行をさまたぐる也。念念不捨といへばとて。一念十念を不定におもへば。行が信をさまたぐる也。かるが

ゆへに信をば一念にむまるととりて。行をば一形にはげむべし。

一。一念を不定におもふものは。念々の念佛ごとに不信の念佛になる也。そのゆへは。阿彌陀佛は一念に一度の往生をあてをき給へる願なれば。念々ごとに往生の業となる也。

以上四項。和語燈錄に出づ。

一。案内をしらざる人は。機をうたがひて往生せざるなり。道心者智者などの念佛こそ。往生はし給らめ。あけくれ罪をのみつくり。一文字をだにもしらざらんものは念佛申とても往生不定なりと疑ものは。本願には善惡の機をかねて。おこし給へりといふ事をしらぬ人なり。先世の業によりて。むまれたる身をば。今生の中にあらためなをす事なし。されば女人の男子とならんとをもへども。今生の中にはかなはざるがごとし。念佛の機は。たゞむまれつきのまゝにて。念佛をば申なり。智者は智者にて申てむまれ。愚者は愚者にて申てむまれ。道心ある人も申てむまれ。道心なき人も申てむまる。乃至富貴のものも。貧賤のものも。慈悲あるものも。慈悲なきものも。欲ふかきものも腹あしきものも。本願の不思議にて。念佛だにも申せば。いづれもみな往生

するなり。念佛の一願に萬機をおさめておこし給へる本願なり。たゞこざかしく機の沙汰をばせずして。ねんごろに念佛だにも申せば。みなこと〳〵く往生するなり。念佛往生の義をかたくもふかくも申さん人をば。つや〳〵本願をしらざる人と心得べし。源空が身も。撿校別當などのくらゐにてぞ。往生はせんずる。もとの法然房にてはえし候はじ。としごろ習たる智惠は。往生のためには。要にも立べからず。されども習たるしるしには。かくのごとく知たるはばかりなき事なり。

一。淨土一宗の。諸宗にこえ。念佛一行の諸行にすぐれたりといふ事は。萬機を攝するかたをいふなり。理觀。菩提心。讀誦大乘。眞言。止觀等。いづれも佛法のをろかにましますにはあらず。みな生死滅度の法なれども。末代になりぬれば。ちからをよばず。行者の不法なるによりて。機がおよばぬなり。時をいへば。末法萬年ののち。人壽十歲にゝゞまり。罪をいへば。十惡五逆の罪人なり。老少男女のともがら。一念十念のたぐひにいたるまで。みなこれ攝取不捨のちかひにこもれるなり。このゆへに諸宗にこえ。諸行にすぐれたりとは申なり。

以上二項。勅修御傳。並に九卷傳に出たり。編者曰く。此の兩傳によるに。禪勝房は百餘日上人の禪

室に參じて。不審なる事どもをたづね申けりとありて。勅修御傳には八條の問答を出だし。九卷傳には都べて十條を出せり。其中問答體をなせるものは。之を上の問答の內に編入せりといへども。唯此の二條のみは往復の文體にあらざるが故に。別ちて此に收錄するものなり。

一。いけらば念佛の功つもり。しなば往生うたがはず。とてもかくても。この身にはおもひわづらふ事ぞなきと心得て。ねんごろに念佛して。畢命を期とせよ。

出所前におなじ。

一。上人の座下を辭し。下向の暇を申ける時。上人京づとせんとて。聖道門の修行は智惠をきはめて生死をはなれ。淨土門の修行は愚癡にかへりて極樂にむまると心得べしとぞ仰られける。

傳通記。勅修御傳等に出づ。

六六　信寂房に示されける御詞

上人。播磨の信寂房におほせられけるは。こゝに宣旨の二つ侍るを。とりたがへて。鎭西の宣旨をば。鎭西へくだしたらんには。人もちゐてん

やとの給に。信寂房しばらく案じて。宣旨にても候へ。とりかへたらんをば。いかゞもちゐ侍べき。と申ければ。御房は道理をしれる人かな。やがてさぞ帝王の宣旨とは。釋迦の遺敎なり。宣旨に二つありといふは。正像末の三時の敎なり。聖道門の修行は。正像の時の敎なるがゆへに。上根上智のともがらにあらざれば。證しがたし。たとへば。西國の宣旨の如し。淨土門の修行は。末法濁亂の時の敎なるがゆへに。下根下智のともがらを器とす。これ奥州の宣旨の如し。しかれば。三時相應の宣旨。これをとりたがふまじきなり。大原にして。聖道淨土の論談ありしに。法門は牛角の論なりしかども。機根くらべには。源空かちたりき。聖道門はふかしといへども。時すぎぬれば。いまの機にかなはず。淨土門はあさきにたれども。當根にかなひやすしといひし時。末法萬年餘經悉滅。彌陀一敎利物偏增の道理におれて。人みな信伏しきとぞ仰られける。

勅修御傳。九卷傳等に出づ。

六七　聖護院宮無品親王に仰せられける御詞

往生極樂の御願。御念佛にしかず。佛說ての給はく。光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と。

九卷傳等に出づ。

六八　平重衡に示す御詞

誠に御出家こそ功德廣大なれ共。御ゆるされなくば。四部の弟子なれば。御髮をつけながらも。戒を持せ給はん事子細有べからずとて。戒を授たてまつりて。粗存知の旨を說たまふ。難受人身を受ながら。むなしく三途に歸給はんことは。かなしみても猶餘あり。歎ても又つくべからず。然に穢土を厭。淨土を欣ひ。惡心をすて。善心を發し給はん事は。三世の諸佛も定めて隨喜し給ふべし。其にとりて出離の道まち〳〵也といへども。末法濁亂の機には稱名をもて勝たりとす。罪業深重の輩も愚癡闇鈍の族も。唱ればむなしからざるは彌陀の本願也。罪ふかければとて卑下し給べからず。十惡五逆も迴心すれば往生し。一念十念も心をいたせば來迎す。經には四重五逆諸衆生。一聞名號必引接と說き。釋には忽遇往生善知識。急勸專稱彼佛名と判ぜり。たとひ

無間の重罪なりといふとも。稱名の功德にはかつべからず。利劍卽是彌陀號。だもてば魔緣ちかづかず。一聲稱念罪皆除。唱へば罪業殘りなし。罪障を消滅して極樂の往生をとげん事。他力本願にしくはなし。御榮果昔も今もためしなき御身也。然ども有爲のさかひのかなしきは。未だ生をかへざるにかゝるうき目を御らんずるうへは。穢土はうたてき所ぞとうれへ思召捨て。ふかく彌陀の本願をたのみましまさば。御往生疑有べからず。これ全く源空が私の詞に非ず。彌陀因位の悲願。或は釋尊成道の時。說をき給へる經敎なり。一念も疑心なく。一心に稱名をたしなみ給ふべし云云。

九卷傳に出づ。平家物語に出す所。粗〻之に同じ。源平盛衰記に揭ぐるものは異同少からず。

六九　熊谷次郎直實に示す御詞

罪の輕重をいはず。たゞ念佛だにも申せば。往生するなり。別の樣なし。乃至。無智の罪人の念佛申て往生する事。本願の正意なり云云。

修御傳。九卷傳等に出づ。

第七　勸說話　熊谷次郎直實に示す御詞

七〇　宇都宮彌三郎頼綱に示す御詞

承元二年十一月八日。宇都宮の彌三郎頼綱。上人の勝尾の草庵にたづね參じて。念佛往生の法門御敎訓をかうぶる時。上來雖說定散兩門之益。望佛本願意在衆生。一向專稱彌陀佛名の文を二たび誦し給て。往生せうせじは。わどのの心ぞ。一向に念佛せば。往生疑ひなしとの給ひける。

勅修御傳に出づ。但し九卷傳に載する所稍同じからざれば。左に之を揭ぐべし。

上來雖說定散兩門之益。望佛本願意在衆生。一向專稱彌陀佛名と判じて。一切善惡の凡夫。口稱念佛によりて無漏の報土に往生すること。善導和尙彌陀の化身として。かやうに釋し給へる上は。此度の往生は入道殿の心なるべし。

七一　甘糟太郎忠綱に示す御詞

弓箭の家業をもすてず。往生の素意をもとぐる道侍らば。願くは御一言を承らんと申ければ。上人仰らるゝ樣。彌陀の本願は機の善惡をいはず。行の多少を論ぜず。身の

淨不淨をえらばず。時處諸緣をきらはざれば。死の緣によるべからず。罪人は罪人ながら。名號を唱へて往生す。これ本願の不思議也。弓箭の家に生れたる人。たとひ軍陣にたゞかひ。命を失ふとも。念佛せば。本願に乘じ。來迎に預らん事。ゆめ〳〵疑べからず。

勅修御傳。九卷傳等に出づ。源平盛衰記に揭ぐる所は之と同じからず。後の眞僞未詳の中に出すべし。

七二　大和入道親盛に示す御詞

昔親盛法師語予云。上人在世之時奉問云。御往生之後淨土法門不審可問誰人乎。上人答云。聖光房金光房委知所存。彼等爲遠國能化。爲汝等不易。京中者聖覺法印亦知我義。若有滅後疑者可問此人也云云。

決答授手印疑問鈔に出づ。聖光上人傳粗〻之に同じ。

七三　高階保遠入道西忍に示す御詞

上人。念佛往生の道こまかにさづけ給けり。中にも不輕大士の杖木瓦石をしのびて。

四衆の緣をむすび給しがごとく。いかなるはかり事をめぐらしても。人をすゝめて念佛せしめたまへ。あへて人のためには侍らぬぞと。かへす〳〵附屬し給ければ。ふかくおほせのむねをまもるべきよしをぞ申ける。

勅修御傳に出づ。本朝祖師傳記繪詞に載する所更に詳なり。

七四　元强盜の張本なりし敎阿に示す御詞

上人の給はく。まづ念佛には。甚深の義といふことなし。念佛申ものは。かならず往生すとしるばかり也。いかなる智者學生なりとも。宗にあかさゞらん義をば。いかてかつくりいだしていふべき。ゆめ〳〵甚深の義あるらんと。ゆかしく思はるべからず。念佛はやすき行なれば。申人はおほけれども。往生するものゝすくなきは。決定往生の故實をしらぬゆへなり。去月に。又人もなくて。御房と源空と。たゞ二人ありしに。夜半ばかりに。しのびやかに起居て。念佛せしをば。御房は。きかれけるかと仰らるれば。

寢耳に。さやらんと承候きと申ければ。それこそ。やがて決定往生の念佛よ。虛假とて。かざる心にて申念佛が。往生はせぬなり。決定往生せんとおもはば。かざる心なくして。まことの心にて申べし。いふかひなきおさなきもの。もしは畜生などにむかひてはかざる心はなけれども。朋同行はいふにをよばず。その外つねになれ見る妻子眷屬なれども。東西を辨ふる程の者になりぬれば。それがためにかならずかざる心はおこるなり。人の中にすまんには。その心なき凡夫はあるべからず。ずべて親きも疎も貴も賤も人にすぐたる往生のあだはなし。それがためにかざる心をおこして。順次の往生をとげざればなり。さりとて獨居もかなはず。いかゞして人目をかざる心なくして。まことの心にて。念佛すべきといふに。つねに人にまじりて。しづまる心もなく。かざる心もあらんものは。夜さしふけて。見る人もなく。聞人もなからん時。しのびやかに起居て。百遍にても千遍にても。多少こゝろにまかせて。申さん念佛のみぞかざる心もなければ。佛意に相應して。決定往生はとぐべき。この心を得なば。かならずしも夜にはかぎるべからず。朝にても。晝にても。暮にても。人のきゝはゞかりなからん所にて。つねにかくのごとく申べし。所詮。決定往生をねがふまことの念佛申さ

んずるかざらぬ心ねは。たとへば盗人ありて。人の財を思がけて。ぬすまんとおもふ心は底にふかけれども。面はさりげなき樣にもてなして。かまへてあやしげなる色を。人に見えじとおもはんがごとし。そのぬすみ心は。人またくしらねばすこしもかざらぬ心なり。決定往生せんとする心も。又かくのごとし。人おほくあつまり居たらん中にても。念佛申いろを。人に見せずして。心にわするまじきなり。其時の念佛は。佛よりほかは。だれかこれをしるべき。佛しらせ給はば。往生なんぞ疑はんと。仰られければ。敎阿彌陀佛申さく。決定往生の法門こそ。心得候ぬれ。すでにさとりきはめ侍り。この仰をうけ給はらざらましかば。このたびの往生はあぶなく候はまし。但この仰のごとくにては。人のまへにて。念珠をくり。口をはたらかす事は。あるまじく候やらんと。上人の給はく。それ又僻韻なり。念佛の本意は。常念を詮とす。されば念々相續せよとこそすゝめられたれ。たとへば世間の人を見るに。おなじ人なれども豪憶あひわかれて。憶病の者になりぬれば。身のためくるしかるまじき。聊のいかりをも。をぢをそれて。逃かくる。豪の者になりぬれば。命をうしなふべきこはき敵のしかも逃かくれなば。たすかるべきなれども。すこしもをそれず。ひとしざりもせざるがごとし。

これがやうに。眞僞の二類あり。地體いつはり性にして。かざる心あるものは。身のために要なき聊の事をも。かならずいつはりかざるなり。もとよりまことの心ありて。虛言せぬものは。聊の矯餙しては。身のため。おほきにその益あるべき事なれども。身の利養をば。かへりみず。底にまことありて。すこしもかざる心なし。これみな本性にうけてむまれたるところなり。そのまことの心のものゝ。往生せんとおもひて。念佛に歸したらんは。いか成所。いか成人のまへにて申とも。すこしもかざる心あるまじければ。これ眞實心の念佛にして。決定往生すべきなり。なんぞこれをいましめん。又地體はいつはり性にして。世間さまにつけては。いさゝか不實の事もありしかども。知識にあひて發心して。往生せんとおもふ心。ふかくなりぬれば。念々相續せんとおもひて。いかなる所。いかなる人のまへにても。無想にひた申にもうさん者。これ又眞實心の念佛なれば。決定往生すべきなり。またく制の限にあらず。いまいふところは。三心の中に一心もかけぬれば。往生せずと釋し給へるに。三心の中の眞實心。人ごとに發がたければ。その眞實心を發べきやうを。いふばかりなり。されば。とて。たゞのとき。念佛な申そとはいかゞすゝむべきと。又敎阿彌陀佛申さく。さきに仰の侍つるや

うに。夜念佛申さんには。かならず起居候べきか。又念珠袈裟をとり侍べきかと。上人の給はく。念佛の行は行住坐臥をきらはぬ事なれば。ふして申さんとも。居て申さんとも。心にまかせ。時によるべし。念珠をとり袈裟をかくる事も。又折により。體にしたがふべし。たゞ詮ずる所。威儀はいかにもあれ。このたびかまへて。往生せんとおもひて。まことしく念佛申さんのみぞ大切なると。仰られければ。教阿彌陀佛。歡喜踊躍し。合掌禮拜して罷出にけり。乃至其後上人の御まへにて。法蓮房この事を申いだして。さる御事の侍けるにやと申されければ。その事なり。さる舊盜人と聞置て侍しほどに。對機說法して侍き。一定心得たりげにこそ見えしかとぞ仰られける。

勅修御傳。九卷傳等に出づ。

七五　尼女房達に示す御詞

元久二年正月廿一日。尋常なる尼女房達。あまた上人の御房へ參りて。戒をも受たてまつり。念佛往生の様をも承らんと申ければ。上人先戒を授られ。其後。淨土の法門を

のべ給に。まづ聖道淨土の二門をわけ。聖道難行の様を仰らるゝに。殊に天台宗に對して釋し給ひ。四種三昧の難行なる事をのべ給て。南岳大師入滅のきざみ。諸の弟子につげての給はく。汝等。方等般若四種三昧にをいて。身命をかへりみず。修行すべくば。われ十年世にありて。汝等を供給すべしとの給に。苦行かなひがたきによりて。弟子等返答に及ばざりしかば。大師入滅し給き。師已に入滅せんとし給へるが。しばらくも存命せんとの給はんをば。いかなる妄語をもかまへて。師の命を惜まんためには。修行してんとこそ申しつべけれども。始終かなふべからざる間。返答せずしてやみにしかば。師すなはち入滅し給へり。何況。當時の我等をや。傳敎大師。弟子達に四種三昧を一づゝあてゝ。修行せさせらるゝ事侍き。慈覺大師は。常座三昧にあたりて修行し給けるに。常座難行なりとて。あらためて常行三昧となると申せり。かくのごときの修行は。上古より修しがたき事顯然なり。何況當世の凡夫をやとて。聖道門の難行なる事。淨土門の修しやすき樣。こま〳〵と仰られて。所詮。末代の佛法修行。その證をうる事。只念佛の一行なり。是則彌陀の本願に順ずるがゆへなりとの給ければ。信心實をいたし。低頭合掌して歸りにけり。

勅修御傳に出づ。

七六　室の泊の遊女に示す御詞

室の泊につき給に。小船一艘ちかづきたる。これ遊女がふねなりけり。遊女申さく。乃至。この罪業おもき身。いかにしてかのちの世たすかり候べきと申ければ。上人あはれみての給はく。げにもさやうにて。世をわたり給らん罪障。まことに。かろからざれば。酬報またはかりがたし。もしかゝらずして。世をわたり給ぬべきはかりごとあらばずみやかにそのわざをすて給べし。もし餘のはかりごともなく。又身命をかへりみざるほどの道心いまだおこりたまはずば。たゞそのまゝにてもはら念佛すべし。彌陀如來は。さやうなる罪人のためにこそ。弘誓をもたてたまへる事にて侍れ。たゞふかく本願をたのみて。あへて卑下する事なかれ。本願を憑て念佛せば。往生うたがひあるまじきよし。ねんごろにをしへ給ければ。遊女隨喜の涙をながしけり。

勅修御傳。九卷傳等に出づ。

七七　母儀に登山の許を乞ふ御詞

此小童を相具して。母の所に行て此由を語。母聞て。仁者をば無人の可留とぞ深思へば。菩提寺に住つるさへ猶遠と思なり。況や登山せんをや。思よらざることなりといへば。小童。昔本師釋迦尊は御年十九にして。父の大王に忍。密に王宮を出て。終に成佛して。無量の衆生を濟度し給へり。今自は生年十三。暇を悲母に申し。法山に登り。出家修學して。父母の深恩を報じ皆佛道に引導し。我も人も悟を開たてまつらん。返々歎給ことなかれ。努々恨給はざれと申せば。母の曰。乃至。小童又傳聞。參河守大江定基と云し人は出家學道し。老母の許を蒙て大唐に渡り。彼國にして圓通大師の號を得。本朝の名を上たり。それ佛も流轉三界中。恩愛不能斷。棄恩入無爲。眞實報恩者と說給ふ。自もはやく四明に登。すみやかに一乘を學て二親の菩提を訪なば。豈眞實の報恩に非らんやと。條條に理をつくして申ければ。母も理に屈して泣泣暇を許けり。

十六門記に出づ。勅修御傳並に九卷傳に載する所稍略せり。

七八　皇圓阿闍梨に閑居を求むる御詞

有時師に白て言。出家受戒の本望已に足ぬ。今はすなはち居を山林に卜。跡を煙霞に

暗さんと。師これを聞て。受難人身を受たり。苟に遁世せらるべし。又遇難佛法に遇り。何ぞ修學せざらんや。登山の驗に六十卷を讀て後本意を遂べしと諫ければ。われ閑居を欣樂ことは。名利の散亂を免れ。靜に經論章疏を學せん爲なり。貴命はなはだ背難。修學もとも本意なりと。

十六門記に出たり。勅修御傳等ほゞ之におなじ。但し十卷傳。正源明義抄等に載するところは大に之に異なる。後の眞僞未詳の中に錄する所の如し。

七九　東大寺大勸進職を辭する御詞

上人申されけるは。源空が好所は念佛勸進の行なり。起立塔像の大勸進職は其器量にあらず。若勸進の職に應ぜば世務心を惱て。念佛退轉しなん。念佛永廢せば唯佛意に背のみにあらず。兼ては亦和尙の意に違ん。若念佛退轉なからんと欲はゞ造興成難かるべし。造營功畢ずんば豈命旨に背ざらんや。且は聖見を慚。且は勅命を恐。然ば則一旦の宣旨に隨はんよりは永辭せんにはしかずとて。固辭退申されけり。

十六門記に出たり。拾遺古德傳粗ゞ之に同じ。勅修御傳。九卷傳。源平盛衰記等の文は略せり。

八〇　皇圓阿闍梨の事につき悲歎の御詞

有時上人悲歎しての給はく。當世諸方の道俗を見聞するに。無道心の者は。悉名利に住して。修行すること能ざれば。生死を出るにあらず。道心智者は。今度輒生死を出難と謂て。遠來緣を期す。是の故に順次の得脫はなはだ思を絕たり。信心の手を空して法財をとらず。所詮此は是或は淨土の緣なくして。累世難行の機なり。或は淨土の緣あれども。いまだ良師に遇ざるの人なり。かくの如の二機は。淨土の易行易往なることをしらず。必永劫の行に趣。爰をもて源空が初の師。肥後阿闍梨皇圓は。宏才博覽にして。智慧深遠なりしかども。我が機分をはかるに。今度生死を出難し。蛇身長命の果報を受て。彌勒の出世に値て。得道せんと欲しけり。其の願空からず。大蛇の身を受て。遠江國笠原の庄櫻池（水西町許）一に住給。智慧あるが故に。生死の離がたきことを知り。道

心あるが故に慈尊に遇んことを願。然どもいまだ淨土の法門を知給はず。誠に淺猿きことなり。此條源空が深歎なり。爾時われもし此の法門を知得たらましかば。信不信はいざしらず。勸化し申ん者を。哀なるかな。悲かな。出離の甚難ことを深悲て。蛇身三熱の者を受給ん。

十六門記に出づ。淨土隨聞記粗〻之に同じ。勅修御傳。及び九卷傳の文は甚だ略せり。

八一　御流罪の時門弟等に示されける御詞

一。凡往生極樂の一門を開て。他に隨ひ。機にかうぶらしめて授る中。自邪義をかまへて師說と號する間。一身にかうぶらしめて。遙に万里の浪に趣て。但此事をいたむにはあらず。昔敎主釋尊の因行の時。檀施のあまり。父の大王にいましめられて。かすかに成山にこめられ給ひしか共。其志おこたりたまはずして。ます〳〵佛道を修行し給しかば。彼山を釋迦山と名付て。終に正覺の庭と成にけり。諸佛菩薩亦復如此。愚老何

ぞ衆生をわたさゞらんやと。

九卷傳に出づ。

一。流刑さらにうらみとすべからず。そのゆへは。齡すでに八旬にせまりぬ。たとひ師弟おなじみやこに住すとも。婆婆の離別ちかきにあるべし。たとひ山海をへだつとも。淨土の再會なんぞうたがはん。又いとふといへども。存するは人の身なり。おしむといへども。死するは人のいのちなり。なんぞかならずしも。ところによらんや。しかのみならず。念佛の興行。洛陽にして年ひさし。邊鄙におもむきて。田夫野人をすゝめん事。年來の本意なり。しかれども時いたらずして。素意いまだはたさず。いま事の緣によりて。年來の本意をとげん事。ずこぶる朝恩ともいふべし。此法の弘通は。人はとゞめんとすとも。法さらにとゞまるべからず。諸佛濟度のちかひふかく。冥衆護持の約ねんごろなり。しかればなんぞ世間の譏嫌をはゞかりて。經釋の素意をかくすべきや。たゞしいたむところは。源空が興ずる淨土の法門は。濁世末代の衆生の決定出離の要道なるがゆへに。常隨守護の神祇冥道。さだめて無道の障難をとがめたまはんか。命あらんともがら。因果のむなしからざる事を。おもひあはすべし。因緣つきず

ば。なんぞ又今生の再會なからんやとぞおほせられける。

勅修御傳に出づ。十六門記拾遺古德傳の文は略せり。

一。月輪の禪定殿下。しばらく御離別の恨を息んが爲に。法性寺の小御堂に。上人を一夜逗留たてまつられけり。上人の給はく。會者定離は常のならひ。今はじめたるにあらず。何ぞ深歎んや。宿緣空からずば同一蓮に坐せん。淨土の再會甚近にあり。今の別は暫の悲み。春の夜の夢のごとし。信謗ともに緣として。先に生て後を導ん。引攝緣はこれ淨土の樂なり。夫現生すら猶もて疎からず。同名號を唱へ。同一光明の中にあり。て。同聖衆の護念を蒙る。同法尤親し。愚に疎と思食べからず。南無阿彌陀佛と唱給へば。住所は隔といへども。源空に親しとす。源空も南無阿彌陀佛と唱たてまつるが故なり。念佛を緣とせざる人は。肩を並。膝を與といへども。源空に疎かるべし。三業皆異なるが故なりとの給ば。禪定殿下悲哀心を迷し。一言もの給はざりけり。

十六門記に出づ。

一。また一人の弟子に對して。一向專念の義をのべ給に。御弟子西阿彌陀佛推參して。かくのごとくの御義ゆめ〳〵有べからず候。をの〳〵御返事を申給べからずと申

ければ。上人のたまはく。汝經釋の文を見ずやと。西阿申さく。經釋の文はしかりといへども。世間の譏嫌を存するばかりなりと。上人又の給はく。われたとひ死刑にをこなはるとも。この事いはずばあるべからずと。至誠のいろもとも切なり。見たてまつる人。みな涙をぞおとしける。

淨土隨聞記に出づ。但し彼の記の文は漢語なれども。今は讀み易きが爲に。勅修御傳に和語となして書きながしたるものを揭ぐ。拾遺古德傳粗〻之に同じ。又九卷傳に上人又云。彌陀の本願は是愚痴暗鈍の輩。罪惡生死の類の出離解脫の直路なり。我くびをきらるゝ共。この事をいはずば有べからずとあり。

一。驛路はこれ大聖のゆく所也。漢家には一行阿闍梨。日域には役優婆塞。謫居は又權化のすむ所也。震旦には白樂天。吾朝には菅丞相なり。在纏出纏みな火宅なり。眞諦俗諦しかしながら水驛なりとぞおほせられける。

これは御出立の時道俗をいさめ給ふ御詞なるべし。勅修御傳。九卷傳。拾遺古德傳等に出づ。但し十六門記には記者の言となして。上人の詞といはず。

八二　御遺跡の事につき法蓮房に

法蓮房申さく。古來の先德みなその遺跡あり。しかるにいま精舍一宇も建立なし。御入滅の後。いづくをもてか。御遺跡とすべきやと。上人答給はく。あとを一廟にしむれば。遺法あまねからず。予が遺跡は諸州に遍滿すべし。ゆへいかんとなれば。念佛の興行は愚老一期の勸化也。されば。念佛を修せんところは。貴賤を論ぜず。海人漁人がとまやまでも。みなこれ予が遺跡なるべしと。

勅修御傳。九卷傳等に出づ。

八三　御臨終の時門弟等に示されける御詞

一。建暦二年正月三日戊の時。病床の傍なる人〳〵。御往生の實不を問奉りければ。我もと天竺國に在し時は。聲聞僧に交て頭陀を行じき。いま日本にしては。天台宗に入て一代の教法を學し。又念佛門に入て衆生を利す。我もと居せし所なれば。定めて極

樂へ歸り行べしと仰られければ。勢觀上人申さく。先年も此仰侍りき。抑聲聞僧とは佛弟子の中には何哉と申し時。舍利弗なりと答え給ふ。

臨終祥瑞記。九卷傳等に出づ。

一。有時上人の給はく。高聲に念佛を唱へよ。阿彌陀佛の來給へり。南無阿彌陀佛と唱者は。一人としても極樂に往生せずといふ事なしとて。念佛の功德をほめ給へり。

十六門記に出づ。勅修御傳及び九卷傳に十一日の辰時の御物語とあり。

一。十一日の巳時に。乃至。語ての給はく。おほよそこの十餘年よりこのかた。念佛功つもりて。極樂の莊嚴及佛菩薩の眞身をおがみたてまつる事つねの事也。しかれどもとしごろは祕していはず。いま最後にのぞめり。かるがゆへにしめすところなりと

一。廿日の巳時に。乃至。弟子等申さく。このうへに紫雲あり。御往生のちかづき給へるかと。上人の給はく。あはれなるかなや。わが往生は一切衆生のためなり。念佛の信をとらしめんがために瑞相現ずるなりと。

以上二項。臨終祥瑞記。勅修御傳等に出づ。古今著聞集に掲ぐる所は略せり。

一。廿二日。氣高げなる女房の車にのりて來臨して。上人の見參に入べきよしを申さ

れける。乃至。淨土の法門はいかにと御定め候ぞと申されければ。選擇集といふ文をつくりて候へば。此文に違はず申侍らん者ぞ。源空が義なるべしと返答せられければ云云。

一。慈覺大師の九條の袈裟を著し。頭北面西にふし給ふ。門弟等申て云。只今まて端坐念佛し給へるに。命終の時に至りて臥給ふことといかゞ。上人微咲して曰。我今此故を述んと思ふ。汝等よく問へり。われ身を娑婆に宿す事は淨土の徑路をひらかんがため。今神を極樂にかへす事は往生の軌心をしめさんがためなり。我もし端坐せば人定て是を學ばんか。もし然ば病の身起居輒からじ。をそらくは正念を失ひてん。此義をもての故に我今平臥せり。端坐叶はざるにはあらず。本師釋尊既に頭北面西にして滅を唱へ給ふ。是また衆生のためなり。我いかてか釋尊にまさるべきと。

以上二項。九卷傳に出づ。

第八輯　雜纂

八四　淨土三部經如法經次第

淨土三部經如法經次第

一。經料紙

植楮種已一千日間當修念佛禮讚若欲讀誦應讀三部經也若無如此料紙用市店紙亦得。

一。道場莊嚴如常

一。前方便七箇日

沐浴潔齋淨衣等如常。但於內衣絹綿之類用否從宜。如老比丘及多病人著蠶服亦得矣。

袈裟必須用如法衣。

一。入道場次第

將入道場先須灑水。香爐花筥香象等如常。次無言行道三遍。奉請合殺等如常。次諸衆列

立寶座前誦總禮伽陀。其偈曰。

歸命本師釋迦佛　十方世界諸如來　願受施主衆生請　不捨慈悲入道場

南無十方三世一切諸佛哀愍納受入此道場

本國彌陀諸聖衆　平等俱來坐道場　道場聖衆實難逢　衆等頂禮彌陀會

南無極樂世界諸尊聖衆慈悲護念證明功德

次彌陀讚歎偈曰

弘誓多門四十八　偏標念佛最爲親　人能念佛佛還念　專心想佛佛知人

南無極樂化主彌陀來迎引接決定往生

次經讚歎偈曰

念念思聞淨土教　文文句句誓當勤　憶想生疚流浪久　專心聽法入眞門

南無淨土三部甚深妙典命終之後往生極樂

次禮讚（自日沒時始之）

諸衆著座。導師登高座。禮讚之後高聲念佛三百遍。但依時早勉。

次經讚歎伽陀。其詞如前。但開白之時闕略念佛。開白已後除總禮伽陀。

次例時作法如常。但日沒一時修之。

次讀經（雙卷觀經）　但轉讀多少隨時早勉。

次出堂

七箇日間每時如此。（已上前方便次第）

一。寫經七箇日

沐浴潔齋。入道場。禮讚念佛。讚歎。讀經等次第如前方便一無乖違。

一。起筆次第

初日晨朝禮讚以後啓白。導師選其器量分經行程。幷筆墨等如常。日別書寫禮讚以後多少隨宜。七箇日間可竣其功。

次日別解說日中禮讚以後勤之。七箇日間儀式如此。（已上寫經次第）

一。奉納次第

讚歎如前多少隨宜。行路之間合殺等如常。

一。禮讚時尅

日沒（申時）　初夜（戌時）　中夜（子時）　後夜（寅時）　晨朝（辰時）　日中（午時）

淨土如法經次第竟

本曰此法則者黑谷上人準法華如法經所選出之。大和入道見佛欲奉修於　後白河法皇追薦之法事。一夜夢有人告曰奉爲追薦修如法經覺後乃語上人。上人卽撰淨七如法經法則與之云云。（此本在二尊院）

出漢語燈錄。了惠曰。有廣法則。載般舟讚文。恐是僞書歟。

八五　三昧發得記

長承二年癸丑誕生。至于建久九年戊午行年六十有六。

建久九年正月朔日予赴山桃法橋敎慶之請歸菴之後未刻正月一七箇日恆例別時念佛始之。初日光明少現。第二日水想觀自然成就。又瑠璃地相少現。至第六日後夜瑠璃地及宮殿相現。二月四日早晨復瑠璃地現。其相分明。同月七日復瑠璃地現。凡上來種種相自正月朔日至二月七日三十七日之間現。顧我平生課念佛六萬遍不退勤修。由此今此等相現歟。二月二十五日日出如赤囊物。又出如瑠璃壺物。前則閉目見之。開目卽失。今則

開閉俱見。同月二十八日少有病惱。由暫減念佛。或一萬遍或二萬遍隨意勤修。其後右眼有白光現。光端青色。又出瑠璃光。其貌如壺。內有紅華狀如寶瓶。又日沒後出望四方各方有赤青色寶樹。高下無準或四五丈或二三十丈。其相宛如經中所說。同年七月下旬所勞乃復。八月朔日日課念佛六萬遍如初勤行。同月二日座下四方一步許變爲瑠璃地。同年九月二十二日早晨復瑠璃地現。周圍可七八步。朗然映徹。同二十三日後夜至曉復瑠璃地現。案地觀文爲未來世一切大衆欲脫苦者說是觀地法。若觀是地者除八十億劫生死之罪。捨身他世必生淨國。心得無疑。釋曰願行之業已圓命盡無疑不往。依經釋文往生無疑也。正治二年二月之頃地想等五觀坐臥隨意任運顯現。建仁元年二月八日後夜聞極樂衆鳥幷笙笛等音。其後日聞種種音聲。同二年正月五日佛殿勢至菩薩像後卽彼菩薩丈六許頭面三度現。又彼菩薩丈六許眞身現。想彼菩薩因地以念佛三昧入無生忍。故今爲念佛者示現其身。不可疑也。同十二月二十八日午時高畠少將來訪謁於佛殿。法話之間念佛如常。阿彌陀佛形像之後卽彼佛丈六許頭面透徹障礙而現。少時而沒。元久三年正月朔日勤修恆例七日念佛。至第四日念佛之間阿彌陀佛觀音勢至三尊共現大身。五日復現。

三昧發得記

出于漢語燈錄。九卷傳。西方指南抄等以和語記之。

源空自筆記之

八六　夢感聖相記

夢感聖相記

源空多年勤修念佛未曾一日敢懈廢焉。一夜夢有一大山南北悠遠峰頂至高。其山西麓有一大河。旁山出北流南濱畔渺茫不知涯際。林樹繁茂莫知幾許。予乃飛揚登於山腹。遙視西嶺空間有紫雲一片去地可五丈。意之何處有往生人現此瑞相。須臾彼雲飛來頭上。仰望孔雀鸚鵡等衆鳥出於雲中遊戲河濱。此等衆鳥身無光明而照曜無極。翔飛復入雲中。予爲希有思少時彼雲北去覆隱山河。復以爲山東有往生人迎之。既而須臾彼雲復至頭上漸大徧覆於一天下。有一高僧出於雲中住立吾前。予卽敬禮瞻仰尊容腰上半身尋常僧相。腰下半身金色佛相。予合掌低頭問曰師是何人。答曰我是唐善導也。又問時去代異何以今來于此耶。答曰汝能弘演專修念佛之道甚爲希有。吾爲來證之。又問曰專修念佛之人皆得往生耶。未答乃覺覺已聖容尙如在也。

建久九年五月二日記之

源空

出于漢語燈錄。九卷傳。西方指南抄等以和語記之。文稍有異同。

八七　類聚淨土五祖傳

類聚淨土五祖傳

第一位曇鸞法師　六傳

一。續高僧傳第七義解篇云。釋曇鸞或爲鸞未詳其氏。雁門人也。家近五臺山神迹靈怪逸于民聽。時未志學便往尋焉。備覩遺蹤心神歡悅便卽出家。內外經籍具陶文理。而於四論佛性彌所窮研。讀大集經恨其詞義淡密難以開悟。因而注解。文言過半便感氣疾。權停筆功周行醫療。行至汾州秦陵故墟。入城東門上望青霄。忽見天門洞開。六欲階位上下重複歷然齊視。由斯疾愈欲繼前作。願而言曰命惟危脆不定其常。本艸諸經具明正治。長年神仙往往間出。心願所指修習斯法。果尅既已方崇佛敎。不亦善乎。承江南陶隱居者方術所歸廣博弘贍。海內宗重。遂往從之。既達梁朝時大通中也。乃通名云北國虜僧曇鸞故來奉謁。

時所司疑爲細作推勘無有異詞以事奏聞帝曰斯非說國者可引入重雲殿仍從千迷道帝先於殿隅卻坐繩床衣以袈裟覆以衲帽鸞至殿前顧望無承對者見有施張高座上安几拂正在殿中傍無餘座徑往升之豎佛性義三命帝曰大檀越佛性義滚略已標敍有疑賜問帝卻衲帽便以數關往復因曰今日向晚明須相見鸞從座下仍前直出詰曲重沓二十餘門一無錯誤帝極歎訝曰此千迷道從來舊時往還疑阻如何一度遂乃無迷明旦引入大極殿帝降階禮接問所由來鸞曰欲學佛法恨年命促減故來遠造陶隱居求諸仙術帝曰此傲世遁隱者比屢徵不就任往造之鸞尋致書通問陶乃答曰去月耳聞音聲茲辰眼受文字將由頂禮歲積故使眞應來儀正爾整拂藤蒲具陳花水端襟斂思竚聆警錫及屆山所接對欣然便以仙方十卷用酬遠意還至浙江有鮑郎子神者一鼓涌浪七日便止正值波初無由得度鸞便往廟所以情祈告必如所請當爲起廟須臾神卽見形狀如二十來告鸞曰若欲度者明旦當得願不食言及至明晨濤猶鼓怒纔入船裏怗然安靜依期達帝具述由緣有敕爲江神更起靈廟因卽辭還魏境欲往名山依方修治行至洛下逢中國三藏菩提留支鸞往啓曰佛法中頗有長生不死法勝此土仙經者乎留支唾地曰是何言歟非相比也此方何處有長生不死法縱得長年少時不死終更輪迴三有耳卽以觀經授

之曰此大仙方依之修行當得解脫生死也鸞尋頂受所賚仙方並火燒之自行化他流廣弘廣魏主重之號爲神鸞焉下敕令住幷州大巖寺晚復移住汾州北山石壁玄忠寺時往介山之陰聚徒蒸業今號鸞公巖是也以魏興和四年因疾卒于平遙山寺春秋六十有七臨至終日旛花幢蓋高映院宇香氣蓬勃音聲繁鬧預登寺者並同聞之以事上聞敕乃葬于汾西秦陵文谷營建磚塔幷爲立碑今並存焉然鸞神宇高遠機變無方言語不思動與事會調心練氣對病識緣名滿魏都用爲方軌因出調氣論又著作王邵隨文注之又撰禮淨土十二偈續龍樹偈後又撰安樂集兩卷等廣流於世仍自號爲有魏玄簡大士云

二安樂集道綽下云曇鸞法師康存之日常修淨土亦每有世俗君子來呵法師曰十方佛國皆爲淨土法師何乃獨意注西豈非偏見生也法師對曰吾既凡夫智慧淺短未入地位念力須均如似置艸引牛恆須繫心槽櫪豈得縱放全無所歸雖復難者紛紜而法師獨決是以無問一切道俗但與法師一面相遇者若未生正信勸令生信若已生正信者皆勸歸淨國是故法師臨命終時寺傍左右道俗皆見旛花映院盡聞異香音樂迎接遂往生也

三迦才淨土論云沙門曇鸞法師者幷州汶水人也魏末高齊之初猶在神智高遠三國知聞洞曉衆經獨步人外梁國天子蕭王恆向北禮曇鸞菩薩注解天親菩薩往生論裁成兩

卷。法師撰集無量壽經奉讚七言偈百九十五行并問答一卷。流行於世。勸道俗等決定往生得見諸佛。恆請龍樹菩薩臨終開悟。誠如所願。此方報盡半宵之內現聖僧像。忽來入室云我是龍樹菩薩。便爲說曰已落之葉不可更附枝也。未束之粟不可倉中求也。白駒過隙不可暫時留也。已去者巨反未來未可追。現在今何在。白駒難可迴。法師妙達言旨知是告終。卽半夜內發遣使者遍告諸村白衣弟子及寺內出家弟子。可三百餘人。一時雲集。法師沐浴著新淨衣手執香爐正向西坐。敎誡門徒索西方業。日初出時大衆齊聲念彌陀佛。便卽壽終。寺西五里之外有比丘尼寺。竝是門徒明相出後集堂食粥。擧衆皆聞空內有微妙音樂西來東去。中有智者告大衆言。法師和上一生敎人修淨土業。今此音聲向東去者必應多是迎法師來。食訖相命觀法師去。庭前相待未出寺庭之間復聞音樂遠在空中向西而去。尼僧等相與至彼乃見無常。此依經論定得生西方也。

四。瑞應傳云。齊朝曇鸞法師家近五臺。洞明諸敎因得此土仙經十卷。欲訪陶隱居學仙術。後逢三藏菩提問曰佛法中有長生不死法勝此土仙經否。三藏唾地警曰此方何處有長生不死法。縱得延壽年盡須墮。卽將無量壽觀經授與鸞曰此大仙方。依而行之長得解脫永離生死。鸞便須火遂焚仙經。忽於半夜見一梵僧。入房語鸞曰我是龍樹菩薩。便說偈曰

落葉不可更附枝。未束粟不可倉中求。白駒過隙不可暫駐。已去者巨反未來未可追。現在今何在。白駒難可迴。法師乃知壽終。集弟子三百餘人自執香爐向西敎誡門徒勸崇西方。以日初出時齊聲念佛卽便壽終。寺西五里有一尼寺。聞空中音樂西來東去。須臾又聞東來西去。

五。新修往生傳云。釋曇鸞雁門人也。少遊五臺感其靈異自誓出俗。三乘頓漸具陶文理。又嘗抱疾行至汾州。俄見雲蔭如蓋天門洞開。六欲階位上下重複。鸞方瞬目疾乃隨愈。鸞於是復用心佛道常如不及。開蒙誘俗無問遠近。初鸞好爲術學。聞陶隱居得長生法千里就之。陶以仙經十卷授鸞。鸞躍然自得以爲神仙之術其必然也。後還洛下遇菩提留支意頗得之。問支曰佛道有得長生乎。具能卻老爲不死乎。支笑而對曰長生不死吾佛道也。旋以觀無量壽經授之曰汝可誦此。則三界無復生。六道無攸往。盈虛消息禍福成敗無得而至。其爲壽也有劫石焉。有河沙焉。河沙之數有極壽量之數無窮。此吾金仙氏之長生也。鸞承其語驟起。深信遂焚所學仙經而專觀經焉。每於觀經得其理義。修三福業想像九品。雖夫寒暑之變疾病之來不懈于始念。魏主憐其志尚。又嘉其自行化他流靡弘廣。號爲神鸞。敕住并州大巖寺。未幾移住汾州玄忠寺。一夕鸞正持誦。見一梵僧掀昂而來。入其室曰吾龍

樹也。所居淨土。以汝有淨土之心。故來見汝。鸞曰何以教我。樹曰已去不可反而失。鸞以所見勝異。必知死生之期屆矣。卽集弟子數百人。咸陳教誡。言其四生役役。其止無日。地獄諸苦不可以不懼。九品淨業不可以不修。因令弟子齊聲高唱阿彌陀佛。鸞乃西向冥目頓額而示滅。是時道俗同聞管絃絲竹之聲由西而來。良久乃寂。

六。龍舒淨土文云。曇鸞初自陶隱居得仙經十卷。鸞欣然自得以爲神仙必可致也。後遇僧菩提留支問云佛道長生乎。能卻老不死乎。支云長生不死吾佛道也。遂以十六觀經與之云汝可誦此則三界無復生。六道無復往。盈虛消息禍福成敗無得而至。其爲壽也有劫石焉。有河沙焉。沙石之數有限壽量之數無窮。此吾金仙氏之長生也。鸞深信之遂焚仙經而專修觀經。雖寒暑之變疾病之來亦不懈怠。魏主憐其志尙又嘉其自行化他流傳甚廣號爲神鸞。一日告弟子云地獄諸苦不可以不懼。九品淨業不可以不修。因令弟子高聲念阿彌陀佛。向西閉目叩頭而亡。是時僧俗同聞管絃絲竹之聲從西而來。良久乃止。

第二位道綽禪師 四傳

一。續高僧傳第二十四習禪篇云。釋道綽姓衞。幷州汶水人。弱齡處俗閭里以恭讓知名。十四出家宗師經誥。大涅槃部偏所弘傳。講二十四遍。晚事瓚禪師修涉空理。亟沾徽績。瓚清約

雅素。慧悟開天道。振朔方升名晉土。綽稟服神味。彌積歲時。承昔鸞法師淨土諸業。優甄簡權實。搜酌經論。會之通衢。布以成化。尅念緣數。想觀幽明。故得靈相濟儀。有情欣敬。恆在汝水石壁谷玄忠寺。寺卽齊時曇鸞法師之所立也。中有鸞碑。具陳嘉瑞。事如別傳。綽般舟方等歲序常弘。九品十觀分時紹務。嘗於行道際有僧念定之中見綽緣佛珠數相量如七寶大山。又覩西方靈相繁縟難陳。由此盛德日增榮譽遠及。道俗子女赴者彌山。恆講無量壽觀。將二百遍。導悟自他。用爲資神之宅也。詞既明詣。說甚適緣。比事引喩。聽無遺拘。人各捐珠口同佛號。每時散席。響彌林谷。或邪見不信。欲相抗毀者。及覩綽之相善。飲氣而歸。其道感物情爲若此也。曾以貞觀三年四月八日。綽知命將盡。通告事相。聞而赴者滿于山寺。咸見鸞法師在七寶船上。告綽云。汝淨土堂成。但餘報未盡耳。幷見化佛住空天。花下散男女等以裙襟承得。薄滑可愛。又以乾地搜蓮花不萎者七日。及餘善相不可殫紀。自非行感倫通。詎能會此者乎。年登七十。忽然齒新生。如本全無歷異。加以報力休健容色盛發。談述淨業理味。奔流詞吐。包蘊氣霑。醇醴幷勸人念彌陀佛名。或用麻豆等物而爲數量。每一稱名。便度一粒。如是率之。乃積數百万斛者。竝以事邀結。令攝慮靜緣。道俗嚮其綏道。望風而成習矣。又年常自業穿諸木欒。子以爲數法。遺諸四衆。教其稱念。屢呈禎瑞。具敘行圖。著淨

土論二卷。遠談龍樹天親。邇及僧鸞惠遠。竝遵崇淨土明示昌言。文旨該要詳諸化範。傳燈寓縣歲積彌新。傳者重其陶鑿風神。研精學觀。故又述其行相。自綽宗淨業坐常面西晨宵一服鮮潔爲儀。體儀貌充偉。幷部推焉。顧眄風生舒顏引接。六時篤敬初不缺行。接唱承拜生來弗絕。纔有餘暇。口誦佛名。日以七万爲限。聲聲相注。弘於淨業。故得鎔鑄有識。師訓觀門。西行廣流。斯其人矣。沙門道撫名勝之僧。京寺弘福。逃名往赴。既達玄忠。同其行業。宣通淨土所在彌增。今有惰夫口傳攝論。唯心不念。緣境又乖。用此招生。恐難繼想。綽今年八十有四。而神氣明爽。宗紹存焉。

二。迦才淨土論云。沙門道綽法師者亦是幷州晉陽人也。乃是前高德大鸞法師三世已下縣孫弟子。講涅槃經一部。每常讚歎鸞法師智德高遠。自云相去千里懸殊。尚捨講說。修淨土業。已見往生。況我小子。所知所解何足爲多。將此爲德。從大業五年已來。卽捨講說。修淨土行。一向專念阿彌陀佛。禮拜供養相續無間。貞觀已來爲開悟有緣。時時敷演無量壽觀經一卷。示誨幷土晉陽大原汝水三縣道俗。七歲已上竝解念彌陀佛。上精進者用小豆爲數。念彌陀佛得八十石或九十石。中精進者念五十石。下精進者念二十石。敎諸有緣不向西方。○涕唾便利。不背西方坐臥。撰安樂集兩卷。見行於世。去貞觀十九年歲次乙巳四月二

十四日。悉與道俗取別。三縣內門徒就別前後不斷。難可記數。至二十七日於玄忠寺壽終。時有白雲從西方來變爲三道白光。於自房中徹照通過。終訖乃滅。後燒墳陵時復有五色光三道。於空中現映。遶日輪。繞訖乃止。復有紫雲三度於墳上現。遺終弟子同見。斯瑞。若準經斷竝是諸佛慈善根力能令衆生見。如此事。又準花嚴經偈說。又放光明名見佛。此光覺悟命終者。念佛三昧必見佛。命終之後生佛前。

三。瑞應傳云。唐朝道綽禪師幷州人也。玄忠寺講觀經二百遍。三縣七歲竝解念佛。自穿褲珠勸人念佛。語常含咲。不曾面背西。語善導曰。道綽恐不往生。願師入定爲佛得否。善導入定見佛百餘尺。問曰。道綽現修念佛三昧。不知捨此報身得往生否。又問曰。何年月得生。答曰伐樹連下斧。無緣莫共語。還家莫辭苦。又令綽懺悔。一者安置經像於淺處。自居安穩房中。二者作功德。使出家人對十方僧懺悔。三者因修建傷損含生。對衆生懺悔。又問終時有何瑞相。令人見聞。答曰。亾日我放白毫遠照東方。此光現時來生我國。果至亾日三道光照房內。又見曇鸞法師七寶池中語曰。淨土已成。餘報未盡。紫雲墳上三度現。

四。新修往生傳云。釋道綽幷州人。棄家已來歷訪名師。後聞瓚禪師理行兼著。卑志事之。尋憩石壁谷玄忠寺。寺卽後魏曇鸞法師舊止也。鸞於其寺久蘊淨業。至其亾日。疊有祥異。郡

人奇之。捃摭其事刻之於石。綽讀其文。彌深信講涅槃經三十餘徧。每歎鸞法師智德高遠。尙捨講說修淨土業。已得往生。況我小子所解何足爲多。而恃此爲德。卽捨講說修淨土行。一向專念阿彌陀佛。日別七万徧爲限。禮拜供養相續無間。爲開悟有緣。每講觀經二百餘徧。示誨道俗七歲已上念阿彌陀佛。敎用小豆爲數。上者念得九十八十石。中者念得五十石。下者三十石。敎諸有緣不向西方大小便利涕唾不背西坐。聲聲相注弘淨土業。每見佛住空中。天華下散大如錢。其色鮮白遍滿虛空。大衆以手承花。人人皆得七日不萎。又撰安樂集兩卷。見行於世。唐貞觀三年四月八日道俗集其寺。示如來之降生也。且見鸞於空中。飄在空。衆乃驚歎大生信服。雖夫無種闡提之人。亦率服之。以故唐初并汾諸郡重漬淨業。由綽盛焉。貞觀十九年四月二十四日遇疾。道俗省覲者不可勝記。至二十七日欲終時。又有聖衆從西方來。兩道白光入房徹照。終訖乃滅。又欲殯時復有異光於空中現。殯訖乃止。復有紫雲於塔上三度現。衆人同見斯瑞。

第三位善導禪師 六傳

一續高僧傳第三十七 遺身篇 云。近有山僧善導者。周遊寰寓。求訪道津。行至西河。遇道綽師

唯行念佛彌陀淨業。既入京師。廣行此化。寫彌陀經數万卷。士女奉者其數無量。時在光明寺。說法。有人告導曰。今念佛名。定生淨土不。導曰。定生定生。其人禮拜訖口誦雨無阿彌陀佛。聲聲相次。出光明寺門。上柳樹表。合掌西望。倒投身下至地遂死。事聞臺省。

二瑞應傳云。唐朝善導禪師姓朱。泗州人也。少出家時見西方變相。歎曰。何當託質蓮臺。棲神淨土。及受具戒。妙開律師共看觀經。悲喜交歎。乃曰。修餘行業。迂僻難成。唯此觀門。定超生死。遂至綽禪師所。問曰。念佛實得往生否。師答曰。各辨一蓮花。行道。七日不萎者卽得往生。又東都英法師講華嚴經四十徧。入綽禪師道場。遊三昧而歎曰。自恨多年空尋文疏。勞身心耳。何期念佛不可思議。禪師云。經有誠言。佛豈妄語。禪師平生常樂乞食。每自責曰。釋迦尙乃分衛。善導何人。端居索供養。乃至沙彌竝不受禮。寫彌陀經十万卷。畫淨土變相三百鋪。所見塔廟無不修葺。佛法東行未有禪師之盛德矣。

三新修往生傳云。釋善導不悉何許人。周遊寰寓求訪道津。唐貞觀中見西河綽禪師行方等懺。及淨土九品道場講觀經。導大喜曰。此眞入佛道之津要。修餘行業迂僻難成。惟此觀門速超生死。吾得之矣。於是篤勤精苦若救頭然。續至京師。激發四部弟子無問貴賤。彼屠沽輩亦擊悟焉。導入堂則合掌跏趺一心念佛。非力竭不休。乃至寒冷亦須流汗。以此相狀

表於至誠出卽爲人說淨土法化諸道俗令發道心修淨土行無有暫時不爲利益三十餘年無別寢處不暫睡眠除洗浴外曾不脫衣般舟行道禮佛方等以爲己任護持戒品纖毫不犯曾不舉目視女人一切名利無心起念綺詞戲笑亦未之有所行之處爭申供養飲食衣服四事豐饒皆不自入幷將迴施好食送大廚供養徒衆唯食麤惡纔得支身乳酪醍醐皆不飲噉諸有賙施將寫阿彌陀經十万餘卷所畫淨土變相三百餘堵所在之處見壞伽藍及故塼塔等皆悉營造然燈續明歲常不絕三衣瓶鉢不使人持洗始終無改化諸有緣每自獨行不共衆去恐與人行談論世事妨修行業其有暫申禮謁聞說少法或得同預道場親承教訓或曾不見聞披尋教義或展轉授淨土法門京華諸州僧尼士女或投身高嶺或寄命淡泉或自墮高枝焚身供養者略聞四遠向百餘人諸修梵行棄捨妻子者誦阿彌陀經十万至三十万徧者念阿彌陀佛日得一万五千至十万徧者及得念佛三昧往生淨土者不可知數或問導曰念佛之善生淨土耶對曰如汝所念遂汝所願對已導乃自念阿彌陀佛如是一聲則有一道光明從其口出十聲至百聲光亦如之導謂人曰此身可厭諸苦逼迫情僞變易無暫休息乃登所居寺前柳樹西向願曰願佛威神驟以接我觀音勢至亦來助我令我此心不失正念不起驚怖不於彌陀法中以生退墮願畢於其樹上投身自

絕時京師士大夫傾誠歸信咸收其骨以葬高宗皇帝知其念佛口出光明又知捨報之時精至如此賜寺額爲光明焉

四又云唐往生高僧善導臨淄人也幼投密州明勝法師出家誦法華維摩忽自思曰教門非入一道一途若不契機功卽徒設於是投大藏經信手探之得無量壽觀經復喜誦習於十六觀恆諦思惟忱節西方以爲冥契欣惠遠法師勝躅遂往廬山觀其遺範乃豁然增思自後歷訪名德幽求妙門功微理淡未有出般舟三昧者畢命斯道後遁迹終南悟眞寺未逾數載觀想忘疲已成淡妙復於定中備觀寶閣瑤池金座宛在目前涕泗交流擧身投地既獲勝定隨方利物初聞綽禪師晉陽開闡欲不遠千里從而問津時逢玄冬之首風飄落葉塡滿淡坑遂挈瓶鉢入中安坐一心念佛不覺已度數日乃聞空中聲曰可得前行所在遊履無復罣礙遂出坑進程至綽禪師所展會夙心綽公卽授與無量壽經導披卷詳之比來所觀宛在因卽入定七日不起或問導曰弟子念佛得往生否導令辨一莖蓮花置之佛前行道七日花不萎悴卽得往生依之七日果然花不萎黃綽歎其淡詣因請入定觀當得生否導卽入定須臾報曰師當懺三罪方可往生一者師嘗安佛尊像在檐牖下自處淡房二者驅使策役出家人三者營造屋宇損傷蟲命師宜於十方佛前懺第一罪於四方僧前

懺第二罪。於一切衆生前懺第三罪。綽公靜思往咎皆曰不虛。於是洗心悔謝訖而見導。卽曰師罪滅矣。後當有白光照燭是師往生之相也。導化洽京輩道俗歸心者如市。後於所住寺院中畫淨土變相。忽催令速成就。或問其故則曰吾將往生。可往三兩夕而已。忽然微疾掩室怡然長逝。春秋六十九身體柔軟容色如常。異香音樂久而方歇。時永隆二年三月十四日。

五。念佛鏡云。善導闍梨在西京寺內與金剛法師校量念佛勝劣。昇高座遂發願言。準諸經中世尊說念佛一法得生淨土。一日七日一念十念阿彌陀佛定生淨土。此是眞實不誑衆生者卽遣此堂中二像總放光。若此念佛法虛不生淨土誑惑衆生卽遣善導於此高座上卽墮大地獄長時受苦永不出期。遂將如意杖指一堂中像。皆放光。

六。龍舒淨土文云。善導貞觀中見西河綽禪師淨土九品道場。於是篤勤精苦若救頭然。每入佛堂合掌胡跪一心念佛。非力竭不休。雖寒冰亦須流汗以表至誠。出卽爲衆說淨土法門。無暫時不爲利益。三十餘年不暫睡眠。般舟行道禮佛方等專爲己任。護持戒品纖毫不犯。未嘗舉目視女人。絕意名利遠諸戲笑。所行之處淨身供養。飲食衣服有餘竝以迴施。好食送大廚供衆。麤惡自食。乳酪醍醐皆不飲噉。諸有贏施用寫阿彌陀經十万餘卷。畫淨土

變相三百餘壁。見壞寺及壞塔皆悉修營。然燈續明每歲不絕。三衣瓶鉢不使人持洗。始終無改。不與衆同行。恐談世事妨修行業。展轉授淨土法門者不可勝數。或問導云念佛之善生淨土否。答云如汝所念遂汝所願。於是導自念阿彌陀佛一聲則有一道光明從其口出。十聲以至百聲光明亦如此。其勸化偈云漸漸雞皮鶴髮看看行步蹤踵。假饒金玉滿堂難免衰殘老病。任是千般快樂無常終是到來。唯有徑路修行。但念阿彌陀佛。後謂人曰此身可厭。吾將西歸。乃登寺前柳樹投身自絕。高宗見其念佛口出光明。又捨身時精至如此。賜寺額爲光明。慈雲式懺主略傳云阿彌陀佛化身。至長安聞滻水聲乃曰可教念佛。三年後滿長安城中念佛。後有法照大師卽善導後身也。

第四位懷感法師 二傳

一。宋高僧傳第六 義解篇 云。釋懷感不知何許人也。秉持强悍精苦從師。義不入神。未以爲得。四方同好就霧市焉。唯不信念佛少時逕生安養。疑冰未泮遂謁善導用決猶豫。導曰子傳教度人。爲信後講。爲渺茫無詣。感曰諸佛誠言不信不講。導曰若如所見。令念佛往生豈是魔說耶。子若信之至心念佛當有證驗。乃入道場三七日不覩靈瑞。感自恨罪障滋欲絕食畢命。導不許。遂令精虔三年念佛。後忽感靈瑞。見金色玉毫便證念佛三昧。悲恨宿垢業重

妄構衆惡懺悔發露。乃述決疑論七卷。（卽羣疑論是也）臨終果有化佛來迎合掌向西而往矣。

二。瑞應傳云。感法師居長安千福寺。博通經典。不信念佛。問善導和尙曰。念佛之事在何門答曰君能專念。佛當自有證。又問頗見佛否。師曰佛言何可疑哉。遂三七日入道場。未有其應。自恨罪深。欲絕食畢命。師止而不許。三年專志。遂得見佛金色玉毫。證得三昧。乃自造往生決疑論七卷。臨終佛迎合掌向西卒。

第五位少康法師 三傳

一。宋高僧傳第二十五（讀誦篇）云。釋少康俗姓周。縉雲仙都山人也。母羅氏因夢遊鼎湖峰得玉女手捧青蓮授曰。此花吉祥寄於汝所。後生貴子。切當保惜。及生康之日。青光滿室香似芙蕖。迨襁褓之年。眼碧脣朱。齒白。得佛之一相。恆端坐含笑。時鄉中善相人也目之。此子將相之才。不語吾弗知也。年甫七歲。抱入靈山寺中。佛生日禮聖容。母問康曰識否。忽發言云釋迦牟尼佛。聞皆怪之。蓋生來不言語也。由是父母捨其出家。年十有五所誦之經已終五部。於越州嘉祥寺受戒。俄就伊寺學毗尼。五夏之後往上元龍興寺聽花嚴經瑜伽論。貞元初至于洛京白馬寺殿見物放光。遂探取爲何經法。乃善導行西方化導文也。康見歡喜呪之曰我若與淨土有緣惟此軸文斯光再現。所誓纔終果重閃爍。中有化佛菩薩無算。遂之

長安善導影堂內。乞願見善導眞像化爲佛身。謂康曰汝依吾施設利樂衆生同生安養。康如有所證。南至江陵果願寺遇一法師。謂康曰汝欲化人徑往新定。緣在於彼。言訖不見。止有香光望西而去。洎到睦郡入城乞食得錢。誘掖小兒能念阿彌陀佛一聲卽付一錢。後經月餘。孩孺蠕慕念佛多者卽給錢。如是一年。凡男女見康則云阿彌陀佛。遂於烏龍山建淨土道場。築壇三級。聚人午夜行道。唱讚二十四契稱揚淨邦。每遇齋日雲集。所化三千許人。登座令男女弟子望康面門。卽高聲唱阿彌陀佛。佛從口出連誦十聲十佛若連珠狀。告曰汝見佛身卽得往生。以貞元二十一年十月示衆囑累。止勸急修淨土。言畢跏趺身放光明而逝。天色斗變。狂風四起。百鳥悲鳴。烏龍山也一時變白。今墳塔存于州東臺子巖。歲久唯餘方石。石傍之土相傳療疾。州民凡嬰衆病。悉焚香取土。隨服多差。石之四隅若車轍焉。漢乾祐三年。天台山德韶禪師重建其塔。至今高敞。時號後善導焉。系曰康所述偈讚皆附會鄭衛之聲。變體而作。非哀非樂。不怨不怒。得處中曲韻。譬猶善醫以餳蜜塗逆口之藥。誘嬰兒之入口耳。苟非大權入假。何能運此方便度無極者乎。唱佛佛形從口而出。善導同此作佛事。故非小緣哉。

二。新修往生傳云。釋少康縉雲仙都人。母羅氏夢遊鼎湖峰得玉女捧青蓮花授之。且曰此

花吉祥授之於汝當生貴子及生康日青光滿室香似芙蕖年十有五誦法花楞嚴等經五部尋究毗尼及聽花嚴瑜伽諸論貞元初至洛下白馬寺見殿內文字累放光明康不能測前而探取之乃善導昔爲西方化導文也康曰若於淨土有緣當使此文光明再發所願未已果重閃爍康曰劫石可移而我願無易矣遂之長安善導影堂大陳薦獻方陳薦獻時倏見善導遺像昇於空中謂康曰汝依我事利樂有情則汝之功同生安樂康聞其語如有所證南適江陵果願寺路逢一僧謂曰汝欲化人當往新定言訖而隱泊到睦郡睦人尙無識者未從其化康乃丐錢誘掖小兒與之約曰阿彌陀佛實汝良導能念一聲與汝一錢小兒務得其錢也隨亦念之後經月餘孩孺念佛俟錢者比比而是康曰可念十聲乃與爾錢小兒亦如其約如是一年無長少貴賤凡見康者則曰阿彌陀佛以故念佛之人盈道路焉貞元十年康於烏龍山建淨土道場築壇三級聚人午夜行道每道場時康自登座令男女面康賡聲高唱阿彌陀佛已又賡聲和之至康唱時衆見一佛從其口出連唱十聲則有十佛若聯珠狀康曰汝見佛否如見佛者決生淨土其禮佛人數千亦有竟不見者貞元二十一年十月三日囑累道俗當於安養起增進心於閻浮提生猒離心又曰汝曹此時能見光明眞我弟子遂放異光數道奄然棄世焉入塔於臺子巖天台德韶禪師重新之今之人多指

其塔爲後善導焉

三龍舒淨土文云小康貞元初至洛下白馬寺見殿中文字累放光明探取之乃善導西方化道文也康曰若於淨土有緣當使此文再發光明言未已光乃閃爍遂至長安善導影堂大陳薦獻善導於空中曰汝依吾事利樂有情則汝之功同生安養又逢一僧謂曰汝欲化人當往新定言訖而隱新定今嚴州也至彼人尙無識者康乃乞錢誘小兒與之約曰阿彌陀佛是汝本師能念一聲與汝一錢小兒務得其錢隨聲念之後月餘小兒念佛求錢者衆康乃云念佛十聲乃與爾錢小兒從之如此一年無長少貴賤凡見康者則稱阿彌陀佛以故念佛之人盈於道路後康於烏龍山建淨土道場築壇三級聚人午夜行道康升座令人面西康先唱阿彌陀佛次衆人和之康唱時衆見一佛從其口出連唱十聲則有十佛若聯珠狀康云汝見佛否如見佛者決生淨土其禮佛人數千亦有竟不見者後囑衆人當於安養起增進心於閻浮提生猒離心又云汝等此時能見光明眞我弟子遂放異光數道而亡

出于漢語燈錄了惠曰當時空上人從諸傳之中類衆於淨土五祖高妙德今寫雕版印弘通於世間酌流討源者誰不慕玩此

八八　善導十德

善導十德

歎善導德爲二。一者垂迹門。二者本地門。就垂迹門準例天台且歎十德。

一者至誠念佛德　二者三昧發得德　三者光從口出德　四者爲師決疑德。
五者造疏感夢德　六者化導盛廣德　七者遺身入滅德　八者帝王歸敬德
九者遺文放光德　十者形像神變德

一。至誠念佛德者。合掌胡跪一心念佛。非力竭不休。乃至寒冷亦須流汗。以此相狀表於至誠是也。

二。三昧發得德者。觀想忘疲已成淩妙。便於定中備觀寶閣瑤池金座宛在目前是也。

三。光從口出德者自念阿彌陀佛一聲則有一道光明從其口出。十聲至百聲光明亦如此是也。

四。爲師決疑德者。綽歎其淩詣。因請入定觀當得生否。導卽入定須臾報曰師當懺三罪方可往生是也。

五。造疏感夢德者。就此有二。謂前夢後夢也。言前夢者師欲造觀經疏而先七日祈請其事卽感靈夢。其狀具載疏第四卷。例如吾朝聖德太子造法花疏時卽入夢殿。金人東來指示淩義也。次後夢者造疏已後又七日祈請之云云。造疏求加護於三寶感得靈瑞其例非一。如花嚴澄觀本邦慈覺大師等也。

六。化導盛廣德者。化諸有緣以授淨土法門。京華諸州僧尼士女。或投身高嶺。或棄命淩泉。或自墮高枝。焚身供養者粗聞四遠。向百餘人。諸修梵行棄捨妻子者。誦阿彌陀經十万至三十万徧者。念阿彌陀佛日得一万五千至十万徧者。及得念佛三昧往生淨土者。不可知數是也。

七。遺身入滅德者。師謂人曰此身可猒。諸苦逼迫情僞變易無暫休息。乃登所居寺前柳樹西向願曰願佛威神驟以攝我。觀音勢至亦來助我。令我此心不失正念不起驚怖不於彌陀法中以生退墮。願了於其樹上投身自絕是也。

八。帝王歸敬德者。高宗皇帝知其念佛口出光明。又知捨報之時精至如此。賜寺額爲光明焉是也。

九。遺文放光德者。貞元初少康至洛下白馬寺見殿內文字累放光明。康不能測前而探取

之。乃師所爲西方化導文也。康曰若於淨土有緣當使此文光明再發。所願未已果重閃爍。康曰劫石可移而我願無易矣是也。十。形像神變德者。少康遂之長安善導影堂大陳薦獻。時彼遺像忽昇空中。謂康曰汝依吾事利益有情則汝之功同生安樂。康聞其言如有所證是也。

二。本地門者。師卽阿彌陀佛化身。事出在于西方略傳。宜哉獨得本願滋旨。念佛衆生亦應合會本地內證也。

出于漢語燈錄。

八九　贊

我本因地以念佛心。入無生忍。今於此界。攝念佛人。歸於淨土。

源空

十二月十一日

勝法御房

これは上人の御弟子勝法房がゑがける上人の畫像に題し給へる贊なり。

法然本地身。大勢至菩薩。爲度衆生故。顯置此道場。我每日影向。擁護歸依衆。必引導極樂。

若我此願念。不令成就者。永不取正覺。

これは御流罪の時讃岐國生福寺に在りて。上人自ら造り給へる大勢至菩薩の像に題せられたるものなりとぞ。勅修御傳等に出づ。然るに本朝祖師傳記繪詞。古今著聞集には。三井の公胤僧正結緣の爲に。四十九日の導師を望みて。兩界曼陀羅並に阿彌陀の像を供養したりけるに。其後五ヶ年を經て。建保四年四月廿六日の夜。僧正の夢に上人告げて云く。往生之業中。一日六時刻。一心不亂念。功驗最第一。六時稱名者。往生必決定。雜善不決定。專修定善業。源空爲孝養。公胤能說法。感語不可盡。臨終先迎接。源空本地身。大勢至菩薩。衆生爲化故。來此界度度。かく示してさり給ひにけりとあり。又西方指南抄。源空聖人私日記に。園城寺長吏法務大僧正公胤爲法事。唱道之時。其夜告夢云。源空爲教益。公胤能說法。感卽不可盡。臨終先迎攝。源空本地身。大勢至菩薩。衆生敎化故。來此界度度とあり。夢にも亦其の本地を示されけるにや。

九〇　和歌

春

さへられぬ光もあるををしなへてへたてかほなるあさかすみかな

夏

われはたゝほとけにいつかあふひくさこゝろのつまにかけぬ日そなき 新後拾遺集

秋

阿彌陀佛にそむる心の色にいては秋の梢のたくひならまし

冬

雪のうちに佛の御名を唱れはつもれるつみそやかてきえぬる

逢佛法捨身命と云へる事を

かりそめの色のゆかりの戀にたにあふには身をもおしみやはする

勝尾寺にて

柴の戸にあけくれかゝる白雲をいつむらさきの色にみなさむ 玉葉集

極樂往生の行業には餘の行をさしをきて

たゞ本願の念佛をつとむべしと云ことを

あみた佛といふより外は津の國のなにはのこともあしかりぬへし 夫木集

極樂へつとめてはやくいてたゝは身のをはりにはまいりつきなん 夫木集

阿彌陀佛と心は西にうつせみのもぬけはてたる聲そすゝしき

六三八

光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の心を

月影のいたらぬ里はなけれともなかむる人のこゝろにそすむ 續千載集

三心の中の至誠心の心を

往生はよにやすけれとみな人のまことのこゝろなくてこそせね

睡眠の時十念を唱ふべしと云事を

阿彌陀佛と十聲唱へてまとろまんなかきねふりになりもこそすれ

上人てづから書付給へりける

千とせふる小松のもとをすみかにて無量壽佛のむかへをそまつ

おほつかなたれかいひけんこまつとは雲をさゝふるたかまつの枝 夫木抄

池の水人のこゝろに似たりけりにこりすむことさためなければ 續後拾遺集

むまれてはまつ思ひいてんふるさとに契りし友のふかきまことを 新千載集。夫木抄

阿彌陀佛と申すはかりをつとめにて淨土の莊嚴見るそうれしき 夫木抄

元久二年十二月八日　　源空

以上。勅修御傳に出づ。和語燈錄には此の中。唯八首を出し。別に又左の二首をかゝぐ。

露の身はこゝかしこにてきえぬとも心はおなしはなのうてなそ

これを見るをり〳〵ことにおもひいてゝ南無阿彌陀佛と常にとなへよ

追加法然上人傳記

附一期物語

見聞出勢觀房

或時物語云、幼少登山、十七年亘六十卷、十八年乞暇遁世、是偏絶名利、望一向爲學佛法、也、自尒以來四十余年、習學天台一宗、粗得一宗大意、我性者、雖大卷書三反見之者、不闇于文義、分明也、雖然以十年廿年功不能知一宗大綱、然閲諸宗教相聊知顯密、諸教八宗之外加佛心宗、亙九宗、其中適有先達者往而決之、面々蒙印可、當初醍醐有三論先達、往彼述所存、先達惣不言、既而入内取出文櫃十余合云、於我法門無可付屬之人、已達此法門、給悉奉付屬之、稱美讃嘆傍痛程也、進士入道阿性房同道聞之云々、又往藏俊僧都許、談法相宗、法門之時、藏俊云、非直人、恐大權化現歟、雖奉値昔論主、不可過之覺程也、知惠深達事、言語道斷、我一期有思延供養志云々、其後毎年送供物、已果願望、凡毎値先達、皆被稱嘆惣、吾期所來到聖教乃至傳記目錄無不一見、爰煩出離道身心不安、抑惠心先德造

(追加1)

後恐權誤
遠恐遠誤
期恐朝誤

行下要集有往生惟字
未下要集有往生爲字
豈字要集下有往生矣二字
尋下恐釋字脫

（追加2）

往生要集勸濁世末代道俗就之欲尋出離之趣先序云往生極樂之敎行濁世末代之目足也道俗貴賤誰不歸者但顯密敎法其文非一事理業因其行多利智精進之人未難如予頑魯之者豈是故依念佛一門聊集經論要文披之修之易覺易行云々序者畧言述一部奥旨此集已依念佛云事顯然也但念佛相貌未委者入文採之此集立十門第一第二第三門是非行躰者暫置之其余五門是就念佛立之第九諸行往生門是任行者意樂一旦雖明之更无慇懃丁寧勸進第十門是問答料簡又非行躰就念佛五門料簡之第四是正修念佛也以此爲念佛体第五是助念方法也以念佛爲所助以此門爲能助故念佛爲本意也第六別時念佛也長時勤行不能勇進者限日數勤上念佛也更非別躰第七是念佛利益也爲勸上念佛勸利益文擧之第八是念佛證據也本意在念佛云事又顯然也但付正修念佛有種々念佛初心觀行不堪深奥者敎色相觀々々中有別相觀有總相觀有雜略觀有極略觀又有稱名其中慇懃勸進之言唯在稱名之段於五念門雖名正修念佛作願廻向是非行体禮拜讀嘆又不如觀察々々中於稱名丁寧勸之爲本意云事顯然也但於百即百生行相者已讓道綽善導釋委不述之是故往生要集爲先達而入浄土門闕此宗奥旨於善導二反見之思往生難第三反度得亂想凡夫依稱名行可往生之道理但

晉恐腰誤念恐金誤
體下恐答字脫
云人恐有人誤
忘恐志誤

（追加3）

於自身出離已思定畢爲他人雖欲弘之時機難叶故煩而眼夢中紫雲大聳覆日本國從雲中出无量光從光中百寶色鳥飛散充滿于時昇高山忽奉値生身善導從胷下者念色也從腰上者如常人高僧云汝雖不肖身弘專修念佛故來汝前我是善導也云々從其後弘此法年々繁昌无不流布之境也

或時物語云從顯眞座主御許遣使者云登山次必遂見參有可申承之事必令音信給仍到坂本申此由座主下令對面問云今度何可解脫生死答云如何樣不可過御計又云實然也但先達者若有思定旨者示給其體爲自身者聊有思定旨只早遂往生極樂也又云依順次往生難遂致此尋如何輒遂往生耶答成佛雖難往生易得也依道綽善導意者仰佛願力爲强緣故凡夫生浄土々其後更无言說而還後座主御言云法然房雖智恵深遠聊有偏執失云人來語此事予云於不知之事者必起疑心也座主聞此事誠然云我於顯密敎雖積稽古併爲名利不忘浄土故不闕道綽善導釋非法然房者誰人如此言恥此言隱居大原百日見浄土章疏給然後我已見立法門令來臨給請之云々此時東大寺上人南无阿彌陀佛未思定出離道故告此由即具弟子三十余人而來具此衆參大原源空之方東大寺上人居流座主御房方大原上人居流述浄土法門座主一々領解談義畢座主發一

校恐交誤

内下恐有字脱

大願給、此寺立五坊、相續一向專念行、稱名之外更不交余行、其行一始已來于今不退轉、尋入此門後爲勸妹尼御前、被書念佛勸進之消息、流布世間顯眞消息云是也、大佛上人發一意樂云、我國道俗跪閣魔宮之時、被問校名者、其時爲合唱佛號、付阿彌陀佛名我名、即南无阿彌陀也云、我朝流布阿彌陀佛名事、自此時始也云々

或時物語云、當世人迷法門分際云、輒可解脫生死也、我師有肥後阿闍梨云人、智惠深遠人也、倩顧自身分際、今度不可解脫生死、若此度改生者隔生即忘、故定忘佛法歟、然受長命報待慈尊出世、大蛇是長壽者也、吾當大蛇、但若住大海者、可有中夭、恐依之遠江國笠原庄、内櫻池云池、取領家放文願住此池、死期乞水入掌中死畢、於彼池不風吹牽大浪自起、排上池中塵、諸人作奇特注此由申領家、勸其日比當彼阿闍梨逝去日時、有智惠故知生死難出、有道心故願値佛世、然而不知淨土法門、故發如此意樂、我其時尋得此法者、不顧信不信、指授此法門、於當世佛法者有道心者期遠生緣、無道心者併住名利思、以自身輒言可出生死者、是知機緣分際故也、

或時云、我立淨土宗意趣者、爲示凡夫往生也、若依天台教相者、雖似許凡夫往生、判淨土至淺薄也、若依法相教相者、判淨土雖甚深、全不許凡夫往生也、諸宗所談雖異、惣不許凡

居下恐院字脱

説法大師恐説法大旨誤

喩恐癒誤

夫、生淨土云事、故依善導釋義、興淨土宗時、即凡夫生報土云事顯也、爰人多誹謗云、雖不立宗義可勸念佛往生、今立宗義事、唯爲勝他也云々、若不立別宗者、何顯凡夫生報土之義哉、若人來言念佛往生者、是問何教何宗何師意者、非天台、非法相、非三論、非花嚴、答何宗何師意乎、是故依道綽善導意、立淨土宗、是全非勝他也云々

或時、上人有瘧病、種々療治一切不叶、于時月輪禪定殿下大歎之云、我圖繪善導御影、於上人前供養之、此由被仰遣安居僧都許、御返事云、聖覺同日同時瘧病仕事候、雖然爲御師匠報恩可參勤仕、但早旦可被始御佛事云々、自辰時始説法、未時説法畢、導師併上人共瘧病落畢、又其説法大師者、大師釋尊同衆生時者、恒受病惱給、況凡夫血肉身、云何无其憂、雖然淺智愚鈍衆生者不顧此道理、定懷不信之思歟、上人化導已稱佛意、面遂往生者千萬々々、然者諸佛菩薩諸天龍神、爭不歎衆生、不信四天大王可守佛法者、必可喩我大師上人病惱給也、善導御影前異香薫云々、僧都云、故法印下雨擧名、聖覺身此事尤奇特云々

世間人大驚生不思議思云々

或時云、我立一向專念義、人多謗云、縱雖許諸行往生全不可成念佛往生障、何故强立一向專念義耶、此大偏執義也、答、此難是不知此宗限故也、經已云一向專念无量壽佛、故釋

努下恐力字脱

云一向專稱彌陀佛名、離釋私立此義者、誠所責難去、欲致此難者、先可謗釋尊、次可謗善導、其過全非我身上、當初依弟子過有被流讃岐國云事、其時對一人弟子述一向專念義、西阿彌陀佛云弟子推參云、如此御義努々々不可有事候、各不可令申御返事給云々上人云、汝不見經釋文哉、西阿彌陀佛云、經釋文雖然存世間譏嫌許也、上人云、我雖被截頸不可不云此事云々御氣色尤至誠也、奉見人々流涙隨喜云々

或時自鎮西來修行者、奉問上人云、稱名之時、係心於佛相好事、如何樣可候、上人未言說前傍弟子可然云々上人云、源空不然、唯思若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生許也、以我分際觀佛相好更非如說觀深憑本願口唱名號唯是一事不假令行也、修行者悅退出畢、

或時人問云、釋本願略安心有何意耶、上人答云、知衆生稱念必得往生自然具足三心也、爲顯此理如此釋也云々

或人問云、每日所作配六万十万等數遍而不法與配二万三万如法、何可爲正耶、答云、凡夫習雖配二万三万數遍不可有如法義、唯不如數遍多、所詮爲令心相續也、但必定數非爲要只爲常念也、不定數遍者懈怠因緣者勸數遍也云々

或時問云、智惠若可爲往生要事正直蒙仰可營修學又以但稱名不可有不足者可存其旨、以只今仰可存如來金言候、答云、往生正業是稱名云事、釋文分明也、不簡有智無智云事、又顯然也、然者爲往生者稱名爲足、若欲好學問不只一向念佛可遂往生、奉値彌陀觀音勢至之時、何法門不達、彼國莊嚴、晝夜朝暮說甚深法、可期其時之見佛聞法也、不知念佛往生旨之程可學之、若知之者求不幾之智惠、不嫌稱名之暇也云々

或時云、淨土人師雖多、皆勸菩提心觀察爲正、唯善導一師許无菩提心之往生、以觀察判稱名助業、當世之人、不依善導意、輙不得往生、曇鸞道綽懷感等皆雖爲相承人師、於義者未必一准能々可分別之、不辨此旨者於往生難易難存知者也云々

或時問云、人多勸持齋、此條如何、答、僧尼食作法尤可然也、雖然當世機已衰、食已減、以此分際一食者心偏思食事、念佛心不靜、菩提心經云、食不妨菩提心、心能妨菩提、其上自身可相計也云々

或時問云、於往生業已思定畢、但一期身之有樣云何可存候、答云、僧作法在大小戒律、雖然末法僧不隨之、源空縱禁之、誰人隨之、只所詮念佛相續樣可相計也、爲往生者念佛已爲正業、故守此旨可相勵也、持齋全非正業也、

時下恐云字脫
祈精恐祈請誤下同

（追加8）

或時受教與發心可各別也、中比有一住山者、內々學淨土法門云、我已得此教大旨、雖然未發信心、以何方法建立信心云々、予教云、可令祈精三寶給、自尒以降慇懃祈精之、或時參東大寺念誦、適當上棟木之日、倩見之、忽信心開發、自非匠計略者、彼大物云何居棟上、何況如來善巧不思議力哉、我有願生志、佛有引接願、尤可往生、一得此道理之後、再無疑心、彼人來語此由、經三年之後、遂往生、旁現靈瑞、不可思議也、依學問雖不發心、依見境界之緣起信、唯慇懃係心常思惟、又可祈三寶也云々

或人問云、眞言阿彌陀供養法、是可正行哉、云何、答、不可然也、雖似一隨教其意不同也、眞言教云阿彌陀是已心、如來不可尋外、此教彌陀法藏比丘之成佛也、居西方、其意大異、彼成佛、教也此往生、教也、更以不可同云々

或時云、法門善惡在宗義也、學者雖多、分別宗義者極希也、吾朝眞言有二流、所謂東寺天台是也、其中天台眞言、其宗義非如東寺、所以者、一山內兼學顯密二教、其中法花宗爲本意、故天台奧旨、是即眞言也云、是故不出顯密分之眞言也、東寺眞言、於顯宗敢无雙肩也、我窺諸宗教相、眞言佛心、兩宗取諸宗用爲自相教相、而廢諸宗立自宗、諸宗中至宗義者无等此兩宗也云々

實下者恐亦誤
義下恐存字脫
道恐匠誤
教恐皆歟

非下恐一之字脫

（追加9）

私云、此言下聊有所存歟、選擇集已以眞言佛心入聖道門爲淨土宗教相、以聖道門對淨土門而廢之給、其智惠深遠事、言語道斷者歟、

或云、上人在生時、三井寺貫首大貳僧正公胤、作三卷書破選擇集名淨土決疑抄、其書曰、法花有即往安樂文、觀經有讀誦大乘句、轉讀法花生極樂有何妨、然廢讀誦大乘唯付屬念佛云々是大錯也取意

上人見之、不見終指置云、此僧正此程之人不思、無下分際哉、聞立淨土宗義者、可思定判教權實者可思廢權立實義、覽乍聞立宗義、在理以法花望入觀經往生行中事、似忘宗義廢立、若能學道者、可謂觀經是爾前教也、彼教中不可攝法花、今淨土宗意者、取觀經前後之諸大乘經、皆悉攝往生行內、何法花獨殘之哉、事新不可望入觀經內、普攝意者、教爲對念佛廢之也云々、使者學佛房還語此由、僧正閉口不言說、彼僧正來說法之次、被語於前淨土決疑抄之由來、我今日臨此砌事、偏爲懺悔此事也云々、聽聞道俗貴賤莫不隨喜、其後僧正同遂往生、素懷畢、瑞相非奇特旁多云々

或時云、源空參月輪禪定殿下之時、住山者一人參會聊有憚故不載其名、問云、誠耶立淨土宗給、答云、然也、又問、云何文付立之給耶、答云、就善導觀經疏付屬釋立之也、又云、立宗義云程事、

何唯依一文立之給耶、微咲不物言、還山於法地房法印前語此事、惣不及返答云、法印云、彼上人不物言者、處不足言故也、彼上人於我宗已爲達者、剩亘諸宗普習學、智惠甚深超過常人、故思不及返答、不物言也、努力々々不可住僻見、上人聞此事云、彼法印殊親近奉談法門、故知智惠分涯如此云也、殊於我法門者、相承于源空云事顯然也、

或人問云、常存廢惡修善旨、念佛與常思本願旨、念佛何勝哉、答、廢惡修善是雖諸佛通戒、當世我等悉違背、若不乘別意弘願者、難出生死者歟云々

或時云、汝有選擇集云、文知否、不知云由、此文我作文也、汝可見之、我存生之間、不可流布之由禁之、故人々秘之、依之以成覺房本寫之、當初上人御不例氣出來、給聊御平喩之時、從月輪禪定殿下、爲御形身集要文、可給之由被仰、依之造此書、令進覽、給此書中、或云、約淨土門諸行所比論也、或云、淨土宗觀無量壽經意也云々、上人述此意云、此觀無量壽經、若依天台宗意、余前敎也、故成法花方便、若依法相宗意者、成演別時意、然依淨土宗意者一切敎行悉成念佛方便、故淨土宗觀無量壽經、意云也、又云、聖道門諸行皆修四乘因得四乘果、故不及比校念佛、淨土門諸行者是比校念佛之時、非彌陀本願、光明不攝取之、釋尊不付屬、故云全非比校也、然道綽善導宗義大異也、能々一々分別知之、聖道淨土二門雖

異行體是一也、義意可知云々

造下恐往字脫

可可恐一字衍

稱恐構誤

或時、遠江國蓮花寺住僧禪勝房參上人、奉問種々之事、上人一々答之

一問曰、世間有難者云、八宗九宗外、立淨土宗、是自由也、如何可對治此難候、答云、立宗事者更非佛說、付自所學經論覺極其義也、諸宗習皆以如此、今立淨土宗事、付淨土正依經解得往生極樂義之先達立宗名也、不知宗起者致如此之難也、非難事也、

二問云、於法花眞言者不可入雜行中云、如何對治此難候、答云、惠心先德集一代聖敎造生要集、立十門、其中第九門是往生諸業也、已法花眞言等諸大乘經被入諸行、諸行與雜行言異其意同、今難者不可勝惠心先德歟、

三問云、付余佛余經結緣助成事、可成雜候歟、答、我身乘佛本願之後、決定往生信起之上、結緣他善事、全不可爲雜行、可成往生助業也、善導釋中、已隨他善根以自他善根廻向淨土云々、以此釋可知也、

四問云、極樂有九品差別事、可爲彌陀本願、稱歟、答云、極樂九品者非彌陀本願、更无四十八願中是釋尊巧言也、若說善人惡人生一所者、惡業者可起等慢心、故令有品位之差別、

數恐發誤

說善人進上品惡人下下品也、急參可見云々

五問云、持戒者念佛數遍多往生後淺深如何、上人指所居疊答云、

就有疊論破與不破、全於无疊者、云何論破不破哉、其樣末法中無持戒無破戒但有名字

比丘傳敎大師末法燈明記委明此旨、其上不可持戒破戒沙汰、爲如此之凡夫所敎本願

者、急々可稱名字也、

六問云、念佛行者每日所作有不絕聲之人又有心念取數之人何可爲本候、答云、口唱心

念悉名號何皆可成往生業、唯佛本願爲稱名故、可出聲也、故經說令聲不絕具足十念釋

云稱我名號下至十聲也、聞我耳之程爲高聲念佛、但不知譏嫌而非可高聲、地體可思出

聲也、

七問云、日別念佛數返入相續之程事可定幾候、答云、依善導釋者、万已上可爲相續分

經法門中但雖一万返急申、虛不可過時節、設雖一万返可爲一日一夜之所作、惣一食之間三

度許唱之者能相續者也、但衆生機根不同者、一准不可定之、若志深者自然相續事也、

八問云、禮讃深心中十聲一聲定得往生、乃至一念无有疑 文 又疏中深心念々不捨者是

名正定業 文 云何可分別候、答云、十聲一聲釋是信念佛之樣也、信取一念往生、行一形可

細注經恐念誤

勵也、又一發心已後釋可爲本意也、

九問云、本願一念者可通尋常機臨終機候歟、答云、一念願爲不及二念之機也、不通尋常

機者不可有上盡一形之釋、此釋可得意、必一念非爲佛本願云事顯然也已釋念々不捨

者是名正定之業順彼佛願故唯此釋意可云念々不捨者即順本願、但値本願遲速不同

者發上盡一形下至一念給也、故善導得念佛往生願也 文

十問云、自力他力申事何樣可得心候乎、答云、源空雖非可參殿上機量、自上召者二度參

殿上、此非我可參之式、上御力也、何況阿彌陀佛御力、酬稱名願來迎事、有何不審、自身罪

重、无智者云何不可疑、遂往生、若如此疑者、一切不知佛願者也、爲度如此之罪人所發之

本願也、乍唱此名號、努力々々不可有疑心云々、十方衆生願中有智无智、有罪无罪善人惡

人、持戒破戒、男子女人、乃至三寶滅盡之後十歲衆生无漏、彼三寶滅盡之時念佛衆生與

當時行者比之、當世人如佛也、彼時者人壽十歲也、戒定惠三學不聞名、此等衆生乍知

可預來迎、我身可被捨云事、云何可得心出哉、但極樂不被欣念佛不被信事行者可成往

生障、故云他力願云超世願也、

十一問云、可具至誠等三心 文 三體如何樣可得意候乎、答云、具三心事无別樣、阿彌陀佛本

師恐妙誤

願稱念我名號者、必來迎誓給故、決定深信可被引接也、心念口稱不倦、已得往生之心地而至最後一念不退轉者、自然具足三心也、在家者其中雖无如此分別、只念佛者知生極樂常念佛之輩、自然具三心、多遂往生也、此故一文不通者中神師往生 已上十一問答了

疑玄義分作凝

一、三心料簡事

付疏第四仰云、先淨土惡雜善永以不可生知是以玄義分定即息慮以疑心散即廢惡以修善、廻此二行求願往生 文 又散善義云、上輩上行上根人、求生淨土斷貪嗔 文 然則今此至誠心中所嫌之虛假行者、余善諸行也、三業精進雖勤、內貪嗔邪僞等血毒雜故名雜毒之善、名雜毒之行、云往生不可也、是以禮讚、專雜二行得失中、雜修失云、貪嗔諸見煩惱來間斷、故廻此等雜行、直欲生報佛淨土者、尤不可嫌、道理也、然以身口二業爲外、以意業一爲內者、僻事也、既云雖起三業豈除意業乎、又虛假者、狂惑者云事、僻事、既云苦勵身心又云日夜十二時急走急作如炙頭然者 文 云何假名之行人如此哉、正是雜行者也、次所選取之眞實者、本願功德即正行念佛也、是以玄義分云、言弘願者、如大經說、一切善惡凡夫得生者、莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲增上緣也 云々 是以今文正由彼阿彌陀佛因中行

狂恐誑誤

去過恐過去倒置

菩薩行時、乃至一念一刹那三業所修皆是眞實心中作 云々 由阿彌陀佛因中眞實心中作行惡不雜之善故云眞實也、其義以何得知、次釋凡所施爲趣求亦皆眞實 文 此以眞實施者、施何者云、深心二種、釋第一罪惡生死凡夫云施此衆生也、造惡之凡夫即可由此眞實之機也、云何得知、第二釋阿彌陀佛四十八願攝受衆生等 云々 如此可得心也 云々 深心中反修余善云事、以余善云事、以余行可往生非爲答難破言不可指南也、

五種正行中觀察門事、非十三定善散心念佛行者、極樂有樣相像欣慕心也、

廻向發願心、始眞實深信心中廻向云事、此三心中、回向云心也、去過今生諸善者、三心已前功德取返極樂廻向云也、全三心後非云行諸善也 云々

白道事、雜行中願往生心、白道爲貪嗔水火、被損、以何得知、釋云廻諸行業直向西方也 云々

諸行往生願生心白道問、次專修正行願生心名願力道、以何得知、仰蒙釋迦發遣指南、西方又藉彌陀悲心招喚、今信順二尊之意、不願水火二河、念々无遺乘彼願力之道、捨命已後得生彼國 文 已下文是也、正行者、乘願力道故、念不貪嗔水火損害、是以譬喩中云、西岸上有人喚言、汝一心正念直來我能護汝、衆不畏墮於水火難 云々 合喩中云、言西岸上有人喚者、即喩彌陀願意也 云々 專修正行人不可恐貪嗔煩惱也、乘本願力白道、豈容被損火

焰水波哉云々

一、定善中自余衆行雖名是善、若比念佛者全非比校也云事

諸行與念佛比校之時云念佛勝余行劣彌諍論不絶事也、只念佛本願行也諸善非本願行也云時、眞言法花等甚深微妙行全非比校也、存此旨可云比校義也、

一、无智者三心具云事

一向心念佛申、無疑往生思、即三心具足也云々

私云、一向心者至誠心也、无疑者深信也、往生思心廻向發願心也、

一、余行シツヘケレトモセスト思、專修心也、余行目出ケレトモ身カナハヲハエセスト思ハ、修セヲトモ雜行心也云々

一、造惡機念佛事

造惡身之故念佛申也、造惡料非念佛申可得心也云々

一、善惡機事

念佛申者只生付マヽニテ申ヘシ、善人乍善人、惡人乍惡人、本マヽニテ申スヘシ、此入念佛之故、始持戒破戒ナニクレト云ヘカラス、只本體アリノマヽニテ申ヘシト云々付之

之間云、本聖道門人持戒歸淨土門之時捨持戒持齋修專修念佛即成破戒過如何、答、念佛行者欲犯惡之時思念佛申此罪滅スヘシ存犯罪誠惡義也、但眞言有調伏之法云事、兼憑後調之法故也云事、其樣犯罪兼憑本願之滅罪力全不苦事也云々

一、惡機一人置此機往生謂道理ナリケリト知程習タルヲ、淨土宗善學云也、此宗惡人爲手本善人攝也、聖道門善人爲手本惡人攝也云々

一、行者生所依心行事

但念佛生極樂國、但余行生懈慢國也、然念佛余善兼行者亦有二、念佛方心重雜余行生極樂、余行方心重助念佛生懈慢云々

一、知我身具三心事

如大經說歎喜踊躍心既發可知三心具瑞也、歡喜者往生決定思故喜心也、往生不定歎位未發三心也云者也、不發三心故无歡喜心、是則致疑故歎也云々

一、一法攝萬機事

第十八願云十方衆生、无漏十方之衆生、我願內込十方也、法照禪師云、彼佛因中立弘誓、聞名念我惣來迎、不簡貪窮將富貴、不簡下智與高才、不簡多聞持淨戒、不簡破戒罪根深、但

使廻心多念佛、能令瓦礫變成金云々此文心我身貪窮不造功德、下知不知法門、破戒雖犯罪障、便廻心多念佛思云々

一、无智爲本事

凡聖道門、極智惠、離生死、淨土門、還愚癡、生極樂、所以趣聖道門之時、瑩智惠、守禁戒、淨心性、以爲宗、然入淨土門之日、不憑智惠、不護戒行、不調心器、只々無甲斐、成無智者、憑本願、願往生也云々書此狀、御自筆、禪勝房田舍下京ツトニ取ラセムトテ給タリト云々又云、源空念佛申一文不通男女齊申、全年來修學智惠一分不憑也、然カク知又クルシカラヌソト云々

一、阿彌陀經一心不乱事

一心者、何事心一スルソト云、一向念佛申阿彌陀佛心我心一成也、如天台十疑論云、如世間慕人能受慕者機念相投必成其事、慕人者阿彌陀佛也、戀者我等也、既心發一向阿彌陀、早佛心一成也、故云一心不乱、上少善根福德因緣念ウツサヌ也云々

一、阿彌陀經善男子善女事

此執持名號身成故、云善男子善女人也、如下品上生一生十惡凡夫最後一稱時被讃善

叶上恐不字脫

男子、實本機五濁惡世惡時衆生也、是以觀念法門釋阿彌陀經、今文云若佛在世、若佛滅後、一切造罪凡夫云々可思合、

一、定機事

淨土宗弘於大原談論時、法門比牛角、論事不切機根比源空勝タリシ也、聖道門法門、雖深今機叶、淨土門似淺今根易叶云時、人皆承伏云々

一、前念命終後念即生事

前念後念者、此命盡後受生時分也、非行念、往生稱名、稱名正覺業、然則稱名命終、正定中終者也云々

一、阿彌陀經難信之法事

此罪惡凡夫依但稱名得往生云事、衆生不信也、依之釋迦諸佛切證誠云也云々

一、无戒定惠者可念佛云事

此無下義也、縱雖戒定惠、三學全具、不修本願念佛者不可得往生、雖无戒定惠、一向稱名必可得往生也云々

一、乃至一念即得往生事

至上恐下字脫

(追加20)

我等非一念機乃至機也云々又乃至十念如此吾等非十念機乃至機也云々釋上盡一形至十聲一聲等定得往生文如此吾等非下至十聲機上盡一形機也云々

一、以五決定往生云事

一彌陀本願決定也、二釋迦所說決定也、三諸佛證誠決定也、四善導敎釋決定也、五我等信心決定、以此義故往生決定也云々

一、若存若亡事

乘本願云存、下本願云亡也、乘有二義、謂造惡業之時發道心之時也、造罪時ヲルヽトハ者、如此造惡身定可背佛意思即ヲルヽ也、此云亡也、道心發時ヲルヽトハ者、如此發道心申念佛叶佛意思即ヲルヽニテ有也、此云亡也、造罪時乘者、罪ツクラルヽニ付モ、此本願ナカラマシカハ何爲乘此本願之故、雖造惡決定往生ヘシト思乘也、此云存、又道心發時乘者、如此之道心不始于今、我過去生生發、然未離生死之故、知道心不救我唯佛願力我助得、サレハ道心有無アレ其不願唯須稱名號生淨土思即乘也、此云存云々

一、平生臨終事

不下恐造字脫得恐德誤

(追加21)

於平生念佛往生不定思、臨終念佛又以不定也、以平生念佛決定思、臨終又以決定也云々

一、一念信心事

取信於一念、盡行於一形、疑一念往生者、即多念皆疑念之念佛也云々又云、一期終一念一人往生、況一生、間積多念、功豈不遂一度往生乎、每一念有一人往生德、何況多念無一往生哉云々

一、本願成就事

念佛我所作也、往生佛所作也、往生佛御力セシメ給物、我心トカクセムト思自力也、唯須待付稱名之來迎

一、禮讃若能如上念々相續事

往生要集指三心五念四修云如上也、依之云、之三心五念四修中明正助二行指之云念々相續也云々

一、无外雜緣得正念故事

此見他大善我心无怯弱云也、假令見法勝寺九重塔我不立一寸塔云无疑心又拜東大寺大佛我不半寸佛云無卑下心、稱名一念得无上功得決定可往生思定云外雜緣得正

爲凡夫恐誤本爲凡夫

念故也、如此信者念佛、與彌陀本願相應、與釋迦教无相違、隨順諸佛證誠ニテアル也、雜行十三失以此義可得心也、

一、請用念佛事

趣他請修念佛者、有三種利益、一自行勇猛也、二助旦那願念三爲能衆成利益也、功德有體用、二體留自用施他、妙樂大師云、以善法體不可與人已此釋願以此功德文之所也云々

一、善人尙以往生況惡人乎事 口傳有之

私云、彌陀本願以自力可雜生死有方便善人爲ヲコシ給哀極重惡人無他方便輩ヲコシ給ヘリ、然菩薩賢聖付之求往生、凡夫善人歸此願得往生、況罪惡凡夫尤可憑此他力云也、惡領解不可住邪見、譬如云爲凡夫兼爲聖人、能々可得心々々々、初三日三夜讀余之、後一日讀之後二夜一日讀之、

別傳記云

法然上人、美作州人也、姓漆間氏也、本國之本師智鏡房 本山僧 上人十五歲師云非直人欲登山、上人慈父云、我有敵、登山之後聞被打敵可訪後世云々 即十五歲登山、黑谷慈眼房爲

鏡賀他傳作慶雅景賀二雅或慶上恐奉字脫

細注意義不明

師出家授戒、然間慈父被打敵畢、上人聞此由師乞暇遁世云、遁世之人无智惡候也、依之始談義於三所謂玄義一所、文句一所、止觀一所也、每日遇三所、依之三ヶ年亘六十卷畢、其後籠居黑谷、經藏披見一切經、與師問答、師時 閉口、師即捧二字云、知者爲師、今上人返爲師云々 又花嚴宗章疏見立醍醐有花嚴宗先達行決之、彼師云鏡賀法橋法橋云、我雖相承此宗、此程不分明、依上人開處々不審云々 依之鏡賀二字即受梵網心地戒品、或時自御室鏡賀許花嚴眞言勝劣判可進云々 依之鏡賀思念佛智照覽有憚、眞言爲勝、爰上人、鏡賀許出來給房主悅云、自御室有如此之仰云々 上人問何樣判思食房主云如上申、此上人存外次第也源空所存一端申サムトテ、花嚴宗勝眞言事一々被顯、依之房主承伏、御室返答花嚴勝タルの由申畢、其後智鏡房自美作州上洛、上人奉二字、但眞言宗中河少將阿闍梨受之、法相法門見立藏俊決之、藏俊返二字已上四人師匠皆進二字狀、竹林房法印靜賢奉値上人取念佛、信心 共文者義也 三井公胤於殿上七ヶ不審開上人、上人老耄之後、不見聖敎三十年、其後山僧筑前弟子、爲令遂竪義參上人、內々談法門、竪者云、三十年不見聖敎被仰、各分明事、當時勤學越、非直之人御云々 公胤夢見云、源空本地身、大勢至菩薩、衆生敎化故來此界度々云々

戒恐形誤

庄恐廣誤

御臨終日記

建暦元年十一月十七日、可入洛之由賜宣旨、藤中納言光親奉也、同月廿日、入洛、住東山大谷、同二年正月二日、老病之上、日來不食殊增、凡此二三年、耳ヲボロニ、心朦昧也、然而死期已近、如昔耳目分明也、雖不語余事、常談往生事、高聲念佛无絶、夜睡眠時舌口鎭動、見人爲奇特之思、同三日戌時、上人語弟子云、我本在天竺、交聲聞僧、常行頭陀、其後來本國、入天台宗、又勸念佛、弟子問云、可令往生極樂哉、答云、我本在極樂之身、可然、同十一日辰時、上人起居高聲念佛、聞人流涙、告弟子云、可高聲念佛、阿彌陀佛來給也、唱此佛名者不虛、云、歎念佛功德事、如昔、又觀音勢至菩薩聖衆在前拜之乎否、弟子云、不奉拜、聞之彌勸念佛給、其時可拜本尊之由奉勸、上人以指々空、此外又有佛、即語云、此十余年奉拜極樂莊嚴化佛菩薩事是常也、又御手付五色糸、可令執之給之由勸者、如此事者是大樣事也、云、終不取、同廿日巳時、當坊上紫雲聳、其中有圓戒雲、其色鮮、如畫像佛、行道人々於處々見之、弟子云、此空紫雲已聳、御往生近給歟、上人云、哀事哉、爲令一切衆生信念佛也、云々同日未時、殊開眼仰空、自西方東方見送事五六返、人皆奇之奉問、佛在歟、然也答、同廿三日紫雲立之由令風聞、同廿四日午時、紫雲大聳、在西山、炭燒十余人見之來而語、又從庄隆

寺下向尼、於路頭來而語、爰上人念佛不退之上、自廿三日至廿五日、殊强盛高聲念佛事、或一時或二時、自廿四日酉時至廿五日、高聲念佛无絶、弟子五六人番々助音、至廿五日午時、聲漸細、高聲時々相交、集庭若干人々皆聞之、正臨終時、懸慈覺大師九條袈裟、頭北面西、誦光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨、如眠命終、其時午正中也、諸人競來拜之、供如盛市、或人七八年之前有感夢、有人見以外大雙紙、思何文、而見之、注諸人往生文也、若有法、然上人往生注處遙至奥注也、有光明遍照四句文、上人誦此文、可被往生夢覺不語上人、不語弟子、令符合此夢、生奇特思、上人往生之後以消息被注送、恐繁不載、旁有不思議夢想等、可足云、故畧不記、御入滅者滿八十也、

如來滅後一百年、有阿育王、不信佛法、國中人民歌佛遺典、大王云、佛有何德、超衆生、若有値佛者、往而可尋云々、大臣云、波斯匿王妹比丘尼値佛之人也、其時大王請問、佛有何殊異、比丘尼云、佛功德難盡、粗說一相、王聞此切德、即歡喜、心開悟、上人入滅以後及三十年、當世奉値上人之人、其數雖多、時代若移者、於在生之有樣、定懷朦昧歟、爲之今聊抄記見聞事、

至恐觀誤

宮樹恐寶樹誤

喜恐意誤

闇恐周誤

九恐元誤

又上人在生之時、發得口稱三昧、常見淨土、依正、以自筆之、勢至房傳之、上人往生之後、明遍僧都尋之、加一見、流隨喜涙、即被送本處、當時聊聞及此由、未見本者不記其旨、後得彼記、寫之、御生年當六十六（長承二年癸丑誕生）建久九年正月一日、從山桃、法橋敎慶之許、歸後未時、恒例每月七日念佛始行之、一日明相少現之、自然甚明也、二日水想觀自然成就之、惣念佛七ヶ日之內、地想觀之中、瑠璃相少分見之、二月四日朝瑠璃地分明現之、云々六日後夜、瑠璃宮殿、相現之、云々七日朝重又現之、即似宮殿、類其相現之、惣、水想地想宮樹寶池宮殿之五觀、始自正月一日、至于二月七日、三十七ヶ日之間也、每日七萬反、念佛不退勤之、依之此等、相現也、云々始自二月廿五日、明處開目、自眼根、佛出生、赤袋瑠璃壺見之、其前閉目見之、開目失之、二月廿八日依病念佛延之、一萬或二萬文、左眼、其後有光明放、又光端赤又眼、有瑠璃、其眼如瑠璃壺、瑠璃壺、有赤花、如寶瓶、又日入後出見四方、有赤有青寶樹、其高无定、高下隨喜或四五丈或二三丈、云々八月一日如本七萬返始之、及九月廿二日朝地想分明、現闇圓七八段許也、其後廿三日後夜并朝又分明現之、云々正治二年二月之比、地想等、五觀、行住坐臥隨意、任意、運現之、建仁九年二月八日後夜、聞鳥舌琴音、聞笛音等、聞、其後隨日、自在聽音、正月五日、三度勢至菩薩御後、丈六許、御面現、云々西持佛堂勢至菩

而恐圓誤

形、丈六面現、是則此菩薩既以念佛法門爲所證法門、故今爲念佛音、示現、其相不可疑也、同廿六日、始座處下四方一段許青瑠璃地也、云々於今者、依經并釋、往生無疑、地觀文、心得無疑、故云々可思也、建仁二年二月廿一日、高畠少將殿於持佛堂、謁之、其間如例修念佛、見阿彌陀佛之後、障子徹通佛面而現、大如長丈六、佛面、即忽隱給、廿八日午時也、元久三年正月四日、念佛之間、三尊現大身、又五日如前、云々此三昧發得之記、年來之間、勢觀房秘藏、不披露、於沒後不面傳得之書畢

法然上人傳記依及覽雖爲枝葉書之

義演

附錄 第一

一 黑谷源空上人傳 世稱十六門記。

安居院沙門釋　聖覺記

夫以。衆生の沈淪。無量無邊なれば。諸佛の濟度も無數無窮なり。然といへども迷倒の我等。罪業甚重にして。過去若干の如來の敎化にも。既にもて漏來り。現在十方の諸佛の利益にも。尙また障られたり。今末法濁世に人身を受たりといへども。釋尊の遺法にあひ。幸に聖敎を聞。聖敎しなことに。行門まちまちに別たり。若その要を言ば唯二種あり。一には聖道門。唯自力をはげまし。穢土にありて。佛道を成就す。此土は惡緣これ多が故に。十進て九は退す。是故に此門を難行道と名。二には淨土門。仰て佛願を信じ。佛の名號を唱て。淨土に往生し。速に菩提を證。彼國は善緣これ多が故に。進のみありて退なし。是故に此門を易行道と名。然則聖道の一種は正像の兩時。尙もて難行なり。何況末法をや。是故に愚癡迷亂の凡夫。依行することあたはず。淨土の一法は。末法濁世。亦これ易行なり。何況上代をや。是故に五逆謗法の惡人。同往生を得。倩此理を案ずれば。宿習誠に憑し。何なる善因に催されてか。我等此法に遇る。往生尤輒。佛果彌近し。歡喜身に餘り。感涙忍難し。抑此事は誰人の恩德ぞや。偏にこれ先師空上人の慈訓の化益なり。報じても猶餘あり。謝しても亦飽ざる者なり。仍て報恩謝德の爲に。勸化の始末を記す。唯慈恩を仰て淺言を恥ず。後見誹謗することなかれ。于時安貞元年丁亥極月上旬の候云爾。

謹述二上人行狀一略有二十六大門一。

一　託胎前後因緣門　二　出胎已後利益門

三　最初入學佛法門　四　離親登山學行門
五　受戒樂求閑居門　六　發心離山住谷門
七　披攬一代聖教門　八　信修念佛往生門
九　善導來現授教門　十　勸進念佛往生門
十一殿下敎命造書門　十二頭光現顯本地門
十三流罪歸洛利益門　十四臨終念佛往生門
十五沒後順緣利益門　十六沒後逆緣利益門

第一　託胎前後因緣門

釋迦大師入滅の後。二千八十二歳の星霜を過て。大日本國。人王七十五代の帝。崇德院の御宇に。上人出世し給。美作の國。久米の南條。稻岡庄の人なり。父は粂の押領使漆間時國。母は秦氏の女なり。夫婦年來孝子なきことを歎て。佛に願。神に祈に祈請其功積り。願望已に滿足して。長承元年壬子七月上旬。妻の夢に剃刀を飲と見て有身玉ふ。夢の事を時國に語。時國。善哉善哉仁者は男子を生べし。但剃刀を飲と夢見ことは。此子成長して出家學道し佛法の棟梁となり。諸衆生を敎化し。遁世出家せしめて。佛道に引入べき。瑞相なりとぞ申されける。

第二　出胎已後利益門

長承二年癸丑四月七日の午の正中に上人誕生し給へり。而に四五歳の後は。坐するにかならず西に向。言初口遊にも。南無阿彌陀佛と唱給ふ。親疎見者。これを怪まずといふことなし。保延七年辛酉の春の比。時國夜討の爲に殺さる。其敵は伯耆權守。源長明が息男明石の源內武者所定明なり。造意の由來は。定明稻岡の庄を知行して。多の年月を送に。時國下掌の身として。定明を輕ずるに依て。遂に對面せざりき。其遺恨なりとぞ。其夜九歳の小童。小箭をもて敵を射に。定明が目の間に立。此疵によりて顯れんことを思。卽逐電してけり。見聞の上下讚悅せずといふことなし。時の人みな小童を呼て小箭兒とぞ云ける。時國大事の疵を蒙りて今を最後の時。九歳の子に向て遺言すらく。我死

去の後。世の風儀に隨て。敵を恨ることなかれ。これ偏に先世の報なり。若此讎を報んと欲はゞ。世世生生互に害心を懷て。在在所所に輪回絕ことなからん。生ずる者は皆死を悲む。愁憂更に限なし。我此疵を痛。人又何ぞ痛ざらん。我此命を惜。人豈惜ざらんや。我が情をもて。人の思を知べし。然則一向に專自他平等の濟度を祈り。怨瞋悉消て。親疎同菩提に至らんことを願べしと。言をはりて。心を直し西に向て。高聲に念佛して。眠がごとく命終し給ひけり。

第三　最初入學佛法門

永治元年七月十日改元辛酉の歳末に。當國菩提寺の院主觀學得業智鏡房の弟子となる。師。經書を授るに。性はなはだ峻爽にして憶持して忘給はず。

第四　離親登山學行門

觀學。等侶に語て曰。此兒の器量直人にはあらず。何ぞ邊國に住しめん。はやく台嶺に登すべしと。而間此小童を相具して。母の所に行て此由を語。母聞て。仁者をば無人の可留とぞ深思へば菩提寺に住つるさへ。猶遠と思なり。況登山せんをや。思よらざることなりといへば。小童。昔本師釋迦尊は。御年十九にして。父の大王に忍。密に王宮を出で。終に成佛して。無量の衆生を濟度し給へり。今自は生年十三。暇を悲母に申し。法山に登り。出家修學して。父母の深恩を報じ。皆佛道に引導し。我も人も悟を開たてまつらん。返返歎給ことなかれ。努力恨給はざれと申せば。母の曰。誠に生子に訓らるゝとは是なり。傳聞。往昔釋迦如來は。御母の爲に摩耶經を說給へりと。今更に思合て。有難ぞ侍る。然はあれども凡夫の拙智。恩愛の別忍難とて。落淚千行なり。小童。又傳聞參河守大江定基と云し人は。出家學道し。老母の許を蒙て。大唐に渡り。彼國にして圓通大師の號を得。本朝の名を上たり。それ佛も流轉三界中。

恩愛不能斷。棄恩入無爲。眞實報恩者と說給ふ。自もはやく四明に登。すみやかに一乘を學て。二親の菩提を訪なば。豈眞實の報恩に非らんやと。條條に理をつくして申ければ。母も理に屈して。泣泣暇を許けり。觀學得業も。此問答往復を聞て歡喜心を迷し。落涙袂を潤て。申演ん方もなく。語少にてぞ還ける。終に天養二年乙丑の春。比叡山西塔の北谷。持法房源光の所に送遣。其書狀に云。進上大聖文殊の像一體と。源光。此消息を見て。文殊の像を尋るに。像は無して。年十二三小兒のみ來臨す。其時源光はやく意得て文殊の像とは。此兒を讚ならんと。奇特の思をなし。喜て一文を授るに。輒十義を悟ければ。源光。我はこれ短才淺智なり。碩學に屬て。深理を窮しむべしとて。功德院肥後阿闍梨皇圓の許に送遣す。彼阿闍梨は。參河權守重亮の嫡男。少納言資隆朝臣の阿兄。隆寛律師の伯父。皇覺法橋の弟子にして。當時の名匠。台嶺の賢哲なり。此兒修學夜に積。才智日に瑩。萬人異を歎。一山同怪めり。

第五　受戒樂求閑居門

久安三年丁卯仲冬八日に。出家受戒し給ぬ。時に年十五歲なり。有時師に白て言。出家受戒の本望已に足ぬ。今はすなはち居を山林に卜。跡を煙霞に暗さんと。師。これを聞て。受難人身を受たり。苟に遁世せらるべし。又遇難佛法に遇り。何ぞ修學せざらんや。登山の驗に。六十卷を讀て後。本意を遂べしと諫ければ。われ閑居を欣樂ことは。名利の散亂を免れ。靜に經論章疏を學せん爲なり。貴命はなはだ背難。修學もとも本意なりとて。生年十六の春。始て三大部を稟承し。螢雪の勤懈怠なく。繩錐の勵勇猛にして數數睡眠を除。三箇年をへて。六十卷の奧義を究。智惠明達にして。併先哲に超給へり。

第六　發心離山住谷門

久安六年庚午九月十二日。生年十八歲にして。始

て黑谷の禪室に入り。慈眼房叡空上人をもて師とす。彼師は。瑜伽祕密の眞言。玉を瑩。圓頓大乘の戒律。鏡を懸。學解輩なく。道心最深して。誠に師の位に足れり。上人の發心を聞て隨喜し讚して。仁者少年にして。早出離の心を發せり。實に法爾法然の上人なれば。法然をもて房號とすべし。實名は源空とす。これ源光の上の字と。叡空の下の字とを。拾取とぞ申されける。抑法弟聖覺。黑谷の爲體を闚見に。谷深して流淨。囂亂併去れり。路細して跡幽なり。隱居尤便あり。聖敎藏に滿り。修學自勇。本尊光を耀す。行法何怠らん。遁世籠居の上人の。心を留給こと誠に其謂あり。上人此に住て。年月幾ならざるに眞言。戒律。一身に兼學して。血脈を叡空上人より稟承す。

第七　披覽一代聖敎門

一代の聖敎。飢を忍て終日披見し。諸宗の章疏。眠を除て通夜習學す。敎文を多諳じ。義理を深悟る。それ此篇に就て條條多端なれども。略して三五を記す。具に載に遑あらず。

一。暗夜に聖敎を見給に。燈なしといへども。室內明なり。白河の信空上人。此瑞相を拜見して身毛爲竪。感涙頻にして。ふかく上人の德を貴べり。

二。華嚴經披讀の時。青蛇經机の上に蟠る。信空上人又これを見て怪み心中に怖畏す。其夜の夢に。大龍かたちを現じて。我はこれ華嚴經を守護する所の龍神なり。我を恐るゝ事なかれ。上人を守たてまつらん爲に。今顯現すといへり。

三。法華三昧を修行し給時。大白象王。道場に來現せり。

四。有時上人。予に語ての給く。我が性の分齊。何なる大卷の書なりとも。三遍これを閱讀ば文義を諳記す。本朝將來の諸宗の聖敎廣披に。粗幽致を悟得て皆本宗の印可を蒙りき。

五。大納言律師寬雅に遇て。三論宗を習給ひし

時。かの宗の法門。自見の義を演給に。寛雅是を聞て遍身より汗を流し。言もいはず落涙して。隨喜の餘に。祕書を取出して。自宗の法門付屬するに器量の人なし。貴客すでに此法門に達し給り。授與するに足りとて悉もて付屬す。六。南都の贈僧正藏俊僧都に謁て。法相宗を學せし時。上人自義を述給に。藏俊。始には貴房の義勢細細に聞へ難と高聲に談じけるが。後には舌を卷て信伏し。良久聽聞して。掌を合せ讃して曰。我等が相承の法門。いまだかくのごとき深義をしらず。公は何さま直也人には非じ。恐はこれ佛陀の化現ならん。我願は初の問難の過を免ん爲に。一期の間供養したてまつらんと欲すとて。毎年に供物を送られける。

第八　信修念佛往生門

上人生年九歲より。四十三に至まて。三十五年の學問は。これ偏に出離の道にわづらひ。順次解脫の要路をしらん爲なり。是に依て遍諸宗を學し給に。師匠かへりて弟子となりぬ。有時上人。予に語ての給はく。法相三論天台華嚴眞言佛心の諸大乘の宗。遍學し悉明るに。入門は異なりといへども。皆佛性の一理を悟顯ことを明す。所詮は一致なり。法は深妙なりといへども。我が機すべて及難し。經典を披覽するに。其智最愚なり。行法を修習するに。其心翻て昧し。朝朝に定めて惡趣に沈んことを恐怖す。夕夕に出離の緣の闕たることを悲歎す。忙忙たる恨には渡に船を失がごとし。朦朦たる憂には闇に道に迷がごとし。歎ながら如來の教法を習。悲ながら人師の解釋を學。黑谷の報恩藏に入て。一切經を披見すること。既に五遍に及ぬ。然れども猶いまだ出離の要法を悟得ず。愁情彌深。學意增盛なり。爰に善因忽に熟し。宿緣頓に顯れ。京師善導和尙勸化の八帖の聖書（上人在世般舟讃未二流布一故云二八帖書一）を拜見するに。末代造惡の凡夫。出離生死の旨を輒定判し給へり。粗管見していまだ玄意を曉めず

といへども。隨喜身に餘り。身毛爲竪て。とりわき見こと三遍。前後合て八遍なり。時に觀經散善義の。一心專念彌陀名號の文に至て。善導の元意を得たり。歡喜の餘に聞人なかりしかども。予が如の下機の行法は。阿彌陀佛の法藏因位の昔。かねて定置るゝをやと。高聲に唱て。感悅髓に徹り。落涙千行なりき。終に承安五年（乙丑）の春。齡四十三の時。たちどころに餘行をすてゝ。一向專修念佛門に入て。始て六万遍を唱。（已上載二先師詞一）上人其後一万遍を加て。毎日七万遍の念佛の行者なり。有時上人悲歎しての給はく。當世諸方の道俗を見聞するに。無道心の者は。悉名利に住して。修行すること能ざれば。生死を出るにあらず。道心智者は。今度輒生死を出離と謂て。遠來緣を期す。是故に順次の得脫はなはだ思を絕たり。信心の手を空して法財をとらず。所詮此は是或は淨土の緣なくして。累世難行の機なり。或は淨土の緣あれども。いまだ良師に遇ざるの人なり。かくの如の二機は淨土の易行易往なることをしらず。必永劫の行に趣。爰をもて源空が初の師。肥後阿闍梨皇圓は。宏才博覽にして。智慧深遠なりしかども。我が機分をはかるに今度生死を出難し。蛇身長命の果報を受て。彌勒の出世に値て。得道せんと欲しけり。其願空からず。大蛇の身を受て。遠江國笠原の庄櫻池（水面一町許）に住給。智慧あるが故に。生死の離がたきことを知り。道心あるが故に。慈尊に土んことを願。然どもいまだ淨土の法門を知給はず。誠に淺猿きことなり。此條源空が深歎なり。爾時われもし此法門を知得たらましかば。信不信はいざしらず。勸化し申ん者を。哀なるかな。悲かな。出淨の甚難ことを深悲て。蛇身三熱の苦を受給ん。

第九　善導來現授敎門

有時上人。予に示て云。源空已に導和尙の釋に歸して。其元意を得たり。其元意とは。亂想の凡

夫。但無觀稱名の一行に依て。佛の本願をもて。增上緣として。順次に極樂世界に往生するなり。但自身の往生は決定して疑なし。然に有緣の蒙昧を勸進して淨土に生ぜしめんと欲ふ。所見の義勢是とやせん。非とやせん。凡智辨難しと。かく思惟して。心に念じ勞ふ夜の夢中に。一人の僧あり。腰より上は墨染。裳より下は金色なる寶衣を著し給。予低頭合掌して問て云。大德は誰人ぞや。靈僧答給はく。我はこれ善導なり。汝專修念佛を弘通せんと欲する料簡の義理。我が釋文に違はず。釋文は卽是證を請て定畢ぬ。是故に兼ては又佛意に違はず。よろしく弘通すべし。化益もとも多からん。予伏請て曰。大德然るべくば淨土の敎門。面授口決して。自も信じ他をも敎しめ給へ。和尙示給はく。善哉善哉。菩薩大聖。淨土の敎法。願に隨て授與せんと。仍て三部契經八軸の金典今九帖書中除二般舟讚一敬て付屬を蒙こと慇懃鄭重なりきと。上人の勸化。和尙の印可。快佛意に稱へり。もつぱら仰信すべし。

第十　勸進念佛往生門

上人已に和尙の指授を蒙て。黑谷の禪坊を出て。吉水の菴室に住給しより以來。自行化他併念佛の勸なり。これによりて自造の選擇集にも自行化他唯綽二念佛一。然間希問レ津者。示以二西方通津一。適尋レ行者。誨以二念佛別行一。信レ之者多。不レ信者尠。當レ知淨土之敎叩二時機一而當二行運一也。念佛之行感二水月一而得二昇降一也といへり。上人の化導日にしたがひて盛に世に弘まり。道俗男女唯念佛をことゝし。王城邊土專稱名を口遊とす。

有時上人示て云。淨土宗の學者は。先此旨を知べし。有緣の人の爲には。身命財を捨ても。偏に淨土の法を說べし。自の往生の爲には。諸塵を離て。專念佛の行を修すべし。此二事の外。全他の營なしとぞ仰られける。御遺言誡に

貴故に此を記し末代に聞しむ。

弟子聖覺畏りて尋申して云。當今末法は。機解昧劣にして。如來の敎法に應ぜざれば。多は如法にあらず。聖道門の行人。殊更に虛假を懷けり。かく存じ候は。淨土敎を敬重する執情の故にや。將又此義ありや。上人答給はく。末法の濁世には。聖道の虛假。此條異論なし。先哲悉決判せり。淨土の學人も少虛ありといへども。聖道の多分虛假なるには同からず。故に禪林寺の十因に云。夫以衆生無始輪二回諸趣一。諸佛更出濟度無量。恨漏二諸佛之利益一。猶爲二生死之凡夫一。適値二釋尊之遺法一。盍レ勵二出離之聖行一。一生空暮。再會何日。眞言止觀之行。道幽易レ迷。三論法相之敎。理奧難レ悟。不二勇猛精進者一何修レ之。不二聰明利智者一誰學レ之。朝家簡定賜二其賞一。學徒競望增二其欲一。暗二三密行一。恭登二遍照之位一。餝二毀戒質一。誤居二持律之職一。實世間之假名智者之所レ厭也。今至二念佛宗一者。所レ行佛號不レ妨二行住坐臥一。所レ期極樂不レ簡二道俗貴賤一。衆生罪重一何能滅。彌陀願深十念往生。公家不レ賞自離二名位之欲一。檀那不レ祈亦無二虛受之罪一。況南北諸宗互諍二權實之敎一。西方一家獨無二方便之門一といへり。是故に末法に、は聖道の行人自然に虛僞を懷。念佛の行者は多は至誠なり。淨土門の少虛は。機の過にして。行體の失にあらず。聖道門の多虛は。行法の咎にして機の失にはあらず。斯乃難行にして機に應ぜざるが故なり。然れども万機みな僞を懷べきにあらず。利智精進にして機法相應せば。たやすく道を得べし。混亂すべからず。淨土宗の意は。難を捨て、易を取。敢偏執すること勿れ。二道の緣を糺べし。

治承四年庚子十二月二十八日。平家南都をせめしとき。東大寺に火かゝりしかば。皆悉炎燒す。其後造興の爲に。右大辨藤原行隆朝臣をもて。大奉行に定られけるに。行隆。敬て往昔より彼寺は。一天四海の人民を勸て。御建立ありけ

り。今又勸進の聖を付られんか。眞力を假ずんば。俗補勇難と。勅答申し上ければ。尤先例に任べしとて。大勸進の聖の沙汰侍けるに。法然房源空こそ。其器量に當れりと。選定て。行隆朝臣を御使にて勅宣ありけるに。上人申されけるは。源空が好所は。念佛勸進の行なり。起立塔像の大勸進職は其器量にあらず。若勸進の職に應ぜば。世務心を惱て。念佛退轉しなん。念佛永廢せば。唯佛意に背のみにあらず。兼ては亦和尙の意に違ん。若念佛退轉なからんと欲はゞ。造興成難かるべし。造營功畢ずんば。豈命旨に背ざらんや。且は聖見を慚。且は勅命を恐。然ば則一旦の宣旨に隨はんよりは。永辭せんにはしかずとて。固辭退申されけり。行隆朝臣その志の堅固なるをみて。ことの由を奏しければ。もし門徒の中に。其器量の者あらば。舉申べきよし。重て仰下されけるによて。上人。醍醐の俊乘房重源を召て。勅に應じて參內せしむ。法皇（後白川）喜給ひて。遂に大勸進の職に補せられにけり。上人宣旨を辭して。偏に稱名の行を興し自利利他。唯專修念佛のみにして。寸暇を惜給へり。

有時鎭西の聖光房と聖覺と但兩人。上人の御前にて。淨土の法門聽聞しける時。聖光房。尋申て云。仰て本願を信じ。實に往生を願ずれども。妄念鎭に起て止難。散亂彌倍て靜ならず。此條如何が候や。上人答給はく。妄念餘念をもかへりみず。散亂不淨をもいはず。唯口に名號を唱よ。もし能稱名すれば。佛名の德として妄念自止。散亂自靜り。三業自調て願心自發なり。然れば願生の心の少にも南無阿彌陀佛。散亂の增時も南無阿彌陀佛。妄念の起時も南無阿彌陀佛。善心の起時も南無阿彌陀佛。不淨の時も南無阿彌陀佛。淸淨の時も南無阿彌陀佛。三心の闕たるにも南無阿彌陀佛。三心具するにも南無阿彌陀佛。三心現起するにも南は阿至如

佛。三心成就するにも南無阿彌陀佛。これすなはち決定往生の方便なり。心腑に納て忘るゝことなかれ。聖覺尋て云。今の御義のごときは。三心を闕といへども。唯佛名を唱れば。名號の德として。三心發得して。往生すべしと聞へ候。然に和尙。虛假心の行人は。晝夜十二時に。急に走急に作こと。頭然を拂がごとく。勇猛に勤行すとも。往生不可なりと。定判し給へり。彼此の御義如何が合せんや。聖光房の云。予が所存も亦爾りと。上人答て云。此不審は今の所談にあらず。これは本より三心を具すれども。歷緣對境の時に。如法ならざる。其治方を述なり。所引の和尙の解釋は一向に三心の闕たるを嫌。意趣もとも巧なり。是故に難にあらずと仰ければ。弟子等兩人ながら信仰の餘に。申し演ん詞もなく。唯一同に阿と云き。

顯眞法眼。大原に居住の時。惠光房永辨法印。事の緣ありて尋訪ありしに。法眼問たまはく。末代濁惡の我等凡夫。罪業日に增て。散亂疑惑なり。いかゞして今度生死を離るべきや。法印答て云。此條は賢愚皆もて一同なり。但此程法然上人に參謁して。出離の要法を明たり。所謂彌陀他力念佛往生これなり。此法を得て後。年頃の積憤雲のごとく忽に散じ。當時の歡喜物に喩をとるなし。かくのごときの義は。法然上人に遇給て。委細に御尋あるべしと申けるに依て。有時法眼。上人に對面して。いまだ罪障を斷ぜざる。散亂の凡夫。いかゞして極樂に順次往生すべきやと問給ふに。上人。成佛は甚難く。往生は尤易し。善導和尙の御釋をもて。三部經を拜見するに。佛の本願力を强緣として。亂想の凡夫。報佛の淨土に生ず。自力聖道の執情をもて。他力淨土の眞門を疑ことなかれと答給ければ。法眼。言もの給ず。坊に歸て後。人に語たまはく。智惠第一の法然房も。見立る所の義理に於ては。大に僻めりと。上人傳聞て。我が知ざ

ることには。謗をなすこと常の法なり。始て驚べきにあらず。尤も道理なりとの給けるを。法眼又かへりきゝ給て。自他の兩門に相語て云。倩案ずるに吾顯密の法門を兼學すといへども。偏に名利を志て解脱の爲にせず。法然房は幼少の時より道心者にて。出離生死の爲に一代の佛法を學して。見立る所の義なり。誠に錯あるべからず。然ば則深先非を悔。後信を專にせんと欲すとて。上人を龍禪寺に請じ給ふ。此條風聞て。淨敎を聽聞せんが爲に。道俗雲のごとくに集來て。勝林の室に餘れり。前權少僧都明遍三論碩學法印權大僧都證眞天台碩學侍從已講貞慶解脱房法相宗印權大僧都智海天台碩學此等の明匠を始として。諸宗の賢哲其數をしらず。而間皆面々に富樓那の辯舌を震て。重重に難を致す。囂こと盛なる市のごとし。上人。鸚鵡の囀が如に各各の疑難を會釋し給へば。諸宗の明匠舌を卷て言ことなく。靜なること春の日に似たり。爾時上人。聖の

諸宗は。理ふかく解微にして。證を得ること甚難し。此則世くだり人愚にして。機敎相違すれば。其修行に堪ず。ながく苦海に沈淪して。いまだ涅槃の岸に到らず。淨土の一門は解し易く行じ易ければ。得脱最速なり。愚鈍下智を捨ざれば。庸學なを勇あり。破戒重罪を簡ざれば。惡人なを生る。行住坐臥を別ざれば。念念に常に行じ。時處諸緣を論ぜざれば。散亂猶唱ふ。其止惡をいへば。念時日の三懺悔を許せり。其修善をいへば。一念十念猶生ると勸たり。和尙の釋禮讚に唯有二念佛一蒙二光攝一。當レ知本願最爲レ强。眞形光明遍二法界一。蒙二光觸一者心不退なりといへり。攝取不捨の光益は。念念稱名の德をさづく。尤これを信ずべし。尤これを勤べしと。一日一夜詞を盡て。淨敎を講說し給へば。聽聞の道俗。或は淚を流て仰信し。或は聲を擧て歎喜す。其中に坊主法眼顯眞は。雙眼より淚を流し。佛前に踊立て。自香爐をとり。旋遶行道し

て。高聲に念佛し給へば。南北の明匠三百餘人。異口同音に。念佛を修行すること。三日三夜間斷なし。其外の參禮結緣の聽聞衆は。其數を知らざりき。爾しより以降。處處の道場。悉佛名を唱。童子の戲にも併念佛を口遊とす。其後法眼顯眞は。召出されて。天台の座主に補せらる。叡山の高僧常倫に超出せり。此等の明匠。皆上人に歸し給ふ。又座主顯眞。十二人の時衆を定おきて。不斷念佛ををこなひ給ふ。一向に稱名相續して。餘行をまじへず。其行を勤始てより。今に退轉なし。

有時上人。靈山寺にして。三七日夜の不斷念佛を勤行し給に。燈なくして光明あり。第五の夜にいたりて。行道するに。勢至菩薩同列に交立給けり。時衆夢のごとく幽に此を拜して。上人にこのよしを申に。爾ることも侍らんと答給ふ。謹て此瑞相を讚嘆するに。且二種あり。一には觀念法門に。如二觀經下文一。若有レ人至心常念二阿彌陀佛及二菩薩一。觀音勢至常與二行人一。作二勝友知識一隨逐影護し給ふといへり。勢至菩薩道場に影現し給こと。深經釋に叶へり。誰か疑心を懷かんや。二には上人は勢至菩薩の垂迹なりと云こと世擧てこれを稱す。爰に時衆等。念佛勇猛にして。罪障微薄なれば。彌信心をまし。勇銳に勤行せしめんが爲に。聖力加祐して。幽に本身を見し給ふ歟。然ば則若は在世にも若は滅後にも。上人勸化の流を信じて酌ん人は。自ら解脱の行を正して。兼ては他の誤を直べし。已に信ぜんものは彌信じ。いまだ信ぜざるものは早これを信ずべし。

後白川法皇。上人を勅請ありて。菩薩戒を說しめ。兼ては往生要集を講ぜしめ給ふ時に。上人聲を澄して。夫往生極樂の敎行は。濁世末代の目足なり。道俗貴賤誰か歸せざらん者と。よみあげ給へば。此一言に。万乘百官殿中簾中。今始てきこしめさるゝやうに。各心肝に染てたう

とく。皆感涙を流し給へり。太上法皇は。聞法隨喜の餘に。左京權太夫藤原隆信朝臣に勅して。上人の眞影を寫さしめて。蓮華王院の寶藏に收られける。

東大寺の大勸進。俊乘房重源上人。念佛信仰の餘に。一の意樂を發て。我が國の道俗。閻魔呵責の庭上に跪て其名字を答ん時。佛名を唱しめん爲に。阿彌陀佛名をつくべしとて。先我が名を南無阿彌陀佛とぞ號せられける。我が朝の阿彌陀佛名は。此より始れり。

第十一　殿下教命造書門

月輪の禪定殿下。宿緣に催されて。信仰世に超。崇重比類なく。西方をもて所期とし。念佛をもて正業とし給へり。此によりて建久九年戊午の春。對馬左衛門尉重經を御使者として。淨土の法門度々聽聞すといへども。公私忩劇の間。卽施卽廢なり。庶幾は紙墨に載給て。廢忘に備侍らんと仰せられければ。上人嚴命に遵て一軸の書を造り。選擇本願念佛集と名けて。高覽にそなへ給ふ。彼集の奥に云。不レ圖蒙レ仰辭謝無レ地。仍今聊集二念佛要文一。剩述二念佛要義一。唯願二命旨一不レ顧二不敏一。是則無慙無愧之甚也。庶幾一經二高覽一之後。埋二于壁底一莫レ遺二窓前一。恐爲レ不レ令二破法之者墮一於惡道一也と。極重の罪人は念佛を誹謗す。此書を祕することは。かの謗罪を止んが爲なり。法事讚にも。五濁增時多二疑謗一。道俗相嫌不レ用レ聞。見レ有二修行一起二瞋毒一。方便破壞競生レ怨。如レ此生盲闡提輩。毀二滅頓教一永沈淪。超二過大地微塵劫一。未レ可レ得レ離二三途身一。大衆同心皆懺二悔所有破法罪因緣一といへり。縱人有て念佛を誹謗すとも驚べきにあらず。末法濁世の罪人の定れる習なり。來報は定て阿鼻地獄にあらん。信順の人は。逆緣をもて彼罪人を濟はんと思べし。

第十二　頭光現顯本地門

元久二年乙丑四月一日に。上人月輪殿にして念佛

讚嘆の後。退出し給ふ時。禪定殿下庭上に走降て。五體を地に投じて。上人を禮拜し。良久ありて起させ給て。上人の頭の上に。金光顯現して光映徹し。中に一の寶瓶ありつると仰せられて。御涙にむせび給ふ。爾時始て。上人は勢至菩薩の化身なりと知れり。愚禿。此篇を記するに身毛爲竪て雙眼に涙を浮ぶ。憑しきかな。喜しきかな。濁世の我等衆生を導んが爲に。極樂の聖衆。假に凡夫を示し。念佛の行を弘給ふ。仰て本地を討れば極樂世界の聖衆なり。往生淨土の勸念佛に憑あり。俯して垂迹を訪へば三昧發得の祖師なり。專修念佛の敎往生に疑なし。本迹異なりといへども。化導是一なり。念佛の衆生を攝して。淨國に生ぜしむ。後世を恐ん輩は。誰か此師に歸せざらん。極樂を望の類は何ぞ上人の釋を信ぜざらん。

第十三　流罪歸洛利益門

建永二年丁卯二月二十七日。吹毛の讒奏に依て。還俗の姓名源元彥を賜り。遠流の宣旨をくだされければ。上人の勸化をあふぐ道俗貴賤皆なげきかなしみあへるに。上人は感悅の色ましまして。源空が遠流を蒙こと。邊土の化緣すでに熟せり。誠によろこぶ所なり。普萬機を敎化して。念佛門に入しめんとぞ仰せられける。慈悲誓願の色。外に顯れて。哀にたうとかりけり。月輪の禪定殿下。しばらく御離別の恨を息んが爲に。法性寺の小御堂に。上人を一夜逗留たてまつられけり。上人の給はく。會者定離は常のならひ。今はじめたるにあらず。何ぞ深歎んや。宿緣空からずば。同一蓮に坐せん。淨土の再會甚近にあり。今の別は暫の悲み。春の夜の夢のごとし。信謗ともに緣として。先に生て後を導ん。引攝緣はこれ淨土の樂なり。夫現生すら猶もて疎からず。同名號を唱へ。同一光明の中にありて。同聖衆の護念を蒙る。同法尤親し。愚に疎と思食べからず。南無阿彌陀佛と唱

給へば。住所は隔といへども。源空に親しとす。源空も南無阿彌陀佛と唱たてまつるが故なり。念佛を緯とせざる人は。肩を並膝を與といへども。源空に疎かるべし。三業皆異なるが故なりとの給ば。禪定殿下悲哀心を迷し。一言もの給はざりけり。

同三月十六日に。法性寺を立て配所に趣給ふ。配所は讃岐國小松の庄なり。斯乃門弟住蓮安樂不善の咎とて。吹毛の讒言によりて。罪なき上人を流刑に行れけり。凡讒人の訴に依て左遷せられし賢哲。上代ためしなきにあらず。吾朝には役行者。菅丞相。異國には一行阿闍梨。白樂天。これ皆罪なくして。謫所にすみ給へり。夫權化の善巧は。凡智測難し。信謗緣を結び。違順益を蒙る。上人配所に趣給へば。帝都は闇に燈を失しがごとく。邊土は盲の明を得るに似たり。洛陽は悲を含。田舍は喜を懷。悲ても念佛を唱。喜ても名號を稱す。悲喜俱に善を勸。大權の化益誠に巧なりと。たうとかりけり。

同八月。勅免の宣旨をくだされしかども。なを洛中の往還をゆるされざりしかば。攝津國勝尼寺に。しばらく住給。すでに五箇年を經て。せ洛に還歸あるべきよしの宣旨を蒙り。權中納言藤原光親卿の奉行として。建暦元年辛未十二月十二日に帝都に歸り入て。東山大谷淨室に居住し給ふ。昔釋尊忉利天にして九旬安居の說法終て後。上天の雲より來下し給ふ時。人天大會歡喜して供養したてまつりしがごとく。今上人南海の波をさかのぼり給へば。道俗男女。各あらそひて供養をのべけり。羣參のともがら。一夜の中を算るに。一千餘人ときこゑき。閑居の室なりといへども。貴賤賢愚來集て法を聞こと。猶盛なる市のごとし。利益倍多して。信仰日に新なり。

第十四　臨終念佛往生門

建暦二年壬申正月二日より。上人老病やうやく興起して日頃不食の所勞。殊に增氣し給へり。凡

此二三年は。耳目彌朦昧なりしかども。往生の期ちかづきければ。二根明利にして。色を見聲を聞給ふこと。もつぱら盛年にたがはず。見聞の道俗。奇異の思をなす。唯高聲の念佛相續勇猛にして。其中間には更に餘言をまじゑず。ひとへに淨土の事を談じ。睡眠の時にも猶直念佛を唱給へり。有時上人の給はく。高聲に念佛を唱へよ。阿彌陀佛の來給へり。南無阿彌陀佛と唱者は。一人としても。極樂に往生せずといふ事なしとて。念佛の功德をほめ給へり。二十四日の酉時より二十五日の巳時に至までは。高聲念佛殊更に勇猛なり。五六人の僧。番を結て助音するに助音は苦むといへども。暮齡病惱の御身敢て退屈し給はず。道俗隨喜し。傍人驚讚せり。午時に至て念佛の御聲やうやく幽にして。高聲は時時唱給ふ。午刻の正中に。年來所持の慈覺大師の九條の袈裟を著し。頭北面西にして。光明遍照。十方世界。念佛衆生。攝取不捨。南無阿彌陀佛と誦して。睡がごとくして。息絶たまひぬ。音聲止て後。猶念佛を唱給ふと覺しくて。脣舌を動給へり。春秋八十に滿たまふ。

第十五　沒後順緣利益門

上人の滅後に。八方の遺弟。各上人の正義を弘通して。念佛世にひろまり。稱名國にみつ。信ぜざる者は少。信ずる者尤多し。これ上人權化の効。聖衆護念の力なり。或は上人勸化の假名の書。大胡に示さる消息。二位殿に敎化の返狀。此等の書に依て本願を信じ。極樂に往生する。道俗貴賤。年年にまさり日日にさかりにして。念佛の繁昌眼前に證あり。爰に禪林寺の靜遍僧都は上人入滅の後。選擇集に歸して。一向專修念佛者となれり。かの僧都はこれ眞言家の賢哲。小野廣澤の兩流を相傳せる明匠なりけれども。淨土の法門有緣なるにや。彼宗を捨て、念佛門に歸し給へり。皆これ上人滅後の利益なり。現證を見聞して。化導の遍ことを知れり。

第十六　沒後逆緣利益門

上人左遷の時。予に語給はく。貧道が流罪。更に歎苦にあらず。念佛の興行。洛陽にして年ひさしゝ。今邊鄙に趣て。田夫野人を教化せん事。年來の本意なり。但いたむところは。源空が弘むる淨土の法門は。造惡の凡夫出離の要法なるが故に。念佛守護の神祇冥道。無道の障難をとがめ給はん歟。長存命せられば。因果の空からざる事を思合べしとぞ仰られける。其後いくばくの歳月をへず。わづかに十箇年の間に。承久の逆亂おこりて天下の騷動にをよび。君は北海の島に行幸して隱岐院と號す。讒臣は戰場に討負て或は命を失ものもあり。まことに不思議にぞ侍る。又後堀川院の御宇安貞元年丁亥六月二十一日に比叡山の衆徒一同に僉議すらく。專修念佛世に興行してより。聖道の諸宗習學するに人なし。しかれば奏聞を經て。善導勸化の念佛の行法を停廢せしむべし。所詮彼法門の興起は法然房根本なれば。大谷の墳墓を破却し。源空が死骸を取て鴨河に流すべきにさだめ。奏し申ければ。つゐに勅許を蒙り。同二十二日に。山門の使者大谷に下來て廟堂を破んとす。爾時京都の守護。修理亮平時氏。このことを洩聞て。右兵衛尉（内藤五郎兵衛）藤原盛政入道（法名西佛）を差遣す。盛政。子息一人を相具して。まかりむかつて。縱公家の御許ありといふとも。子細を武家に觸申すべきの所に。左右なく。是を執行るゝの條。もとも狼藉なり。はなはだ自由なり。若制法にかゝはらずば。武家の成敗にまかすべきよし。頻に禁止すといへども。山門の使敢て相隨ざりければ。盛政入道高聲に喚て云。醫王山王も許給へ。念佛守護の四天大王龍神八部。護法天童に。代りたてまつりて。弟子西佛。魔緣を排侍らん。これ定て天魔波旬癡侶に託し。僞て山門三千の使と號して。留難を致なるべし。豈圖きや。戰場の鏑をもて往生極樂の門出とし。凶惡の輩をもて臨終知識の因緣となすべしとは。但汝等各南無阿彌陀佛と唱よ。一一に壽命を斷べし。顯には關東の御家人として。弓箭を擕て狼藉を防。冥には西土の念佛者として。師恩を報じて凶徒を罰すべしと。命を捨てゝ馳廻ければ。面を向人なく蛛の子を散がごとく。皆悉逃失けり。宇津宮入道。俄なるに。五六百騎を催具して馳參じ。廟堂を守護したてまつりて。哀なるかな。昔は名利の爲に關東の將軍に侍衛し。今は菩提の爲に西方の上人を守護すと云ければ。万人此詞を聞て。皆哀を催けり。終に廟墳を改て。嵯峨の二尊院に隱置ぬ。路次の程は。守護の兵二千餘騎。前後にかこみて。わたしたてまつりき。此則極重惡人の信順の心なきをば。逆緣を結しめ。來世に導給はん。善巧方便ならん。在世の慈訓。滅後の法流。順逆の二緣。利益まことに廣し。具に記すにあたはず。各見聞に任るのみ。

上人入滅時。弟子生年四十六歳。數年積レ功親承二淨教一了。

（一本幸に作る）

二　法然上人傳記（世稱九卷傳。）

法然上人繪詞卷第一

夫以。我本師釋迦如來は。あまねく流浪三界の迷徒をすくはんがために。ふかく平等一子の悲願をおこしましますによりて。たちまちに無勝莊嚴の土をすてゝ。忝婆濁世の國に出給しよりこのゝち。非生に生を現じ給ふゆへに。則無憂樹の本に華ひらけ。非滅に滅をとなへ給ふがゆへに。終に雙樹林の間に風いたむ。在世八十箇年。化導雲のごとく霞の如し。滅後二千餘週。衆生恩をしたひ。德をしたふ。但し八萬の敎法まち〳〵なりといへども。大小の機根しな〳〵なりといへども。みなこれ穢土にして自力をはげまし。濁世にありて得道を期す。たゞこれ聖道難行の敎にしていまだ淨土易往にあづから

ず。爰漢家には善導和尚。彌陀の化身として。本願の名號をひろめ。我朝には法然上人。勢至の來現として。他力の往生をすゝめ給へり。然則濁世の導師として。但信稱名の行をさづけ。如來の使者として。出離解脱の敎をのぶ。時機相應して順次の往生をとげ。感應道交して揭焉の引接にあづかるともがら。道俗貴賤をゑらばず。男女老少をいはず。平生の濟度といひ。夢の後の巨益といひ。目に見へ耳にみてり。聞ても信ぜず。あひながら行ぜざらんものは。ひとへに宿業の拙き事をはづべし。何ぞ古賢の事にあづからんや。然に今上人の遷化。すでに一百歲におよべり。星霜をのづからあひへだたる。遺弟の弘通又四五家にわかれたり。蘭菊をの〳〵美をほしきまゝになす。然間沒後の義鉾。たがひにまち〳〵にして。在世の行狀心おなじくしてしるしおかる。これによりて。或古老の口傳をとぶらひ。或諸家の記錄をたづねて。見

イだたるへだたる
一本へだたるに作る
ウなす一本すに作る

をよび聞及ぶ所。かれをしるし。これをおこさんとおもふ心ざしありといふとも。只おもむく巨海の滴水をくみ。九牛が一毛をしるす。おろかなるもののさとりやすからむため。見聞んものゝ信をすすめんために。數軸の畫圖にあらはし。万代の明鑒にそなふ。念佛の行者として誰人か信受せざらむ。

一　上人誕生事　寫本のごとし

二　鞭竹馬遊覽事

此兒。襁褓の中より出て。やうやく竹馬にむちうつて遊ぶ。其名を勢至丸と號す。二歲時。出生の日時にあたりて。初言に南無阿彌陀佛と唱ふ。聞人耳をおどろかす。四五歲より後は。その心成人のごとく。性甚聰敏にして。聞所も忘れず。またともすれば。西の壁に向ふくせあり。月氏には釋迦大師。初言に南無佛と唱へたまひ。日域には上宮太子。初言に南無佛と唱へ給ふ。震旦の智者大師は。生をうけてより以來。

エ念々一本悉くに作る

常に西方にむかへり。今此小兒。三國の奇瑞を一身に周備せり。見聞の人是を美談とし。往還の輩これをあやしまずといふことなし。

三　夜討事

保延七年の春の頃。時國夜討のために殺害せらる。其敵は伯耆守源長明が嫡男。武者所定明也。人呼て明石の源內武者といふ。堀河院御在位の時の瀧口也。殺害の造立は。定明。稻岡庄の領所として。執務年月をへるといへども。時國。廳官として。これを蔑如して面謁せざる遺恨なり。時に勢至丸。九歲にして。其難をのがれて是を見給ふに。敵は定明也と見給ひて。小矢を以て。暗所よりこれを射るに。あやまたず。定明が目の間に射たてけり。此疵をしるしとして。あらはるべき事疑なきによりて。彼定明。逐電して歸りいらず。これによりて小矢兒と名く。見聞の諸人感嘆せずといふ事なし。

四　臨終事

時國。深疵をかうぶりて。今はかぎりに成ければ。九歲なる勢至丸をよびて云。我は此疵にて身まかりなんとす。但いさゝかも敵人をうらむる事なかれ。是前世のむくひ也。更に一世の事に非ず。猶此遺恨を思はゞ。互に殘害をまねくべし。報酬念々にたへず。輪廻生々につくべからず。凡そ生あるものは死をいたむ。我此疵を痛。人またいたまざらんや。我此命をおしむ。人豈おしまざらんや。心をおこして人の腹におけば。我をもて他の心をしりぬべし。昔敎主釋尊も。頭痛背痛とのたまふ。曠劫の殺罪。佛果になを餘殃あり。一念の怨心賢聖其障礙を恐る。今生の妄緣を捨て。將來の宿報をつくる事なかれ。梵王の四等を行ずる。慈心を最とす。世尊の十重をときたまふ。殺生を初に禁しむ。汝あなかしこ。法師になりて。學問して爺孃の恩德を報じ。衆生の依怙とならんとおもふべしといひをはりて。心をたゞしくして。西方に向て高聲念佛し

て。ねむるがごとくにして息たえにけり。

五　登菩提寺事

當國菩提寺の院主。觀覺得業は。秦氏弟也。小矢兒には叔父なり。此兒。父におくれて後は。偏に親子の如く愛好して弟子とす。同年の冬。菩提寺へのぼせけり。はじめて佛敎をさづくるに。性甚岐嶷にして。聞く所の事憶持して更にわすれず。

六　爲登山母乞暇事

觀覺。同朋に語て云。此兒の器量を見るに。常のともがらに類せず。何ぞ徒に邊國にあらんやとて。久安三年丁卯生年十五歲の春。延曆寺へぞのぼせける。其時。此兒母に暇をこひて云。母。獨身におはします。我。一子たり。然朝夕に給仕して。父の形見とも見へ奉るべけれども。登山して佛法修行して。二親をみちびき奉らんとおもふ。今の別をなげき給ふ事なかれ。流轉三界中。恩愛不能斷。棄恩入無爲。眞實報恩者と承れば。今より後は戀悲み恨み思召べからず。參河守大江定基は。出家して大唐へ渡り侍し時。老母にゆるされを蒙りてこそ。彼國にして圓通大師の諡號を蒙り。本朝に聖衆來迎の佳什を傳へしか。ゆめ〳〵惜思召べからずなど。かきくどき念比にのたまふ。母ことはりにをれて。綠なる髮をかきなでて。泪計ぞ。頂にそゝぎける。今思ひ合すれば。祕密灌頂とかやにぞ。ものはいはずして。頂に水をそゝぐなると申は。ヶ樣の事にや侍らん。母思のあまりにくちずさみける歌。

かたみとてはかなき親のとゝめてし
　子のわかれさへまたいかにせん

此理を。觀覺こそ申さまほしく侍つるを。こま〳〵とあり〳〵しく。仰こそ侍ぬれば。それにつけても。かしこくぞ御學問のよし。思ひより侍ける。昔晉の肇公。幼くして師匠の法華經飜譯のとき。人天交接のことは。書わづらひ給け

今の下一本日字あり

頂一本項に作る

肇公は叡公の誤なるべし拾遺古德傳には叡公に作る

る。さかしう思合られて哀にこそ侍れ。母。生る子にをしへらるると。悉達太子。母のために摩耶經を說き給けるも。思ひなぞらへつべし。小兒辯說をふるにつき。老母承諾するに似たれども。有爲の習忍びがたく。浮世のわかれ迷ひやすく。昔の釋尊は衆生利益のために。十九にして父の王に忍びて城をこえて檀特山にこもり給き。今の小童は。佛法習學のために。十五にして。母儀をこしらへて。家をいでて比叡山に昇ぬ。

七　參會法性寺殿御出事

此兒。入洛の時。久安三年二月十三日。つくり路にて。時の關白法性寺殿の御出に參り合奉りて。傍なる小河に打寄給けるを。御車より。いかなるおさなきものぞと。御尋ありければ。兒のをくりに侍ける僧。美作國より學問のために。比叡山にまかりのぼる小童に侍よし。申ければ。御車をかけはづされ。ちかく御覽じて。能〳〵學問せらるべし。學生になり給はゞ。師匠にたのみ思召べきよし。念比に御契有けり。いなか童に對して。この禮は心得ぬ事哉と。上下の供奉人思ける程に。彼小童。眼より光を放てり。たゞ人にあらざる間此禮を致せりと。後に仰られけり。實に不思議にこそ。

八　登西塔北谷持法房事

古註云。從是以下事義相同。上卷欠行又少違在之。故令書寫者也。

古註云。此傳一部九卷十八册者。未レ知二作者何人一也。而猶其傳行二于世一甚希矣。予適探二得一本一。而最備二龜鏡一。恨其本闕二初之一册一。忙然無レ所レ考レ之。然幸得二一卷之有用爲二繪詞一者一。而並以考レ之。其詞如レ合二符契一。數々校レ之。後來一卷卽前本初二而已。若其異者。唯不レ安二其題目及標目一。且闕二時國夜討一。觀覺入室兩段之詞一。而存二其畫圖一而已。間亦有二存略言一者。蓋爲レ有レ不レ便二於畫圖一也。然則初之一册本。唯其本文而已。今私加二其題目及標章一。以類二下諸卷一。後暫得二善本一。則爲二削補一焉。

河一本路に作る

忍一本背に作る

法然上人傳記卷第一上并序

上人誕生事

時國夜討にあひ小矢兒敵を討給事
菩提寺にいたりて觀覺得業に師とし仕る事
童子上洛事
入洛事

古註云。此一卷寫本に目錄なし。又題號もなし。然に此本上下を一卷にして。段々に繪あるものあり。下卷の初の童子登山の體をかきけるより已下。叡空上人臨終の段に至迄。兩本相同じ。但詞に少づゝ略したる所あり。されども兩本引合するに毛頭相違なし。故にその詞計書とりて。私に題號と目錄とをくわへ侍るなり。後日に正本有ば。校合すべきものなり。

上人誕生事

老の眠。たちまちにおどろきやすく。春の夢。むなしく夜をのこすに。つら〳〵往事をかへりみれば。舊友こと〴〵くゆきて。法跡わづかに存す。累代の口傳。みゝのそこにとゞまりて。ひとり師々の芳訓を案ずれば。千行の涙さいぎりておつ。これを後昆にしめして。はひまふに樂そなへんとおもふ。ふげばいよ〳〵たかく。きればいよ〳〵かたし。いはんとするに。ことのはたえ。記せんとするに筆をよばず。いまこゝろみに。畫圖のゑんをかりて。むかしを見る事。今のごとくならんとおもふ。且は勸學のまなこをやしなひ。かつは信謗ともに第一義に歸するゑんとならん。あゝおんを報じ德を謝するおしへは。內外の典籍。同じく是をすゝむ。たれかしたがはざらん。しかるに我本師釋尊。諸佛のいまだすくはざる所。五濁增盛の時をゑらび。十方の淨土に擯棄せられたる。逆惡の衆生のために。十惡の山。邪見の林に入給ひしよりこのかた。正法一千餘廻ををくりて。漢の明帝の代に。はじめて東漸す。代々の三藏。宗々の諸祖。淨土をたてゝ衆生をすゝむるに。おほくは地前地上の聖人をその機とす。花嚴に元曉といふ人。正爲凡夫傍爲聖人の談をなせども。いまだひとへに罪惡の凡夫のためには釋せず。たゞ

達者一本達人に作る

我が高祖光明寺の善導大師のみまし〳〵て。證明如來說法。十六觀法。但爲常沒衆生。不干大小聖也。と定判したまへり。さればこの經王の義趣をのぶる。諸家六十有餘におよべりといへども。今家の妙解。神僧の指授せしにはしかず。よて自他宗の辯鋒。言下に舌をまき。歸伏せずといふことなし。そのよの化導。僧傳にのするところ。絕倫のほまれ。ひとり我高祖にかぎる物か。つたへきく彼遺文は。仁明。文德の御代にあたりて。慈覺智證兩大師の將來として。興隆さかむなりき。叡岳のいたゞきには。常行三昧堂の花萼をみがきて。淸和の時。明持の達者。誦經念佛の曲韻をつたへて。朝野遠近。尊崇におよぶ。結構國家にみちて。行儀都鄙にあまねくして万代の證跡たり。傳弘時いたりて。とをく經道滅盡の後榮をかぎる。又惠心先德に三卷の要集ありて。嘉名を漢土の月にあげ。證相を異朝の風になびかしき。しかはあれど。稱名正行のかたはらに。しばらく廣弘の大心をあげて。諸行助念の方法をすゝむ。然にわれら身兼濟にたらず行業に闕て。やゝもすれば。局分をなすに似たり。こゝに同山源空上人と申人あり。彌陀本願の稱名は。正業決定の行體なれば。助緣をまたずして。願行具足し。專修不亂の一念は。無生の大悟にかなふと決判し給へり。これによて。他宗の高德。梵風をあふぎ。諸家の雲客。疑滯を散ず。都鄙同じく歸して。草のなびくがごとし。道俗ともに專意なれば。百卽百生の證。たなごころをさす。極惡最下をもて當機とし。極善最上をもて正業とす。醍醐の妙藥。たれかしめす所ぞや。印土には釋尊出世の本懷たり。漢家には善導大師の證誠たり。我朝には惠心の先德の開板たり。源空上人の決釋也。まさにいまあひよりもことにあをく。一入再入のいろよりも。なをふかき。曩祖上人のおんを報ぜんために。諸方の傳記をひらき。古老の直說について。かつ

〳〵是を記す。もし過滅あらば。後昆删補をくわへよ。多言をいとふ事なかれ。

上人誕生事

抑如來滅後二千八十年。日本國人皇七十五代。崇德院の御宇。長承二年癸丑四月七日。午正中に。上人誕生し給へり。生所は。美作國久米の南條。いなをかのきたの庄。栃社なり。父は久米の押領使漆間の時國。母は秦氏なり。上人。本姓は右大臣源の光より六代の孫。式部太郎源の年。陽明門にして。內藏人兼高を殺害せし罪によりて。美作國に配流せられき。爰當國の押領使。神護太夫元國といひし男。實子なきにより。源の年をもて聟として。彼職をゆづる。年が子息。外祖元國があとをつたへて。漆間の盛行と號す。其子國弘なり。其三男時國。孝子なき事を憂て。佛神に祈誓す。長承元年七月十四日夜。夫の夢に。月輪をいだくと見る。つまの夢にかみそりをのむと見る。各夢さめて後。たがひにかたり。たがひにあはす。月輪と見るは。明了の智者をまふくべき相なりと。かみそりと見るは。天下の戒師を生ずべき相なりと。則懷胎す。それより後。母ひとへに佛法に歸して酒肉五辛をたつ。其身やすく其心柔和にして。誕生の時すこしの苦惱なく。男子を平產す。此時紫雲。天におほひ。しろき幡。二流下て。庭上の椋木にかゝる。やうらく露をたれ。金銀光を映す。是を名付て兩幡の椋木と云。見者掌をあはせ。聞者耳をおどろかす。希奇の瑞相。權化の再誕なりとぞ申あへる。

古註云。此間に繪あり。平產の體をかけり。

時國夜討にあひ小矢兒敵を討給事

古註云。此段詞かけて禮紙のみあり。又繪あり。夜討の體也。

菩提寺にいたりて勸覺得業に師とし仕る事

古註云。此間詞かけて禮紙のみあり。又繪あり。

童子上洛事

（イ）いかに一本いかゞに作る

（ウ）小河一本小路に作る

觀覺あむじていはく。この兒つねのともがらにあらず。おしきかな。いたづらに邊國にとゞめむことゝて。久安三年丁卯。生年十五の春。延曆寺へのぼせけるに。この兒母にいとまをこひて云。母獨身におはします。我一子也。朝夕に給仕して。父のかたみとも見え奉るべけれども。さしても。たが御ためも。後世のつとにもならず。いまは登山して佛法を修學し。二親をみちびき奉らんとおもふ。いまのわかれをなげき思給事なかれ。流轉三界中。恩愛不能斷。棄恩入無爲。眞實報恩者とうけ給はれば。けふより後。こひし。かなしみ。うらみおぼしめすべからず。つたへきく。大江定基は出家して唐へわたりし時。老母にゆるされをかうぶりてこそ。彼國にして圓通大師の謚號をかうぶりけれ。ゆめ〳〵おしみおぼしめすべからずと。かきくどきねんごろにいひければ。はゝもことはりにおれて。みどりなるかみをかきなでゝ。涙をぞかうべにそゝぎける。おもひあはせらるゝ事あり。祕密灌頂とかやにぞ。物をばいわずして。いたゞきに五瓶の智水をそゝぐとは申事あんなれ。母おもひのあまりに。

かたみとてはかなきをやのとゝめてし
このわかれさへまたいかにせん

童兒入洛事

この兒。入洛の時。久安三年二月十三日。つくりみちにて。時の關白法性寺殿の御出にまいりあひ奉て。かたはら成小河（ウ）にうちより給けるを。御車よりあのおさなきもの。馬にのせながら。具してまいれと。仰くだされけるにつきて。御隨身とも具參す。御車をかけはづし御合掌ありて。いかなるちごぞと。御たづねありければ。美作國より比叡の山に學問の爲にまかりのぼると申。殿下の仰にさる事あるらん。かまへて學問よくせらるべし。師匠にたのみたてまつるべしと。ねんどろに御契ありけり。上下の御

ともの人。これほどのいなかちごに。過分の御禮儀何事ぞやと思あひけるに。後に仰のありけるは。かのちごたゞ人にあらず。頂のうへにうつくしき。天蓋ありき。ちかくて見しには。眼精に金光ありつと。これをうけ給はる人々。いかでか感じ申ざらん。御覽じとゞめらるゝ御目と申。見えたてまつる人と申。あらかたじけなや〳〵とぞ申あへる。

法然上人傳記卷第一下

八　登西塔北谷持法房事
九　入皇圓阿闍梨室事
十　遂出家受戒學六十卷事
十一　入叡空上人室事
十二　法花修行時白象出現事
十三　眞言修行時觀成就事
十四　暗夜得光明事
十五　花嚴披覽時青龍出現事
十六　藏俊僧都寛雅法印等對面事
十七　紫雲覆日本國事
十八　叡空上人臨終事

八　登西塔北谷持法房事

久安三年三月十五日に登山す。かの叔父の觀覺は。もとは山門の住侶也けるが。隨分の修學者にて。成業の望をなしけるに。思ひの外に流轉しける恨によりて南都にうつりけるが。學道の望をとげて。ほどなく得業になりて。久しくの得業とぞ申ける。然どもなを本山の舊執ありけるにや。此兒をば。延曆寺西塔北谷持法房の源光法師がもとへぞのぼせける。彼時觀覺得業が狀に。進上。大聖文殊の像一體。とかける間。源光此消息を披閲して。文殊の像を相尋に。文殊の像は見へずして。小兒來れり。源光先日のゆめに文殊を拜す。今の消息に符合せり。文殊の像とは此兒の器量をほめたる詞なりと心得て。卽書

を授に。流るゝ水よりも速也。

九　入皇圓阿闍梨室事

この兒の器量等倫にこえ。ほどなく拔羣の名譽ありければ。源光が云。我はこれ魯鈍の淺身也。すべからく碩學に付て。圓宗の奥義をきはむべしとて。同年四月八日。功德院の阿闍梨皇圓に入室せしむ。闍梨手をうちて云。去夜の夢に。滿月室に入と見る。少生又俊利也。たゞ人にあらずといひて。法門をならはしむ。彼闍梨は粟田の關白四代の後。三河の權の守重兼が嫡子。少納言資隆の朝臣の兄。隆寛律師の伯父。皇覺法橋の弟子。時にとりての名匠也。

十　遂出家受戒學六十卷事

同年の仲冬に出家受戒す。或時師に申て云。すでに出家の本意を遂侍ぬる。今におきては。跡を林藪にのがれんと。闍梨の云。たとひ遁世の志ありとも。まづ六十卷をよみわたして後。その本意を遂べしとの給へば。我いま閑居をねがふ事は。ながく名利の望をやめて。心靜に佛法を修學せんが爲也。此仰尤本意也とて。十六歲の春より。十八歲の秋に至るまで。三ヶ年の光陰をふるに。六十卷の淵源をきはむ。五時四教の廢立。惠日をかゞやかす事。ほとゞ師範にこえ。三觀一心の妙理。祖風をつたふる事。深く佛意にかなへり。

十一　入叡空上人室事

此の新發意。日に隨て智辯無窮なる間。闍梨いよ〳〵感歎して云。まげて講說をつとめ。速に大業をとげて。佛家の樞鍵として。圓宗の棟梁にそなはり給へと。度々懇にすゝむれども。更に承諾の詞なくして。なを隱遁の色ふかゝりければ。然ば黑谷に住して。慈眼房を師とせよ。かの慈眼房叡空は。眞言と大乘律にをきては。當時たぐひすくなき英髦なりといひて。久安六年庚午十八歲の九月十二日に。初めて闍梨相具して。黑谷叡空上人の室に至る。上人發心の由來

をとひ給ふに。親父夜討の爲に。世を早せしより。其遺言片時もわすれざる次第。具にかきくどき給ひければ。委きゝて隨喜して云。少年にして早く出離の心を發せり。誠にこれ法然道理のひじりとて。法然をもて房號とす。いみなは源空。これ則初の師の源光の初の字と。後の師の叡空の後の字をとれるなり。

十二　法花修行時白象出現事

黒谷に住してより後は。叡空上人に隨て密と戒とをならひ。其後一切經論。飢をしのびて日々にひらき。自他宗の章疏眠をわすれて。よな〳〵に見る。其外古今の傳記日記。和漢の祕書祕傳。手に取。眼にあてずといふ事なし。諸宗に渡て修行せられけるに。法花三昧修行の時は。白象道場に現ず。上人たゞ獨これを拜す。餘人は見ざる所也。

十三　眞言修行時觀成就事

眞言の敎門に入て。道場觀をこらし給に。忽に五相成身の觀行を成就し給ふ事。言語のおよぶ所にあらず。

十四　暗夜得光明事

暗夜に經論を見給ふに。燈なけれども。光明室の內を照して。ひるのごとし。法弟信空上人。同じくその光を見る。

十五　花嚴經披覽時青龍出現事

花嚴經披覽の時。青龍机のうへにわだかまれり。法弟信空上人。とりて捨べきよし。仰られけるに。信空上人は。もとより蛇におぢける間。師の命にしたがはんとすれば。たへがたくおそろし。もださんとすれば。其命背がたし。進退きはまりけれども。をづ〳〵ちりとりにのせて。あかり障子の外にすてゝ。歸りて見るに。又もとのごとくありければ。いかにとりてはすてぬかと。上人被仰ける。取てすてゝ候へば。又もとの定に候よしをぞ申されける。尙とりてすてよとや。仰られずらんと。肝を消す所に。其後は仰

らるゝ旨なし。信空上人。其夜の夢に大龍のすがたを現じて。我はこれ花嚴經を守護する龍神也。おそるゝ事なかれと。

十六　藏俊僧都寬雅法印等に對面事

久壽三年四月二十七日改元保元元年也生年廿四の春。求法のために修行し給ふとて。先嵯峨の釋迦堂に。七日參籠して後。南都へ下て。藏俊僧都にあひて。法相宗の法門の自解の義を述るに。藏俊是をきゝて手を打て云。我等が師資相承せる。いまだ此義を存せず。上人はたゞ人にあらず。佛陀の境界也とて。かへりて師範と稱して。一期の間供養をのぶ。中川少將の上人にあひて。鑑眞和尙の戒をうく。大納言法印寬雅にあひて。三論を決し給ふに。寬雅涙を流して寶藏をさづけ。あまさへ二字して。かの宗の血脈に我名の上に上人の名をかき給ふ。慶雅法橋に。花嚴を談じ給事。又〳〵如ㇾ此。

十七　紫雲覆日本國事

法相三論の碩德。面々に其義解を感じ。天台花嚴の明匠。一々にかの宏才をほむ。叡空上人をはじめとして。四人の師範歸りて弟子となる。時の人の諺に云。智惠第一法然房と。然ども出離の道にわづらひて。身心やすからず。報恩藏をひらきて。出離生死の爲。衆生濟度の爲に。一切經をひらき見給ふ事五遍なり。披覽する所に。一代聖敎を思惟し給ふに。彼も難く是もかたし。誠にこれ顯密事理の行業は。利智精進の器のみ翫べしといへども。愚鈍下智の機根は。生死解脫の道を失へり。然に惠心の往生要集を開見給ふに。此集には偏に善導和尙の釋義をもて指南とせり。善導の疏には。亂想の凡夫稱名の行によりて。順次に淨土に生べき旨を判じて。凡夫の出離をたやすくすゝめられたり。とりわきひらき見んと思ひて。別して見る事三遍。前後合て八遍。或詞に一心專念彌陀名號。行住坐臥不問時節久近。念念不捨者。是名正定之業。

順彼佛願故の文にいたりて。忽に本願の正意。稱名にあり。是に過たる善惡凡夫の出離の肝心なしと見立給て。我すでに此道理を得たり。自身の出離におきては思定つ。他の爲に此法をひろめんとおもふ所存の義。佛意に叶や不叶やと。思ひわづらひて。まどろみ給へる夢に。紫雲たなびきて日本國に覆。雲の中に無量の光を出す。光の中より百寶色の鳥とびきたりてみちみてり。又高山あり。けん所にして西方にひかへり。長河あり。洪汗として邊畔なし。峯のうへには紫雲そびき。河原には孔雀鸚鵡等の衆鳥あそぶ。雲の中に僧あり。上は墨染。下は金色にて。半金色の衣服なり。上人問ての給はく。これは誰にかあると仰られければ。答ての給はく。我はこれ善導なり。汝專修念佛の法をひろむるが故に。證とならんが爲に來れる也と。又天台の菩薩大乘戒は釋迦如來より十九代。法義相承。上人の一身にあり。此故に王后以下。海内の貴賤。受戒の師範として。尊重他に異也。母の剃刀をのむ夢。すでに符合せり。又紫雲の日本國に覆夢たがふことなし。上人の化導に隨て。稱名念佛を信ずるもの。一州にみちふさがれり。實夢かくのごとし。信じて疑事なかれ。思ふべし上人の勸を信じて背ざらんものは。定めてかの紫雲に乘じて。順次に極樂往土に生せんことを淨往彌陀如來。稱名を本願とたて給へる上には。往生の業におきては。稱名にすぐるゝ行あるべからずと。上人たて給ふ時。師範叡空上人。觀佛はすぐれ稱名はおとれる也との給ふを。上人。なを念佛勝たる義をたて給ふに。叡空上人腹立して。こぶしをにぎりて。上人のせなかをうちて。先師良忍上人も。觀佛はすぐれたりとこそ仰られしがとの給ふを。上人の返事に良忍上人もさきにこそ生れ給ひたれと。上人申されける時。叡空上人彌腹をたてゝ。沓ぬぎにおりて。あしだを取りて。又うち給へば。聖敎よく〳〵御覽候

先師良忍上人の觀ぐすれども上人は叡空上人の返事に三度のうち給ふとも上人は腹立給はずとの給ふ事十二字の無

はてとぞ。申されける。哀なりし事也。

十八　叡空上人臨終之事

叡空上人臨終の時。讓狀をば書て。上人に聖敎往來等を讓りて。をはり給にけるが。良久しくありて。よみがへりて。讓狀をこひかへして。進上の言をくわへて。書なをして。ゆづられけり。定めて冥途に沙汰の侍りけるかとぞ。申あひけり。

法然上人傳記卷第二上

十九　出黑谷住吉水念佛弘通事
廿　高倉天皇御受戒事
廿一　後白河法皇說戒往生要集御聽聞事
廿二　於上西門院說戒時蛇生天事
廿三　皇圓阿闍梨事
廿四　重衡卿事
廿五　俊乘坊大勸進事

十九　住吉水念佛弘通事

高倉院御宇。承安五年の春。上人四十三。黑谷をいでて吉水に住し給ふ。其より以來。淨土の法を談じ。念佛の行をひろめ。普く万人を勸め給ふに。化導に隨て念佛を行ずるもの。たとへば衆星の北辰に歸し。万流の東海に宗するが如し。まれに道を問者には。しめすに西方を敎へ。適々行をたづぬる人には。授るに念佛をもてす。破戒罪根の出離。爰に已に極まり。愚癡淺識の往生いま初てあらはる。宜哉や。我本因地。以念佛心。入無生忍。今於此界。攝念佛人。歸於淨土。上人此化導をたれ給はずば。我等が得度。更に誰の人をかたのまん。是則念佛往生の法をもて。順次の出離をすゝめ給ふ事は。近くは二尊の御本意にかなひ。遠は十方の證誠を期す。專修專念のおしへは。在世の内に五畿七道にみち。一心一向のすゝめは。現世の間に六十餘州にあまねし。上人つねに人々にむかひて唱へ給

へる文云。佛告阿難。汝好持是語。持是語者。卽是持無量壽佛名と。上人和給へる詞には。名號をきくといふとも。信ぜずば聞ざるが如し。たとひ信ずと云とも。唱へずば信ぜざるが如し。但はつねに念佛すべしとぞ仰られける。抑天台山は。桓武天皇の御願。傳敎大師の草創。鎭護國家の道場。顯密薫修の乘跡也。大師權者の相承。化度利生の方便は申に及ばず。千觀。惠心。僧賀。寛印の道心者おの〳〵本宗をなげすてゝ。一向に念佛の一門をひろめ。今法然上人。顯密權實の敎釋を閲て。偏に本願稱名の出要をすゝめたまふにいたるまで。おほくは叡山の月より出て。樂邦の風をのぞみ給へる。此化導を聞及ばん人。誰か稱名の行に倦て。願往生の志をゆるくせんや。

廿　高倉天皇御受戒事

同年の春。高倉天皇。上人を大内に召されて。一心の妙戒を受させたまふ。階下の卿相。簾中の貴女。ともに。戒德を貴び。同く戒香に薫ぜずといふ事なし。

廿一　後白河法皇說戒往生要集御聽聞事

後白河法皇。上人を召請せられ。法住寺殿にて說戒ならびに往生要集を談ぜしめたまふに。往生極樂の敎行は。濁世末代の目足なり。道俗貴賤たれか歸せざらんものと侍るより。御心肝に銘じて。今始てきこしめさるゝ樣に。御感淚甚し。仍左京の權の太夫隆信の朝臣に仰て。眞影を圖して。末代の爲に蓮花王院の寶藏にぞ納られける。仁和寺の法親王より。御師範のよしにてめさるといへども。隱遁の身にをそれて。かたく辭し申されけり。しかれども。八條院。般福門院。宣陽門院。七條の院。准后宮よりはじめ奉て。大臣諸卿。戒文の受者。念佛の歸依。天下にみちみてり。

廿二　於上西門院說戒時蛇生天事

上西門院にして。上人。七日說戒し給ひけるに。

からがきのうへに。一の蛇わだかまれり。更にはたらかずして。聽聞の氣色あり。結願の日にあたりて。此蛇忽に死にけり。其頭二つにわれにけり。中より蝶のごとくなるもの。とびいづと見る人もあり。或は天人の如して。升り上ると見る人も有けり。昔。遠行する聖ありけり。日くれにたれば。野中に塚穴のありけるに。とゞまりて。終夜阿毗曇を論じけるに。樹の上に五百の蝙蝠あり。此聽聞の功德によりて。すみやかに五百の應眞となりき。いま此一すぢの蛇。七日受戒の功力にこたへて。雲を分て上ぬるにやと。人々隨喜す。かれは上代なるうへ。大國也。これは末代にして。小國也。しかれども。佛敎の靈驗は。大國にもよらず。小國にもよらず。聞法の得益は。上代ともいはず。末代ともいはず。若上人の德にあらずば。いかでか下凡の信をすゝめん。希代の美談なりとぞ。時の人申侍ける。

廿三　皇圓阿闍梨事

功德院阿闍梨皇圓。身の分際を計り。たやすく此度生死を出べからず。若度々生をかへば。隔生卽忘のゆへに。定めて佛法をわすれんか。不如。長命の報をうけて。慈尊の出世に逢奉らんと思て。命長きものを勘がふるに。鬼神よりも。蛇道はまされりとて。蛇にならんと誓て。死期の時。水をこひて掌に入て終にけり。其後。皇圓阿闍梨。花山院大政大臣忠雅公の御許へまいりて。敢申入べき事侍りて。參たるよし。申入ける間。彼闍梨は已に逝去の人也。いかでかこゝに來るべきや。人たがへにこそとて。尋させられけるに。功德院の肥後の阿闍梨皇圓と申ものにて侍るよし。重て申ける間。不審のあまりに出向て。對面せられけるに。皇圓阿闍梨の條。無疑あひだ。抑御逝去のよし承り侍は。ひが事にやと仰られければ。闍梨の申さく。逝去は勿論也。それに付て聊所望の事有てまいり侍り。其故は。適々人身を受といへども。二佛の中

間にさへ生て。猶生死に輪廻せん事の悲しく侍ればと。長命の報を感じて。慈尊の出世を待奉らんが爲に。誓て蛇身をうくる所に。大海は中天の恐あり。池にすまんとすれば。主なき所なし。遠江國笠原庄は御領也。彼庄に櫻の池といふ池あり。申あづかりて居所と定て。閑に慈尊の出世を待奉らんが爲に。まいりて侍るよし申ければ。子細に不レ及。それの心に有べしと。御返事を承りて。たつと見るほどに。やがて見えず成ぬ。ふしぎの事也。と口遊する所に。幾程の日數をへずして。笠原の庄よりしるし申ける。櫻の池に雨くだらずして。俄に洪水出で。風ふかずして忽に大浪たちて。池の中の塵悉くはらいあぐ。諸人耳目を驚すよし申入る。其日時を勘がふるに彼閻梨領家へまいりて。此池を申請て。罷出ける時日也。誠にふしぎの事也。委事は彼家の記にあり。智惠あるがゆへに。生死の出がたき事をしり。道心あるがゆへに。佛の出世にあはむ事をねがふ。然といへども。いまだ淨土の法門をしらざるがゆへに。如レ此の意樂に住する也。我其時此法門をたづね得たらましかば。信不信はしらず。申侍なまし。極樂に往生の後は。十方の國土に。心にまかせて經行し。一切の諸佛を。おもひにしたがひて供養す。何ぞかならずしも穢土に久く處する事をねがはんや。彼閻梨遙に慈尊三會の曉を期して。五十六億七千万歳の間。此池に住給はん事を。上人恆に悲み給ひき。當時に至るまでも。靜なる夜は振鈴の音きこゆるとぞ申傳へ侍ける。上人悲みのあまりに。彼所へ下て。池の邊にのぞみて。稱名念誦懇にして回向せられけり。一子平等の慈悲は。薩埵の本誓也といへども。累日斗藪の懇念は。凡夫の所爲にあらざらんをや。

廿四　重衡卿事

治承四年庚子十二月廿八日。平家の本三位の中將重衡卿。父大政入道の命によりて。南都をせ

めし時。東大寺に火をかけしかば。大伽藍忽に灰燼となりにき。其後。元暦元年二月七日。一谷の合戰の時。本三位の中將生とられて。都へのぼりて。大路をわたされて。さんゝの事共のありし時。法然上人を招待して。後生菩提の事を申合られしに。上人。中將のおはする所へ。さし入て見給へば。さしもはなやかにきよけに見へ給ひし人の其ともおぼえず。やせおとろへて。裝束は紺村ごの直垂小袴に。折烏帽子。ひきたてたるをき給へり。目もあてられぬありさまなれば。上人心よはくも。涙のうかびけるを。かくては。あしかりなむと思しづめて。さらぬ樣にもてなして對面あり。三位中將なくゝ申されけるは。今度生ながらとられけるは。今一度上人の見參に入べき故にて侍けり。重衡必しも大佛殿を燒奉らんといふ所存は候はず。故入道の命そむき難によりて。南都へむかひ侍し時。いかなるものかしつらん。近邊の房舍に火をかけ侍しに。時しも風はげしくして。大伽藍を灰燼となし奉し事は。力及ざる次第也。重衡發心せぬ事なればとは存ずれども。時の大將軍にて侍しうへは。責一身に歸する事にて侍るなれば。重衡一人が。罪業につもりて。無間の重苦うたがひあらじと存知せり。一門の人々多く侍しに。重衡一人いけどられて。こゝかしこに耻をさらすも。併其むくひとこそおぼへ侍れ。かくて命終せば火血刀の苦果。敢てうたがひなし。出家こそ心ざす所なれども。ゆるされなければ力及ばず。只もとどりをつけながら。戒をうけ候はん事いかゞ侍べき。かゝる惡人の助かりぬべき方法侍らば。示給へと。うちくどき申されければ。上人涙をながして。且く物もの給はず。良久ありてのたまひけるは。誠に御出家こそ功德廣大なれども。御ゆるされなくば。四部の弟子なれば。御髮をつけながらも。戒を持せ給はん事。子細有べからずとて。戒を授たてまつりて。粗存

知の旨を說たまふ。難ゝ受人身をうけながら。むなしく三途に歸り給はんことは。かなしみてもなを餘あり。歎ても又つくべからず。然に穢土を厭。淨土を欣ひ。惡心をすて。善心を發し給はん事は。三世の諸佛も定めて隨喜し給ふべし。其にとりて出離の道まち〳〵なりといへども。末法濁亂の機には。稱名をもて。勝たりとす。罪業深重の輩も。愚癡闇鈍の族も。唱ればむなしからざるは。彌陀の本願也。罪ふかければとて卑下し給べからず。十惡五逆も回心すれば往生し。一念十念も心をいたせば來迎す。經には四重五逆諸衆生。一聞名號必引接と說き。釋には忽遇往生善知識。急勸專稱彼佛名と判ぜり。たとひ無間の重罪なりといふとも。稱名の功德にはかつべからず。利劒卽是彌陀號。たもてば魔緣ちかづかず。一聲稱念罪皆除。唱へば罪業のこりなし。罪障を消滅して。極樂の往生を遂ん事。他力本願にしくはなし。御榮果むかしも今もためしなき御身也。然ども有爲のさかひのかなしきは。いまだ生をかへざるに。かゝるうき目を御らんずるうへは。穢土はうたてき所ぞとうれへ思召捨て。ふかく彌陀の本願をたのみまましまさば。御往生疑有べからず。これ全く源空が私の詞にあらず。彌陀因位の悲願。或は釋尊成道の時。說をさ給へる經敎也。一念も疑心なく。一心に稱名をたしなみ給ふべきよし。こま〳〵と敎化し給へば。中將掌を合て。なく〳〵聽聞して。冥より冥に入心ちにて侍つるに。此仰を承こそ。さりともとたのもしく侍れと悅て。いかにして都にてむつび給し人の許に。双紙筥をとりわすれ給事の有けるを。入御の御事もやとて。送つかわしけり。折節うれしく覺て。中將自とり出て。御戒の布施とおぼしくて。上人の御まへにさしおきて。申されけるは。御用たるものには侍ねども。人にはかならず形見と申事あり。重衡が餘波とも。御らんじ思召ば。いつも不退

の御念佛なれば。御目にかゝり候はん度には。とり分。重衡が爲と。御回向有べきよしを申されければ。心ざし感じて。上人懷中して出られけり。

廿五　俊乘房大勸進事

東大寺造營の爲に。大勸進の聖の沙汰ありけるに。法然房源空其仁にあたれりと。人々すゝめ申によりて。勸進聖たるべきむね。後白河法皇より。右大辨行隆朝臣を勅使として。仰下されけるに。上人申されけるは。源空山門の交衆をとゞめ。公請を辭し申事は。しづかに修行して。順次に生死を離れんが爲也。もし大勸進の職におらば。忩劇ひまなくして。行業すたれぬべしと。かたく子細を申されければ。行隆朝臣。其堅固の心ざしを見て。卽奏聞する所に。然らば器量の仁を擧申さるべしと。重て仰下されける時。上人。俊乘房重源をよびよせて。院宣の趣をのべ給ふに。重源左右なく領狀す。よて擧し申されければ。大勸進の職に補任せられけり。重源もし此大勸進成就したらば。一定の權者かなとぞ。上人の給ひける。重源は伊勢大神宮にまいりて。この願成就すべくば。其瑞相をしめし給へと祈請しけるに。三七日にあたりける五更の天に。唐裝束したる貴女の。御手より方すの玉をたまわると。示現をかうぶりて。夢さめてのち。これを見るに。夢に見る所の玉。袖の上にあり。重源悅て頭にかけられけり。其後。すゝめけるに。綾羅錦繡。錢貨米穀。心にまかせければ。ほどなく金銅の本尊を。本のごとく鑄たてまつりけるに。御戒の布施に。上人に奉りける本三位中將の双紙筥の鏡を。かの孝養のためとして。上人より俊乘房へ送りつかはしければ。金銅の本尊を鑄奉りける爐の中へ入給ひけるに。おどりかへりて。わきあはざりけるを。三度まで入れけれども。爐の中よりふきいだして。遂にたまらざりければ。且は中將の罪障懺悔の

ため。且は未來の不審をひらかん爲に。件の鏡は。大佛殿の正面。坤の柱にうちつけられき。炎魔大王の淨波梨の鏡は。罪業のかげをうかべ。目連尊者の所持の鏡は。三世の事をてらす。百練の鏡は。ひかりも世にこへ。うつれる影もあざやか也。今此重衡卿の鏡は。たゞ罪業のかげ計や。うつらんと。身のけもたつばかりぞおぼえける。

往生一本後生に作る

法然上人傳記卷第二下

廿六　於清水寺說戒念佛勸進事
廿七　古年童出家往生事
廿八　顯眞座主上人論談事
廿九　六時禮讚事
三十　善導御影事
卅一　東大寺棟木事
卅二　淨土曼陀羅事
卅三　聖護院宮事

廿六　於清水寺說戒念佛勸進事

後鳥羽院御宇。建久元年庚戌秋。清水寺にて上人說戒の時。念佛をすゝめ給ひければ。寺家の大進質。沙彌印藏。瀧山寺を道場として。不斷常行念佛三昧を初ける。能信といへる僧。香爐をとりて。開白發願して。行道をはじむ。願主印藏。寺僧等。ならびに比丘比丘尼其數をしらず。抑清水寺の靈像は。極樂淨土には一生補處の薩埵。娑婆國には施無畏者の大士なり。仁和寺の入道親王の御夢想に。清水寺の瀧は。過去にもこれ有き。現世にもこれあり。未來にも又これあるべし。是則。大日如來の鑁字の智水なりとて。一首を詠じ給ふ。

清水の瀧へまいれはおのつから
　現世あんをん往生こくらく

と示し給ひければ。大威儀師俊緣を御使として。寺家へおほせ送られけるとかや。まことにその

凋み深かるべきもの也。

廿七　古年童出家往生事

清水寺にて上人說戒の時。念佛すゝめたまひけるに。南都興福寺の古年童。發心出家して。則瀧山寺の念佛衆にまじはりけるが。松苑寺の邊に。庵室を結びて。高聲念佛して往生をとゞ。能信。如法經のかうぞをうへながら。往生人の緣をむすぶ。棺の前の火の役をつとめてかへるに。異香衣のうへに薰ず。人々奇特のおもひをなせり。

廿八　顯眞座主上人論談事

天台座主權僧正顯眞。いまだ大僧都なりし時。承安三年癸巳生年四十三にして。官職を辭して。大原に籠居。十箇年の春秋を送て後。壽永二年九月に。日吉の御幸の時。座主明雲賞をゆづりて法印に叙せらるといへども。かたく松門を閉て敢てことにしたがはず。只生死の出難き事をのみなげく。其後。衆徒。推て擧申によりて。文治六年庚戌三月七日。天台座主に補せらるといへども。承諾せざる間。勅使大原へむかひて。宣命を下て。座主職を授くる。遂に召出されて。同五月廿四日。最勝講の證義をつとめ。同廿八日。權僧正に任ず。然て。やゝもすれば。なを隱遁の思ひふかくして。常には永辨法印と出離解脫の法門をのみ談ぜられけるに。或時。永辨法印。かくのごときの事は。法然上人にくわしく御尋あるべきよしを申ければ。座主。上人に對面ありて。今度いかでか生死を解脫し侍るべきとの給ふに。上人。いかやうにも御計には過べからずと。座主又申されけるは。誠に然也。但し先達にましませば。思定給へる旨あらば。しめし給へと也との給へば。其時。自身の爲には。聊思定たる旨侍り。たゞはやく極樂の往生をとげんと也。座主又申さるゝ樣。順次の往生遂がたきによりて。しゐてたづね侍り。いかゞたやすく往生をとげんやと。上人こたへ給はく。成佛は難しといへども。往生は得やすし。道綽。

善導の心によらば。佛の願力を仰で。強緣とするゆへに。罪惡の凡夫。淨土に生ずと云云。其後。更に言說なくして。上人歸りたまひて後に。法然房は智惠深遠也といへども。聊偏執の咎ありと。座主の仰られけるを。上人歸りきゝ給ひて。我しらざる事を云には。必疑心をおこす也との給ひければ。座主又此事を聞て。誠に然也。我顯密の業に稽古を積といへども。併これ名利のためにして。淨土を心に欣ぬ故に。道綽。善導の釋義をうかゞはず。法然房にあらずば。誰の人か如此いはんや。耻べし〳〵とて。百日の間大原に籠居して。淨土の章疏を見立給ひてのち。儀を立てて。上人に示て云。我粗淨土の法門を見立たり。來臨せしめ給へ。靜に談じ申さんと。爰に上人。東大寺の大勸進俊乘房重源は。いまだ出離の道を思定ざるがゆへに。此よしを示に。則弟子三十餘人を相具して。大原にむかう。勝林院の丈六堂に集會す。上人方には。重源

已下。次第に坐す。座主の方には山門の碩德。幷大原の上人達坐す。山門久住の碩學には。永辨法印。智海法印。靜嚴法印。淨然法印。證眞僧都。覺什僧都。仙基律師等也。大原の上人には本性房湛斆。來迎院の明定房蓮慶。勝林院の淸淨房等也。此外山門の衆徒。雲霞のごとく集て見聞す。各蓍杖を支度して。上人の所立若邪義ならば。卽降伏すべきよし也。面々に諸宗に立入て深義を論談し侍けるに。上人。天台眞言華嚴法相三論等の顯密に付て。凡天の初心より佛果の極位に至るまで。修行の方軌。機法の相貌。具に述說之後。是等の深法。みな義理巧妙にして利益最勝也。機法相應せば。得益踵をめぐらすべからず。取證如反掌の金言まこと也。全く疑所なし。但源空がごときの頑魯の類ひは。更に其器にあらず。然問源空發心の後。聖道門の諸宗に付て。ひろく出離の道をとぶらふに。彼も難く是も難し。是則代くだり人おろかにして。機敎相背けるゆへ也。此外有智無智を論ぜず。持戒破戒を選ばず。時機相應して。順次に生死を離べき要法は。たゞこれ淨土の一門。念佛の一行也とて。一日一夜の間。法藏比丘の昔より彌陀如來の今に至るまで。本願の趣。往生の道を。くらからず理を極め詞をつくして。但これ淫分の自證をのぶる也。全く其法器の受用をさまたげんとにはあらずとの給ひければ。座主より初て。滿座の衆みな信伏して。一人として疑なし。碩德達褒美して云。形を見れば源空上人。まことには彌陀如來の應垂歟と。隨喜のあまりに。座主みづから香爐を取て行道し。高聲念佛を唱へ給に。顯密の明匠まことをこらして。異口同音に。三日三夜ひまもなし。信男信女三百餘人。參禮の聽衆。數を知らず。座主。則一の願を發して云。此砌に五の坊を立て。一向專修の行を修して。稱名の外。餘行をまじへじと。其行は今に退轉なし。重源上人。同く淨土

イ 妹一本姨に作る

の法を信じ。念佛の行を立て。又一の願を發して云。我國の道俗。閻魔の廳に跪かん時。其名を問れば。佛號を我唱へんが爲に。阿彌陀佛名をつけんとて。まづ我名をば南無阿彌陀佛といはんといへり。我朝の阿彌陀佛名。これより初まれり。其より此かた。洛中の貴賤。邊土の道俗。處々の道場に。念佛を勸ざる所なし。座主は上人勸化の後は稱名の行をこたらずして。治山三箇年を經て。建久三年十一月十四日寅刻。東塔南谷圓融房にして。稱名の聲たえず。禪定に入が如して往生を遂らる。これ併上人の化導によるもの也。末代の高僧。本山の賢哲也。諸宗の碩德こぞりて上人に歸して順禮し。諸の道俗いよ〳〵念佛をもて口遊とす。座主此門に尋入て後。妹の禪尼をすゝめられんが爲に。念佛勸進の消息をかゝる。世間に流布する顯眞の消息といへる是なり。

廿九　六時禮讚事

建久三年の秋のころ。後白河の法皇の御菩提の御爲に。大和の守親盛入道見佛。八坂の引導寺にして。禮讃の先達に。心阿彌陀佛。調聲して。安樂。住蓮。見佛等。助音して。七日念佛す。其結願に種々の捧物を取出し侍りければ。上人存の外なる氣色にて。の給ひけるは。念佛は自行の勤也。法皇の御菩提に回向し奉る所に布施みぐるしき次第也と。いましめ給けり。これ六時禮讃のはじめ也。

三十　善導御影事

上人。五祖類聚傳といふ書を造て。震旦國の念佛の祖師。曇鸞。道綽。善導。懷感。少康等の五祖の德をあらはし給へり。しかるを其後俊乘房重源。初めて大唐より渡す所の五祖の眞影。一鋪に類聚せり。上人所造の類聚傳に符合せる事。先に織顯給へる當麻寺の曼陀羅の緣の文。のちにわたれる觀經の疏の文に違ざるに同じ。不思議の奇特なりければ。道俗男女貴賤上下。彼眞影を拜たてまつりて。念佛の歸依彌ふかし。

二度その一本一度その作るに

卅一　東大寺棟木事

或時。上人談てのたまはく。中比一人の住山有。內々淨土の法門を學するありき。源空がもとへ來て。我すでに此敎の大旨を得たり。然而信心いまだ開發せず。いかなる方軌を修してか。信心を發し侍るべきと。歎きあわせし間。三寶に祈請すべきよしを敎訓し侍りしかば。其後他事をわすれて祈請をいたす。或時東大寺へ參て念誦する折しも。棟をあぐる日なりければ。倩これを見て信心開發しぬ。匠の計略にあらずよりは。彼大物いかでか棟の上に居すべき。凡夫のはかりごとなをかくのごとし。何況。彌陀如來の善巧不思議の力にて。極惡深重の衆生を報土にむかへとり給ふこと。ゆめ〳〵疑べからず。佛に引接の願あり。我に往生の志あり。なんぞ往生を遂ざらんや。一度この道理を得て後。二度その疑殆をおこす事なし。則祈願の感得するゆへ也

と語侍き。其後三ヶ年を經て。種々の靈瑞を現じて往生を遂き。受敎と發心とは各別なるがゆへに。習學するには發心せざれども。境界の緣を見て心をおこせり。人なみ〳〵に淨土の法をきゝ。念佛の行をたつとも。信心いまだ發らざらん人は。たゞ懇に心がけて。つねより思惟し。又三寶に祈申べきなりと。

卅二　淨土曼陀羅事

俊乘房。觀經の曼陀羅。並に淨土の五祖の影を大唐よりわたし奉りて。建久二年の比。大佛殿にして。上人を唱導にて讃談の時。南都の三論。法相の碩學等。數を盡して集けるに。二百餘人の大衆。各したに腹卷を著して。高座のきはになみ居て。自宗等をとひかけて。こたえんに紕繆あらば。恥辱あたふべきよしを僉議して。用意をなす所に。上人。三論法相の深義をとゞこほりなくのべ給ひてのち。末代の凡夫出離の要法。口稱念佛にしくはなし。念佛をそしらん輩は。地獄に墮在すべきよしを解說し給ひければ。二百餘人の大衆より初めて。隨喜渴仰きはまりなし。さて其次に天台の十戒を解說し給ふに。我山は大乘戒。此寺は小乘戒との給ひければ。大衆存の外の氣色どもなりけれども。當寺の古老の中に。兼日に靈夢をしめす事ありけり。件の次第。さき立て披露しければ。衆徒各口を閉て。別の事なかりけり。說法はて〻油藏へ入給ひけるに。惡僧一人。上人に立むかひて。抑念佛誹謗の者。地獄に落べしとは。いづれの經にとかれ侍るやらむと申ける間。上人。大佛頂經これなりと分明に答給ければ。彼僧手を合て。後生助けさせ給へとて。則御ともして油藏へ入奉る。

卅三　聖護院宮事

聖護院の無品親王靜慧御惱の時。門徒の高僧等。大般若經を轉讀し奉りて。各祈請申せども。御平愈ましまさゞりければ。上人を招請せられ。

御臨終の次第ども。たづね仰られて。いかゞして此たび生死を離べき。後生助たまへと仰られければ。上人御返事に。往生極樂の御願。御念佛にしかず。佛說ての給はく。光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と。其後御念佛おこたらずして。御臨終正念にて。をわらせ給ひけり。

大般若經轉讀人々

僧正行舜宰相。僧正公胤大貳。僧正覺實左大臣。法印顯惠中納言。法眼圓豪大納言。法印公雅宰相。法印道嚴。法印信觀。この三人の法印は障子の中にて。其形貌をみず。後に交名を見て。これをしるしなす所也。

（實一本眞に作る　ア橋の下一本山の字あり）

法然上人傳記卷第三上

卅四　津戸消息事
卅五　選擇集事
卅六　善惠上人事
卅七　月輪殿不審條々立之　附善惠上人消息事

卅四　津戸消息事

天神五代の後胤。文章博士菅原孝標。常陸守に任じて下國の時。武藏國の惣追捕使。秩父權守平重綱が娘に嫁して。一子を生ず。其名を津戸二郎爲廣といふ。外祖父重綱が撫育をかふりて。譜代の跡をつぎ。武勇の道を傳へき。其三男津戸三郎菅原爲守生年十八歲にして。治承四年八月に。右大將家（于時兵衛佐）石橋（ア）の時。武州より馳まいる。房州へ趣給し時も。同じく參向せしかば。處々の合戰に忠をいたし。重々の御感に預しより以來。關東家人の名を得て。武藏國御家人と號す。東大寺供養の爲に建久六年二月に。幕下御上洛の時は生年三十三歲。供奉したりけるが。三月四日入洛。同廿一日に法然上人へ參て。合戰度々の罪障を懺悔し。念佛往生の道をうけ給て後は。在京の間も常にまいりて。下向の後も更に他の門を望まず。但信稱名の行者と成て。念佛の行おこたらざりけるを。人ありて熊谷入

道。師戸三郎は無智の者なればこそ。餘行叶難によりて。念佛ばかりをばすゝめられたれ。有智の人には。必しも念佛には限べからずと申ければ。津戸三郎。其子細を上人にたづね申ける時。此一事にも限らず。條々の不審を尋申けるに付て。同年九月十八日。上人の御返事。詮をとりてこれをのせば。

一。熊谷入道。津戸三郎は。無智の者なればこそ。但念佛をばすゝめたれ。有智の人には必しも念佛にはかぎるべからずと申よし。聞え候らん。極めたるひが事に候。其故は。念佛の行は。本より有智無智にかぎらず。彌陀の昔誓ひ給ひし本願も。あまねく一切衆生の爲也。無智の爲には念佛を願とし。有智の爲には餘のふかき行を願とし給ふ事なし。十方衆生の爲に。廣く有智無智。有罪無罪。善人惡人。持戒破戒。貴も賤も。男子をも女人をも。もしは佛の代の衆生をも。若は佛の滅し給ひて後のこの比の衆生。若は釋迦の末法万年の後。三寶うせての折の衆生までも。みなこもれる也。又善導和尙の。彌陀の化身として專修念佛をすゝめ給へるも。ひろく一切衆生の爲に。すゝめて無智の人にのみ限る事は候はず。廣き彌陀の願を憑み。あまねき善導のすゝめをひろめんもの。いかでか無智の人に限て。有智の人をへだてんや。若然ば彌陀の本願にもそむき。善導の御心にも不可叶。されば此邊にまうできて。往生の道をとひたづねん人には。有智無智を論ぜず。皆念佛の行ばかりを申候也。然にそゞろ事をかまへて。さやうに念佛を申とめんとするものは。先の世に念佛三昧淨土の法門をきかず。後世に又三惡道へ歸るべきものゝ。しかるべくして。さやうの事をば巧申事にて候也。そのよし聖敎にみな見えて候也。

見有修行起瞋毒。方便破壞競生怨。
如此生盲闡提輩。毀滅頓敎永沈淪。
超過大地微塵劫。未可得離三途身。

イ善願ウる善根に一本作

和語燈錄に對照し結成助緣に事一の字脫下に有り

此文の心は淨土をねがひ念佛を行ずるものを見て。瞋りをおこし。毒心を含て。はかり事をめぐらし。樣々の方便をなして。念佛の行をやぶりて。あらそひてあだをなし。これをとゞめんとする也。如此人は。生てよりこのかた。佛法の眼しゐて。佛のたねをうしなへる闡提のともがらなり。彌陀の名號を唱て永き生死を忽にきりて。常住の極樂に往生すといふ。頓教の御法を。そしりほろぼして。此罪によりて惡道に沈みて。大地微塵劫を過とも。永く三惡道の身を離るゝことを得べからずといへるなり。さればさやうにそらごとをたくみて申候はん人をば。歸りてあはれむべきなり。さほどのものゝ申さんによりて。念佛に疑をなし。不信をおこさんものは。いふにたらぬほどの事にてこそは候はめ。大かた彌陀に緣淺く。往生に時いたらぬものは。きけども信ぜず。おこなふを見ては腹をたて。いかりをふくみて。さまたげんとする事にて候也。其心を得て。いかに人申とも。御心計はゆるがせ給べからず。強に信ぜざらんは。佛なを力および給はず。何況や。凡夫の力及候まじき事也。かゝる不信の衆生の爲に。慈悲をおこし。利益せんと思はんに付ても。とく極樂にまいりて。悟をひらきて。生死にかへりて。誹謗不信のものをもわたして。一切衆生あまねく利益せんと思ふべき事にて候。

一。一家の人々の善願に結緣助成せん事。念佛の行を妨る事をこそ。專修の行には制したる事にて候へ。人々の或は堂をも造り。佛をも造り。經をもかき。僧をも供養せむには。力をくわへ。緣をもむすばんが。念佛を妨げ。專修をさふるほどの事にては候まじ。

一。此世の祈に佛にも神にも申さん事は。其もくるしく候まじ。後世の往生の爲には。念佛の外に。あらぬ行をするこそ。念佛を妨ればあしき事にては候へ。此世の爲にする事は。往生の

エ一本何樣に此人の外の上の心事を隨てはかにらぬべくあり候也十九字

爲には候はねば。神佛の祈更に苦かるまじく候。

一。念佛を申させ給はんには。こゝろを常にかけて。口にわすれず唱が目出度事にて候也。念佛の行は。尤行住坐臥。時處諸緣を嫌はぬ行にて候へば。心を淸くして。申させ給はん事。返々神妙にて候。ひまなくさやうに申させ給はんこそ。返々目出度候へば。いかならん所。いかなる時なりとも。忘れずして申させ給ひて。往生の業には必なり候はんずる也。其のよしを御心得有て。同じ心ならん人には。敎させ給べし。いかなる時にも。申されざらんをこそ。ねうじて申ばやと思候べきに。申されんをねうじて申させ給はぬ事は。いかでか候べき。但いかなる折にも。きらはず申させ給ふべし。

一。御佛。仰にしたがひ。具に開眼して。下しまいらせ候。阿彌陀の三尊造りてまいらせて候ける。返々神妙に候。佛像造りまいらせたるは。目出度功德にて候也。

一。念佛の行。强に信ぜざらん人に論じあひ。又あらぬ行。こと悟の人に向て。いたくしゐて仰らるゝ事候まじ。恭敬して。かるしめあなづる事なかれと申たる事にて候也。同心に極樂をねがひ。念佛を申さん人には。たとひ塵刹の外の人なりとも。同行の思をなして。一佛淨土に生れんとおもふべきにて候也。阿彌陀佛に緣なく。極樂淨土に契りすくなく候はん人の。信もおこらず願しくもなく候はんには。力不及。只心に任せて。いかなるおこなひをもして。後生助りて。三惡道を離る事を。人〻心にしたがひて。すゝめ候べき也。又さは候へどもちりばかりも。かなひぬべからん人には。阿彌陀佛を勸め極樂をねがはすべきにて候。いかに申とも。此世の人の。念佛にあらで。極樂に生て生死を離る事候まじき也。何樣エにも物をあらそふ事は。ゆめ〳〵候まじ。若はそしり。もしは信ぜざらんものをば。久しく地獄にありて。又地獄

へ歸るべきものと。能〳〵心得て。こはがらずして。こしらふべきにて候。又よもとは思まいらせ候へども。いかなる人申とも。念佛の御心なんど。たぢろぎ思召事あるまじ。たとひ千佛世に出て。親くおしへさせ給ふとも。これは釋迦。彌陀より初て。恆河沙の佛の證誠せさせ給ふことなればと思召て。志を金剛よりも固くして。此たび必ず阿彌陀佛の御前へまいりなんと思召べく候也。如レ此の事かたはしを申さんに。御心得ありて。我爲人のために可二行給一。あなかしこ。津戸三郎殿御返事云々。

鎌倉の二位家より。條々尋申されけるにつきて。上人御返事の趣。此狀に違せざる間。しげきによりてこれをのせず。但彼狀の中云。念佛を申事。樣々の儀候へども。只六字を唱る計に。一切はおさまり候也。心には本願を憑み。口には名號を唱へ。手には數*をとりて。常には心にかくるが。極たる決定往生の業にて候也。

*數の上一本珠の字あり

念佛は。もとより行住坐臥。時所諸緣をゑらばず。身口の不淨をきらはぬ行にて候へば。易行往生と申傳へて候也。只淨土を心にかくれば。心淨の行にて候也。但其中にも。身心を淸くして申を。第一の行と申候也。又娑婆世界の人の。餘の淨土を欣候はん事は。弓なくして矢の鳥をとり。足なくして木ずへの花をおらんとせんが如し。必ず專修念佛は。現當の祈となり候也。これも經の說にて候也云々。

又後年に。津戸三郎がもとへつかはされたる上人の御返事に。專修念佛の人は。世にあり難き事にて候に。其一國に三十餘人まて候はんこそ。まめやかにあはれに候へ。京邊なんどの常にきゝならひかたらうをも見ならひ候ぬべき所にて候だにも。思ひきりて。專修念佛する人は。難レ有事にてこそ候に。道綽禪師の並州と申所こそ一向念佛の地にて候に。專修念佛三十餘人は世に難レ有覺候。偏に御力。又熊谷入道などの計に

こそ候なれ。それも時の至りて往生すべき人の多く候べきゆへにこそ候なれ。緣なき事はわざと人のすゝめ候にだにも。かなはぬ事にて候へば。まして子細もしらせ給はぬ人などの。仰られんによるべき事にても候はぬに。本より機緣純熟して。時いたりたる事にて候へばこそ。さほど專修の人などは候らめと。おしはかり哀に覺候。但無智の人にこそ機緣にしたがひて。念佛をばすゝむる事にてあれども。申候なる事はもろ〳〵のひが事にて候。阿彌陀佛のむかしの御誓ひに。有智無智をもゑらばず。持戒破戒をも嫌はず。佛前佛後の衆生をもえらばず。在家出家の人をも嫌はず。念佛往生の誓願は。平等の慈悲に住して。發給たる事にて候へば。人を嫌ふ事は全く候はぬ也。佛の御心は慈悲をもて。體とする事にて候也。されば觀無量壽經には。佛心といふは。大慈悲是也。と說て候也。善導和尙。此文をうけては。此平等の慈悲をもて。あまねく一切を攝すと釋給へる也。一切のあわれみ廣くして。もるゝ人候べからず。釋迦のすゝめ給も。惡人善人智人愚人も。ひとしく念佛すれば往生すとすゝめ給へる也。念佛往生の願は。これ彌陀如來の本地の誓願也。餘の種々の行は。本地のちかひにあらず。これ釋迦如來の種々の機緣にしたがひて。樣々の行を說せ給ひたる事にて候へば。釋迦も世に出給ふ心は。彌陀の本願を說むと思召佛心にて候へども。衆生の機緣に隨給ふ日は。餘の種々の行をも說給は。これ隨機の法也。佛の自御心の底には候はず。されば念佛は彌陀にも利益の本願。釋迦にも出世の本懷也。餘の種々の行には似ず候也。されば無智の者なればといふべからずと也云々。念佛は彌陀利生本願。釋迦出世本懷也と云事明也。末世愚鈍の衆生はふかく上人敎誡の旨を信じて。敢て別解別行の人を輕しむる事なかれ。只專修專念の行をはげむべき者也。

親の上一本通の字あり

卅五　選擇集事

建久八年丁巳上人六十五。不例の事御坐ありけるを。月輪禪定殿下。以外に驚思食されけるを。聊平愈し給ひければ。清兵衞尉重經を御使として。御形見に。淨土の要文をあつめて給べきよし被レ仰送けるに付て。選擇集をかゝれける時。安樂を執筆として。要文をあつめられしに。我若翰墨にたえたる身になからましかば。豈此佛法棟梁の役を勤哉と申ける間。此僧憍慢の心ふかくして。惡道に墮べしとて。これを退て。進士入道眞觀をもて。執筆とせられけり。建久九年に功を終て。上人存日の間は祕藏せらるべし。更に披露に不レ可レ及と。禪定殿下仰られけるによりて。門弟に件集を授られし時は。或は此書をうつして末代に廣むべしといひ。或は源空存生の間は。披露に及べからずとて。只滅後の流行を心ざして。ふかく存日の披露を痛申されけるは。偏に月輪殿の仰を憚申されけるゆへ也。

卅六　善惠上人事

西山善惠上人は。天曆聖主の御後。入道加賀の權守親季（法名證玄）の息也。一門のよしみ深くして。幼稚の昔より。久我內府親公の猶子たりき。漸く元服の沙汰の侍りしに。童子ふかく菩提心に住して。偏に出家をのぞむ。父母更に是をゆるされず。于レ時生母忍て。一條のもどり橋にて。橋占をとわれしに。一人の僧ありて。眞觀淸淨觀。廣大智惠觀。悲觀及慈觀。常願常瞻仰と誦し。東より西へ行。生母これをきくに。落涙甚し。內府此由をきゝ給ひて。宿善の內に催す事を感じて。出家をゆるされし時。師範の沙汰侍りしに。童子申さく。願は。法然上人の弟子たらん。不レ然は出家更に其詮なしと。仍建久元年。十四歳にして。遂に上人の室に入。常隨給仕の弟子として。淨土の法門殘所なし。人の心得やすからん爲に。白木の念佛と云事を常に仰られき。自力の

所習一本習所に作る

人は。念佛をいろどる也。或は大乘の悟をもていろどり。或はふかき領解をもていろどり。或は戒をもていろどり。或は身心を調るをもていろどらんとおもふ也。定散の色どりある念佛をば。しをほせざる。往生疑なしとよろこび。色どりなき念佛をば。往生はゑせぬと歎也。なげくも。よろこぶもともに自力の迷也。大經の法滅百歳の念佛。觀經の下三品の念佛は。何の色どりもなき白木の念佛也。本願の文の中の至心信樂を稱我名號と釋し給へるも。白木になりかへる心也。所レ習觀經の下品下生の機は。佛法世俗の二種の善根なき無善の凡夫なるゆへに。何のいろどりもなし。況。死苦に責られて。忙然と成上は。三業ともに正體なき機也。一期は惡人なるゆへに。平生の行のさりともと憑むべきにもなし。臨終には死苦にせめられるゆへに。止惡修善の心も。大小權實の悟も。かつて心にをかず。起立塔像の善も。此儀には叶べからず。捨家棄欲の心も。此時はおこり難し。誠に極重の惡人也。更に他の方便ある事なしゃ若他力の領解もやある。名號の不思議をもや念じつべきと敎れども。苦に責られて。次第に失念する間。轉敎口稱して。汝若不能念者。應稱無量壽佛と云時。意業忙然と成ながら。十聲。佛を稱すれば。聲々に八十億劫の罪を滅して。見金蓮花猶如日輪の益にあづかる也。此義には機の道心一もなく。定散のいろどり一もなし。只知識の敎に隨ふ計にて。別のさかしき心もなくて。白木に唱て。往生する也。たとへば。おさなきものゝ手をとりて。物をかゝせんがごとし。豈小兒の高名ならんや。下々品の念佛も。又かくのごとし。只知識と彌陀との御心にて。纔に口に唱て往生を遂也。彌陀の本願はわきて五逆深重の人の爲に難行苦行せし願行なるゆへに。失念の位の白木の念佛に佛の五劫兆載の願行つゞまりて。無窮の生死を一念につゞめて。僧祇の苦行を一聲

實ノ一本萬德に作る

に成ずる也。又大經の三寶滅盡の時の念佛も。白木の念佛也。其故に大小乘の經律論。みな龍宮におさまる。三寶悉く滅しなん。閻浮提にはたゞ冥々たる衆生の。惡の外には善と云名だにも。更にあるべからず。戒行を敎たる律も滅しなば。何のゆへによりて止惡修善の心もあるべき。菩提心を說ける經卷。先立て滅せば。いづれの經によりてか菩提心をも發べき。此理を知れる人も世になければ。習て知べき道もなし。故に定散の色どりは。皆失はてたる白木の念佛。六字の名號ばかり。世には住すべき也。其時。きゝて一念せんもの。皆當に往生すべしと說けり。此機の一念十念して往生は。佛法の外なる人の。只白木の名號の力にて往生すべき也。然に當時は大小の經論も盛なれば。彼時の衆生には事の外にまれなる機也と。いゝ人もあれども。下根の我等は。三寶滅盡の時の人にかはる事なし。世はなを佛法流布の世なれども。身はひとり三學無分の機也。大小の經論あれども。或は學せんとおもふものもなし。かゝる無道心の機は。佛法にあえるかひもなき身也。三寶滅盡の世ならば。力及ばぬ方もあるべし。佛法流布の世に生れながら。戒をも持たず。定惠をも修行せざるにこそ。機の拙く。道心なきほどもあらはれぬれ。かゝる愚なる身ながら。南無阿彌陀佛と唱る所に。佛の願行悉く圓滿するゆへに。こゝが白木の念佛の忝にてはある也。機におひては安心も起行も。眞すぐなく。前念も後念も皆おろか也。忘想顚倒の惑は。日を逐てふかく。寐も寤も。惡業煩惱にのみ。ほだされて居たる身のうちより出る念佛は。いと煩惱にかわるべしとも覺ぬうへ。定散の色どり一もなき稱名なれども。前念の名號に。諸佛の實を接するゆへに。心水泥濁にそまず。無上功德を生給也。中々に心をそへず申せば。生ると信じてほれ〳〵と南無阿彌陀佛と唱が。本願の念佛にてはある也。

これを白木の念佛とは云なりとゞ仰られける。當世も自力根性の人は。念佛に付て。いろ〳〵の彩色を加へ餘行を指南とする人またこれあるが。是併上人弘通の正義をしらざるゆへ也。善惠上人は本師上人の勸化をつぎ。化導年ふりて。行年七十にして。寶治元年十一月廿六日午剋。種々の奇瑞をあらはして。端坐合掌念佛二百餘遍を唱て。往生をせられき。當世西山義と號し。小坂義と稱するは。彼善惠上人の流也。

卅七　月輪殿御不審事

或時月輪殿より。條々の御不審を御書にのせて。上人にたづね仰られければ。委請文にのせて申されけり。所謂一の御疑云。一度信心を起て。更に疑心なくば。一念十念をもて。決定往生の業として。其後稱念せずといふとも。順次の往生更に不審あるべからざるか。又信心決定の後は。四重五逆等の罪を犯といふとも。往生の障と成べからざるかと。上人の請文に云。たとひ決定往生の信心を起候とも。其後。又稱念する事なく。ならびに小罪なりとも。是を犯して後懺悔せずば。敢て往生を遂がたく候歟。何況。四重五逆等の重罪を犯候はんにおゐては。往生するに及ばず。還て惡趣をのがれがたく候。近來諸宗の衆徒。都鄙の道俗喧嘩たえず候旨。この儀より起候歟。又一の御疑云。縱ひ深信をおこし。專稱を致すとも。重罪を犯して後。更に懺悔念佛せずば。順次の往生遂がたく候歟。上人請文に云。此義神妙に候。乃至一念無有疑心の釋は。上盡一形下至十聲等にても。決定往生すべしと信ずべき文也。雖然一念の後。又稱念せず。ならびに犯罪せば。なを決定往生と信ずべきにあらず。如此信候は。一重深心に似たりといへども。還て邪見と成候歟。近來此邪見に住する輩多候也と。又一の御疑云。一生不退の念佛は不慮に重罪を犯じて後。いまだ懺

決定往生
一本往生
決定に作る

悔念佛せずして念終せんものは。前の念佛の功によりて往生すべき歟。將又後の犯罪の咎によりて往生すべからざる歟と。上人の請文云。不慮の犯罪。その過頗輕と云とも。往生においては尙不定に候。其ゆへは已作の罪。懺悔を不レ用して。善業を障すといふ事なく候故也と。右の御書に。善惠上人をめさるゝよしをのせられける間。條々不審を答申されて後。請文の奥に。被レ召弟子の僧。善惠房は今明日の間に進べく候。愚意の所存に。聊も違せざる者に候とのせられける上は。善惠上人の義更に本師上人の義に違すべからず。されば津戸入道は。上人御往生の後は。不審の事をば。善惠上人にたづね申けるに。彼返狀。全く上人勸化の詞に違せず。所謂文暦元年の比。關東の念佛者の中に。善惠上人の義とて。無智の者は念佛申とも不レ可二往生一。正念に住して臨終みだれずとも。往生とは云べからず。又學生は臨終の時。狂亂顚倒して終とも。決定往生といふべしと申ける間。善惠上人にたづね申ける津戸入道の狀云。念佛往生の際の事。彌陀の本願に任せ。善導和尙の御釋。故上人の御房の御勸によりて。上百年にいたり。下一日七日十聲一聲に至まで。念佛往生は決定のよしを承て。往生をねがひ候處に。當時の關東の學生のおほせ候とて。無智にては勤めたりとも。臨終閑にておはりたりとも。往生したりとは不レ可レ思。又學文したらんものは。たとひ臨終の時。いかなる狂亂をし。くるひ顚倒したりとも。決定往生也と候なる此事。御房中に。いか樣に思召たると云事。愚の便宜の時可レ被レ仰候。かやうに申せば。尊願が合點なき事を申とゞ。思召ぬ事にて候へども。學問せぬ人の內々歎申候間申候也云々。同年九月三日。善惠上人返狀云。阿性房のもとへの便につけて。御不審候ける樣承候こそ。存の外に候へ。其後。申披べきよし存候へども。愚の便を不レ得候間。思ながら過候

程に。御所勞とて阿性房下向せられ候便を悅て申候。學問せざるひら信じの念佛は。往生すべからざるよし。此邊に申と聞え候らん。極めたるひが事にて候也。本願の理をよく思入て。平に信じて學問せざるも。又文に付て學するも。落つく所は。只同く南無阿彌陀佛にて往生すべきにてこそ候へ。たゞし平信じとて。本願のありさまをもしらず。善惡の因果をも不レ辨。たゞ南無阿彌陀佛と申ばかりにて。往生すと心えたる輩。當世にたゞこれは一往は信ずるに似たるといへども。悉く尋ねばさして思入たる所なし。ふかく信ずる義候はざる也。是をばひら信じと申にも不レ及候也。かやうの輩に向ては。本願のむなしからず。凡夫を攝するいはれ。一分にてもかまへて心えよと申さ〻かせ候也。是が聞へ候やらん。正しく本願のむなしからざる事を信たる上に。機に隨て。或は平に願力を信じて。我心に立ぬと思ひて。念佛する人も候。或本願を信ずる上は。いよ〳〵理をあきらめん爲に。學問して思入るゝ人も候。意樂おなじからずといへども。往生は全く異ならず候を。學問する人は學せざる人をそしり。學せざる人は學問する人をそしる事。相互に極たるひが事也。たゞ所詮は法藏ぼさつ。乃至十念のちかひにこたえて。衆生稱念せばかならず生るべき理の極りて。已に阿彌陀佛に成て。善惡の凡夫をもらさず。攝し給へるゆへに。釋迦も是をとき。諸佛の證誠もむなしからざる事を濡て。御念佛候はゞ。更に御往生疑なく候。此旨こそ。深く存ずる事にて候へば。人にも申聞かせ。身にも存候へ。見參にて申さまほしく候へども。今は五にかなはぬ事にて候へば。あら〳〵申候也。阿性房はかやうの事も是にて聞なれ。思入られたる事にて候へば。たづねきかせ給べく候云々。又同年十月十二日に重て津戸入道に。遣されける善惠上人の狀云。當時關東の學者の中に。或

善惠上人一本上人ニ作る

は無智の人は往生せず。臨終正念にして命終すとも。往生とは不レ可レ定と云。或は學者たとひ臨終狂亂すとも。なをこれ往生也と云事。返々ひが事にて候也。若無智の人往生せずといはゞ。彌陀の本願已に機を嫌になる。其理不レ可レ然。他力本願を信ぜば。有智無智みな往生すべし。信心を發して後は。學不學は。人の心に隨ふべきなり。然を其智淺くして。學を好む輩。人をそしり。已をほめんが爲に。如レ此說をいたすか。また臨終正念なりとも。往生を不レ可レ得と云事。本願を信ずる人。正念に住せん上は。何ぞ往生せずと云べき。本願を信ぜざる輩の。臨終正念は。實に往生と定がたし。不信の人は臨終をもて。信者をみだる條。無二其謂一候。又學生は臨終狂亂すとも。往生と定べしと云事。經文の中に。其文。惣じて見及候はず。又道理不レ可レ然。凡極樂におきては專本願を信ずるによる。又學生によらず。又無智によらざる也。信心若發ば。有智も無智も。臨終は必ず正念に住すべし。何ぞ學生に至りて。二正念を捨や。若學生なりとも。臨終狂亂せんは。是本より信心なき故也。但下品下生の此人。苦逼不遑念佛等の文に異義を成ずる輩候歟。此文の心は只死苦の失念なり。全狂亂顚倒の相にあらず。されば釋には臨終正念金花來應也といへり。たとひ病死の苦痛ありとも。念佛の行をこたらずば。必ず正念と云へる義也。凡苦痛與二顚倒一。其體大に異なるゆへに候。如レ此の妄說不レ可レ有。御信用。只一向本願を憑て。御念佛不レ懈候事。可レ爲二本意一候也云々。本師上人の義理は請文の旨にあらはれ。善惠上人の存意また今の消息等に見えたり。善惠上人已に自筆をそめ。判形をすえらる。末代の龜鑑也。仰て是を信ずべし。然を善惠上人の門流と號する人々の申に義理若本師上人の請文。善惠上人の消息に違する事あらば。全善惠上人の義にあらず。末流の私の今案なるべし。あなかしこ。末の濁

一日一本朔日に作る

又一本復に作る

一日一本朔日に作る

十五日一本二十五日に作る

れるをもて。源のすめるを。けがす事なかれ。

法然上人傳記卷第三下

卅八　上人三昧發得事
卅九　靈山寺念佛時勢至菩薩立列給事
欠　勢至菩薩被示丈六形像事
四十　阿彌陀三尊出現事
四十一　聖光上人事
四十二　天王寺西門事
四十三　鎭西修行者以下問答事

卅八　上人三昧發得事

上人行業年積り。念佛功闌て。建久九年正月より以來。極樂の莊嚴。化佛菩薩を拜給事。常にあり。彼三昧發得の次第は。自筆にしるし置給へるを。存生の間に祕藏して。人にしられず。沒後にやうやく流布する處也。高野僧都明遍

遍世後號空阿彌陀佛

披見して。隨喜の涙をながされけり。彼自筆の記云。生年六十六建久九年戊午正月一日。恆例の正月七日の念佛。これを勤めおこなふに。一日明相すこし現じて自然に甚明也。二日に水相觀自然に成就す。都七箇日の中に。地相觀の中に瑠璃の地いさゝかあらはる。二月四日の朝。瑠璃の地分明に現ず。六日の後夜に瑠璃の宮殿現ず。七日の朝重て又現ず。正月一日より二月七日に至るまて三十三ヶ日の間。水想。寶地。寶樹。寶池。宮殿等の五觀現ず。是則毎日七万遍の念佛不退にこれを勤によりて見處也。二月十五日より。あかき所にして目をひらけば。眼根より赤き袋を出生して。瑠璃の壺を見る。是よりさきには。目を閉ればこれを見。目を開けばこれを失しに。其後。右の目より光明をはなつ。其光の端あかし。又眼に瑠璃あり。其形瑠璃の壺のごとし。瑠璃の壺にはあかき花あり。寶瓶のごとし。又日沒の後に出て。四方を

見れば。方毎に青くあかき寶樹あり。其たかさ定なし。高下心にしたがひて。或は四五丈。或は二三丈也。九月廿二日朝に。地想分明に現ず。周圍七八段ばかり也。同廿三日後夜。及び朝旦に。また分明に現ず。正治元年乙未八月時正七日の別時の間。淨土の依正しきりに現ず。又左右の眼より光をはなつ。心蓮房粗是を見て。源空にかたる。源空嘆じておどろかず。同二年庚申二月。地想寺の五觀。行住坐臥に心に隨て任運に現ず。元久元年辛酉正月廿五日。面の持佛堂の勢至菩薩の御後に。丈六ばかりの御面三度現ず。このぼさつは念佛をもて所證の法門とし給がゆへに。今念佛者の爲に。其相を示現し給へり。これ違疑すべからず。同廿八日。座所の下より初めて四方一段ばかり。青瑠璃の地となる。二月八日の後夜に。鳥の音。琴の音。笛の音をきく。その後は日にそひて。自在に種々の音聲をきく。同二年壬戌八月時正七日の別時の間。初日に地想觀現ず。第二日の後夜晨朝に又分明に現ず。第三日より第七日に至まで。地想。寶樹。寶池。寶樓等。行住坐臥心にまかせて任運にこれを見る。十二月二十八日午時。持佛堂にして。高畠の少將に對面の時。例のごとく念佛して。阿彌陀佛の後の障子を見れば。透徹て相好現ず。其勢丈六の佛面のごとし。元久三年丙寅正月四日。念佛の間に三尊の相を現ず。同五日。又三尊大身をあらはし給と注し給へり。實にこれ念佛三昧現前の相分明なるもの也。上人常に心に付て誦し給ける文に云。上來雖說定散兩門之益。望佛本願。意在衆生一向專稱彌陀佛名。かくのごとく心しづかに稱名念佛し給ふ時。忽に三昧發得して極樂の莊嚴及佛菩薩の眞身を拜し給ふ所也。又三昧發得の御歌には。

あみだ佛と申はかりをつとめにて
淨土の莊嚴見るそうれしき

卅九　靈山寺念佛事

靈山寺にて。上人三七日不斷念佛の間。燈なくして光明あり。第五晨夜。各々行道し給に勢至ぼさつ同く列に立給へる事を。信空上人夢のごとくに拜み奉りて。上人に此由を申に。さる事侍らんと答給ふ。餘人はさらに拜する事なし。或時上人念佛してまし〳〵ける時。勢至菩薩來現し給へり。誠に淨土のちかひ。たのもしきを。今離三途の說。これひとへに念佛三昧成就獲得の證也。仍此聖容は。一丈六尺に示給けるを。白氈一鋪にうつしとゞめ奉りて。永き世の本尊にしたてまつる。これ眼前の降臨也。更に夢幻にあらず。若念佛者。當知此人。是人中芬陀利花。觀世音菩薩。大勢至菩薩。爲其勝友。當坐道場。生諸佛家の文たがふ事なし。

四十　阿彌陀三尊出現事

上人つねの居所を。あらさまに立出て。歸り給たりければ。阿彌陀の三尊。繪像にも。木像にも非ずして。垣をはなれて。坂しきにもつかず。天井にもつかず現給ふ。無量壽佛化身無數。與觀世音。大勢至。常來至此。行人之所の文も。いよ〳〵その馮みふかきもの也。

四十一　聖光上人事

鎭西の聖光房辨阿本名辨長。山門の住侶也。證眞法印の門弟として。天台宗の奧義を究しかども。三十三のとし。舍弟三明房阿闍梨の頓死せしを。まのあたり見給ひて。眼前の無常におどろき。身の後の資糧を求て。忽に所學の法門をさしおき。極樂の往生を願ふ。建久八年五月に。初て上人へまいりて淨土の法門を學す。翌年建久九年に選擇を授ける。其詞には。これ月輪殿の請によりて撰所也。汝は法器の仁也。此書をうつして末代にひろむべしと。上人の室に入て後まづ豫州へ遣れて。念佛を弘通す。鎭西にかへりて。一寺を建立して。善導寺と號す。爰にある淨土宗の學者。法然上人より相承すと稱して。鏡像圓融の譬をあげ。金剛寶戒の名をもて。淨土宗

燈の下一本火の字あり
五の下一本晨の字無し
淨の上一本歸於の二字あり
擇の下一本集の字あり

の甚深の祕義とするゝしを申間。元久二年二月に法然上人に尋申さるゝ聖光上人の狀云。淨土宗の小僧辨長。上人の御房の法座前へ。誠惶誠恐謹言。

二箇條疑問事

一　鏡像圓融疑問事

二　金剛寶戒疑問事

一。鏡像圓融疑問者。所謂或淨土宗學者。向天台宗學者相語云。天台宗與淨土宗。其義是一致也。所以天台宗以鏡像之譬顯圓融之法。淨土宗亦復如是。以此鏡像圓融之義爲淨土宗最底。是則淨土宗甚深義也。暫善導和尚爲誘引初心之人。制止難行勸進專修。理實以鏡像圓融之譬得其心。爲後心之人。天台淨土是則一同也云云。天台諸宗之人者。以鏡像圓融之譬用淨土宗最底者。以淨土宗不可立別宗。只以天台摩訶止觀等可立淨土宗。何故以天台宗之外可立淨土宗哉。又小僧辨長號上人御房法座前。常雖蒙淨土教訓之條。於此義者未曾聞也。但依機未熟不蒙此御教訓歟。何況小僧。善導所造和國到來西方化導八卷文證之中。於鏡像圓融之文。更以未見之處云々。又自本依不存此御言不示此義給哉。又小僧辨長自幼稚之昔。稟天台之流。於鏡像圓融之法門者。或時口誦文證。或時心推義理。但於長大之今。列淨土之座。承上人御房御義之時。異國漢朝先賢先哲。於淨土法門各書義時。其義爾菊也。但於其中。善導禪師之御義。往生之甘露也。所謂分別專雜二行。選擇正助二行。棄雜取專兼助志正。吾淨土宗尤爲元意。如此御教訓常蒙之。於鏡像之義爲淨土宗骨目云事。未蒙其仰。若爾者且爲專修堅固。且爲謗家對治。蒙其義決之狀如件。

二。金剛寶戒疑問者。或淨土宗學者云。付淨土宗有二戒品。所謂金剛寶戒是也。於諸宗戒品是異也。密々口傳所傳之也。是吉水上人御房

之傳也云々。小僧辨長救云。吉水上人御房御義全以不然。淨土宗者。只彌陀本願專修正行也。以此一行爲往生正路。全以不兼餘行。何以於此宗令付金剛寶戒哉云々。以前二ヶ條。爲決斷弟子之疑問。爲對治諸宗謗難。又爲停止一家狼藉。又爲印持末代專修。上人御房御在世之時。錄子細言上者也。早住哀愍慈悲之御心。決斷左右進退之是非。賜御證判。停止彼狼藉之僻見。欲立此專修之一行。子細言上如件。沙門辨長。誠惶誠恐謹言。

元久三　月　日

就之上人以自筆被勘付云。已上二ヶ條。以外僻事也。源空全以如此事不申候。以釋迦彌陀爲證。更如然僻事所不申候也云々。上人の常の仰には。山の住侶なを契あるべし。況や辨阿甚深の同侶。後世菩提まで契たりし人のありしが。源空が弟子となりて。八ヶ年受學せる也。と稱美せられける上に。淨土の法門におゐて。所存をのこさゞる條は暗に知られたり。何況すでに誓文を被載畢。往生淨土の業因におきて。專修の行なるべしと云事仰て信ずべし。聖光上人は。上人教訓の正義を傳へ。勸化更にあやまりなし。化導としふりて後。種々の奇瑞をあらはし。嘉禎四年閏二月二十九日未尅に。年來の所願によりて。一字三禮の自筆書寫の阿彌陀經を持ながら。端坐合掌し。稱名相續して。最後に光明遍照の一句をとなへて。眠がごとく往生し給き。抑勢觀上人は。少內府の六男備中守師盛の息也。幼稚の昔より法然上人に內府奉りて。本尊聖教以下悉皆附屬にあづかり給ひし上は。所立の法門と。源智相承の義立と全くたがはざりける歟。嘉禎三年九月廿一日に。聖光上人へ送られける狀に云。相互不見參候。年月多く積候。于今存命。今一度見參。今生に難有覺候。哀候

者歟。抑先師の念佛の義。末流濁亂。義道不レ似
昔不可說に候。御邊一人正義傳持之由承及候。
返々本懷候。喜悅無レ極思給候。必遂二往生本
望一。奉レ期二引導値遇緣一候者也。以二便宜一捧二愚
狀一。御報何之日拜見哉。他事短筆に難レ盡候。恐
々謹言。

九月二十一日　　源智云々

弟子の下一本に無し

其後。聖光上人附弟子然阿上人と。勢觀上人附法の弟子蓮寂上人と。東山赤築地にして。四十八日の談義をはじめ。然阿上人を讀口として。兩流を挍合せられしに。一として違する所なき間。日來勢觀上人の申されし事符合せるによりて。予が門弟におゐては筑紫義に同ずべし。更に別流を不レ可レ立。蓮寂上人約諾をなされし後は。勢觀上人の門流を不レ立者也。當世筑紫義と號するは。彼聖光上人の流也。

四十二　天王寺西門事

高野明遍僧都。上人所造の選擇集を見て。よき文にて侍れども。偏執なる邊ありと思ひて。寢たる夜の夢に。天王寺の西門に病者數もしらずなやみふせり。一人の聖ありて。鉢にかゆを入て。匙をもちて。病人の口ごとに入る。誰人ぞと問ば。或人答て法然上人也と云と見てさめぬ。僧都思はく。我選擇集を偏執の文とおもひつるを。夢に示し給なるべし。此上人は機をしり時をしりたる聖にてまし〳〵けり。病人の樣は。始には柑子。橘。梨子。柿ていのものを食すれども。後には其もとゞまりぬと。水をもちて。のどをうるほす計に。命をひかへて侍也。この書に一向に念佛を勸られたるにたがはず。五濁濫漫の世には。佛の利益も次第に減ず。この頃はあまりに代くだりて。我等は重病のものゝごとし。三論法相の柑子。橘もくはれず。眞言止觀の梨子。柿もくはれねば。念佛三昧のうき〳〵にて。生死を出べき也とて。上人へ參て懺悔し。專修念佛に入給ふにけゝ。夢にとりわき

て。天王寺と見られけるも。由緒なきにあらず。此寺は極樂補處の觀音大士。聖德太子と生て。佛法を此國に弘め給べし最初の伽藍也。彼鳥居の額にも釋迦如來。轉法輪所。當極樂土。東門中心とかゝれたり。和國に生をうけむ人は。尤此念佛門に歸すべきなり。

四十三　鎭西修行者以下問答事

鎭西より來れる修行者。上人に問奉りて云。稱名の時心を佛の相好にかくる事は。いかゞ候べきと申けるを。上人いまだ言說し給はざる先に。傍なる弟子。可レ然と申ければ。上人の曰。源空は不レ然。若我成佛。十方衆生。稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺。彼佛今現。在世成佛。當知本誓。重願不虛。衆生稱念。必得往生と思計也。我等分齊をもて。佛の相好を觀ずとも。更に如說の觀にあらじ。ふかく本願を憑て。只口に名號を唱ふ計り。縱令ならざる行也とのたまへり。內外博覽の上人なを如レ是。況淺智愚鈍の族をや。ゆめ〳〵さかしき心をもたずして。只稱名を可レ勤也。又或人問奉て云。人多く持齋を勸侍り。何樣に存べく候やらんと。上人曰く。尼法師の食の作法は尤可レ然。但當世は機已におとろへ。食又減ぜり。此分齊にて一食ならば。心偏に食を思ひて。念佛の心靜なるべからず。されば菩提心經には。食不レ妨二菩提一。心能妨二菩提一といへり。持齋全く往生の正業にあらず。只自身の分齊に隨て念佛に倦べからず。懈怠なきほどをあひはからひて。念佛を相續すべき也。又或人問奉りて云。上人の申させ給御念佛は。念々ごとに佛の御意に叶ひ候など申けるを。いかなればと。上人返し問せ給ひければ。智者にておはしませば。名號の功德をも悉くしろしめし。本願の樣をも明に御心得あるゆへにと申ける時。汝本願を信ずる事まだしかりけり。彌陀如來の本願の名號は。木こり草かり。なつみ水くむたぐひのごときの。內外ともにかけて一文不

通なるが。唱れば必生ると信じて。眞實にねがひ。常に念佛申を最上の機とす。若智惠をもつて生死を可レ離ば。源空いかてか彼聖道門を捨て。此淨土門に趣べきや。當レ知聖道門の修行は。智惠を極て離二生死一。淨土門の修行は。愚痴にかえりて生二極樂一。又或天台宗の人問奉て云。佛敎多門にて生死を出る道一にあらず。其中聖道門は法花に須臾聞之卽得究竟ともいひ。取證如反掌ともいへる一類頓悟の類は暫くこれをさし置。敎のおきてに付て。次位の階級を定め。修行の方軌を明らめたるには。十信万劫の修行を送りて後。無生忍の位には叶と談ぜり。然を淨土門に十惡五逆をつくる罪惡の凡夫なれども。知識の敎をうけて。纔に一念十念の口稱念佛により て忽に報土得生の益を得て。刹那の間にたやすく無生忍の位に叶といへる事。大に不審にて候。抑六字の名號にて。いかなる功力の候へば。万行にこえてかゝる不思議の奇特をば備候やらんと。上人答給はく。彌陀因位の時。一切衆生に代りて。兆載永劫の間。六度万行。諸波羅蜜の一切の行を修して。其功德を悉く六字の名號に納られたる間。万行万善諸波羅蜜。三世十方の諸佛の功德の。六字の名號にもれたるはなし。故に是を極善最上の法とも名く。されば惠心僧都の。因行果德。自利利他。內證外用。依報正報。恆沙塵數。無邊法門。十方三世。諸佛功德。皆悉攝在。六字之中。是故稱名。功德無盡と判じ給へるは此心也。彌陀の本願に。此名號を唱て極樂に生れんと願はん衆生をば。聖衆とともに來て迎接すべし。此願若成就すまじくば。衆生とともに地獄には墮とも佛にならじと。四十八の誓ひ事を立給ひしに。此願已に成就するゆへに。成佛し給て十劫以來也。故に極惡最下の罪人も。此名號を唱ふれば。万行万善の功德を得。因位の本願にこたえて迎接し給はん。故に本願不思議の力にて。須臾の間に報土に生て。

刹那のほどに無生の悟をひらかん事。何の疑かあるべきや。一念に無上の功德を得る名號也。更に一念十念の功少しとは不レ可レ思とぞ仰られける。惠心の正觀の記の中に云。當レ知阿彌陀名號三字には。具に備二二千三百九十五卷大乘經。六百八十卷小乘經。五十五卷大乘律。四百四十一卷小乘律。五百五十卷大乘論。六百九十五卷小乘論。五百九十三卷賢聖集法門一亦具二金剛界一千四百五尊。胎藏界五百三尊。蘇悉地七十三尊一故唱二阿彌陀三字一卽唱二五千三百十二卷一切聖敎一阿彌陀經執持名號。爲二大善根一其意在レ斯。長舌證誠。誰か不レ生レ信矣。又名號に万德をおさむる事分明也。誰か此義を疑はんや。又或人問奉て云。毎日の所作に六万十万等の數遍を當て。しかも不法なると。二万三万を當て如法なると。いづれを正とすべく侍らんと。上人の曰。凡夫の習。二万三万の數遍をあつと云とも。更らに如法の義にあるべからず。只だ數遍のおほからんにはしかじ。所詮心をして相續せしめ。只常念の爲也。數を定むるを要とするにあらず。數を定ざれば。懈怠の因緣なれば。數遍をすゝむる也。と仰られけり。高野僧都明遍は數遍は不實のきはまりとて。不受せられけるが。或時修行者一人來て。毎日の念佛は。いくらほどを所作と定め侍らんと尋申けるに。御房は幾程を申さるゝぞと返し問れければ。百万遍を申よしを答ける時。例の不實の者をと思はれける間。返答に及ばずして內へ入られにけり。修行者も歸にけり。僧都ちとまどろみ給ふに。毎日百万遍の行者をいひ妨る事。然るべからずとて。以外に氣色あしくして。我は是善導也と仰らるゝと見て驚きたれば。遍身に汗をながし。胸さわぎて身心おき所なく覺ければ。後。修行者をよびて懺悔せむが爲に。手分て山中をたづねけれども。見えず成にければ。時尅をも隔ず。たとひ下向すとも幾程のぶべからずとて。使ども走立て

退けれども。遂に見へざりければ。僧都申されけるは。日來はやくりの數遍を不受する事。佛意にそむく間。告示されける也。實の修行者にはあらざりけりと。其後は百万遍の數遍をせられけるが。手に念珠をまはすはおそしとて。木をもちて念珠をふりまわして。數をとられければ。明遍のふり〳〵百万遍とぞ人申ける。所詮上人も念佛相續の爲に數遍をすゝむるよし。仰られけるうへは。仰て信をとるべし。及ばざる意樂をおこして數遍を難ずる事なかれ。

法然上人傳記卷第四上

或本以下爲中卷

一　羅城門礎事
二　淨土宗興行事
三　信寂房事
四　敎阿彌陀佛事
五　女人往生願事
六　作佛房往生事附神明和光事　已上六段

一　羅城門礎事

正治二年四月十二日。農夫羅城門の前の田耕作せし時。礎の石を堀出事有けり。此石に文字あり。農夫あやしみて人にかたる。月輪殿是をきこしめされて。成信。孝範。爲長。宗業の四人の儒者を遣はして見せられけるに。三人一向に是をよまず。孝範一人は年號計をよめり。各々歸參して此文更に文道の事にあらず。佛法の事かと申ける間。春日中將を御使として。法然上人へ仰られければ。上人彼所へ向て是を見給て後。落涙甚し。しばらく有て。腰より檜木の骨の紙扇をとり出して。是をうつして持參せらる。彼文云。前代所傳皆是聖道　上人敎法。未ㇾ弘ニ我朝一者此宗旨也。大同二年中春十九日執筆。嵯峨帝國母云々。文の心を御尋有けるに。上人のたまはく。大同年中には。淨土敎門未本朝にわたらざりしかば。聖道門に對して淨土門を。未吾朝にひろまらざる

ア淨土恐らくは報土の誤ならん

イ宗の下一本義の字あり

は此宗旨也とは云給へり。此國母は韋提希夫人の再誕也。不審候はずとぞ仰られける。此石は長六尺。廣四尺。文字八寸。古文字也。宇治の寶藏にぞ納られける。誠に不思議にこそ。

二　淨土宗興行事

上人の談義の砌にて語て曰。我今淨土宗を立る意趣は。凡夫の往生を示さんが爲也。若天台の敎相によれば。凡夫の往生をゆるすに似たりといへども。淨土を判ずること至て淺薄なり。若法相の敎相によれば。淨土を判ずる事甚深なりといへども。全く凡夫往生をゆるさず。諸宗の所談異也といへども。惣て凡夫淨土に生ずと云事をゆるさず。故に善導の釋義に依て淨土宗を興ずる時。卽凡夫報土に生るといふこと顯るゝ也。爰に人多く誹謗して云。必宗義を不立とも念佛往生を勸むべし。今宗義を立事。只是勝他の爲也と。若別の宗をたてずば。何ぞ凡夫報土に生る義をあらはさんや。若人來て念佛往生と云は。是何の敎。何の宗。何の師の心ぞと問はゞ。天台にも非ず。法相にもあらず。三論にも非ず。花嚴にもあらず。何の宗。何の敎。何の師の意とか答へんや。是故に道綽。善導の意に依て。淨土宗を立。これ全く勝他の爲にあらずと云べしとぞ。

三　信寂房事

播磨信寂房。上人へ參たりけるに。上人のたまひけるやう。入道殿こゝに宣旨の二侍るを。取ちがへて筑紫の宣旨をば坂東へ下し。坂東の宣旨をば鎭西へくだしたらんには。人用べきかと。信寂房且く案じて。宣旨にて侍れども。たがへたらんをば。いかゞ用べきと申ければ。御房は道理を知る人かな。やがてさぞ。帝王の宣旨とは。釋迦の遺敎なり。宣旨二ありと云は。正像末の三時の遺敎也。聖道門の修行は正像の時の敎なるが故に。上根上智の輩にあらざれば用べからず。是を西國中國の宣旨とす。淨土門の修行は末法

濁亂の時教也。故に下根罪惡の輩を器とする也。是を奥州の宣旨とす。然則三時相應の宣旨。是を取たがへずば。教として何の行か成ぜざらんや。大原にして聖道淨土の論談ありしに。法門は牛角の論なりしかども。機根くらべには源空は勝たりき。聖道門は深といへども。時過ぬれば今の機に叶ず。淨土門は淺に似たりといへども。當根に叶易しといひし時。末法万年餘教悉滅。彌陀一教利物偏增の道理にをれて人みな承諾し。念佛門に歸せり。然を今諸方の道俗を見聞するに。おほく有名無實の行を面に立て。互に嫉妬の瓦礫荆蕀みちふさがりて。眞實の白道をさへたり。是豈悲の切なるにあらずや。

教一本經に作る

給エり一本たまふに作る

侍オ一本歸に作る

四　教阿彌陀佛事

河内國に天野四郎とて。大强盜の張本にて。人を殺し財をかすむるを業として。世をわたる者ありける。歳漸に闌て後。上人の念佛弘通の趣を承て心を發し。出家して教阿彌陀佛とて。左右なき念佛者と成て。常には上人へ參て念佛の法門を承ける。或時上人へ參てけるに。人一人もなかりければ。今夜は御とぎ仕らんとて留ぬ。靜まりて後。夜半計と覺る程に。上人やはらおき居て。如法しのびやかに息の下に念佛し給エりとおぼしき事有けり。よく〳〵忍び給ふ氣色を知て。つゝむとすれど。かなはずして。教阿彌陀佛。しはぶきしたりければ。此僧にしられぬとおぼしたる氣色にて。上人打臥たまひて。寢入たるよしにて其夜もあけぬ。教阿彌陀佛は。此行法の樣を聞ておぼつかなさ限なけれども。憚を存て尋ね申さず。さて遙に程經て後又參ければ。上人は持佛堂に御坐して。聲を聞給ひて。教阿彌陀佛か何事ぞこれへと仰られければ。持佛堂の緣に參りて。教阿彌陀佛は淺間しく無緣のものにて侍る間。在京なども叶がたく侍れば。相摸國河村と申所に。相知たる者の侍る賴てまかり侍べし。今は歳も罷よりて侍れば。又見參

あらざらん一本あかさざらんに作る

に入べしとも覺え侍らず。本より無智の者にて侍れば。甚深の法門を承て候とも。其甲斐あるべしとも覺候はず。只詮を取て決定往生仕べき樣の御一言を蒙らんと申ければ。上人の曰。先念佛には甚深の義といふことなし。念佛申者はかならず往生すと知計也。いかなる智者學生といふとも。宗にあらざらん甚深の義をば。爭造出していふべきや。甚深の義あらんと云事。ゆめ〳〵疑思ふべからず。但念佛は易き行なれば。申人は多けれども。往生する者すくなきは。決定往生の故實をしらぬ故也。去月に又人もなくして。御房と源空と只二人有しに。夜半計に忍やかに起居て念佛せしをば。御房はきかれしかと仰られければ。寢耳にさやらんと承候きと申ければ。其こそ嚮て決定往生の念佛よ。虛假とてかざる心にて申念佛は往生せぬ也。決定往生せんと思ふには。かざる心なくして誠の心にて申べし。いふにかひなきおさなきもの。もしは畜生などに向ては。かざる心はなけれども。朋同行はいふにおよばす。其外。常になれたる妻子眷屬なれども。東西を辨る程の者になりぬれば。其が爲にかならずかざる心は起る也。人の中にすまんには其心なき凡夫はあるべからず。すべて親も疎も貴も賤も。人に過たる往生の怨はなし。それが爲にかざる心を發して。順次の往生を遂ざればなり。さりとて獨居も叶ず。いかゞして人目をかざる心なくして。誠の心にて念佛も申べきと云ふ。常に人にまじはりてしづまる心もなく。かざる心もあらん者は。夜さしふけて見る人もなく。聞人もなからん時。忍やかに起居て。百遍にても千遍にても。多少心にまかせて申さん念佛のみぞ。かざる心もなければ。佛意に相應して決定往生はとぐべき。此心を得なば。必しも夜にも限らず。朝にても晝にても暮にても。人のきくひまなからん所にて。常に如ㇾ此申べし。所詮決定往生を欣。眞の念佛